
[Intelligence crisis **ファースト**]

蒼雲 騎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「 Intelligence crisis ファースト」

【Nコード】

N3817G

【作者名】

蒼雲 騎龍

【あらすじ】

20XX年、時代は大きく動いた。恐ろしい“地球の嘆き”が起こり、非核に突き進んだ世界。しかし、22世紀を目前にして、蠢く闇の本流がうねりを上げた。それは、・・テクノロジーが、知識が産み落とした悪の鼓動だった。今、その悪と戦う運命の男達が動き出す

「欲望の産物 FILE 1」

isis ファースト 欲望の産物
「Intelligence cr

序章

20XX・春

世界を未曾有の恐怖が襲った。

新興宗教‘chaos Eden’が大クーデターを起こしたので
在る。

教団が開発した新型コンピューターvirus‘マードーキル’を
全世界で一斉に感染させ、交通機関から通信機関を一時的に大混乱
に陥れ、その隙に一斉決起。世界40ヶ国で、どの様にしてか大
勢の傭兵達を雇い。核エネルギー施設や軍部を占拠。世界に
対して、莫大な金を要求した。其の額1兆ドル

世界連合軍は、それに対して要求を退け、戦争に突入した。

しかし…。

教団は、どうゆう訳か。 アメリカ・中国・ロシアの核発射コード
を手に入れていた。

連合国軍は、核発射コードの安全は確保されていると判断していたのに、それが反対だった。

3ヶ国から計12発の核ミサイルが発射された。

全弾発射されなかったのは、連合国軍のコンピューター組織部隊が食い止めた為だ。

だが…。予めから入力されていた予定地に落下…。事態は最悪のケースであった。

核爆弾は東京・ニューヨーク・ベルリン・上海・サンクトペテルブルグ・ローマ・オタワなど9都市に墜ちた。

教団との戦争は、核落下後3ヶ月ではほぼ連合国軍が教団に占拠された主要施設を奪取し。各国の占拠された核エネルギー施設のみを残して、完全勝利目前に迫る。

しかし教団の教徒達と傭兵達は、最後の砦として核エネルギー施設に立てこもり。連合国軍が核と云う危うい施設故に手を拱く中、激しい抵抗を試み、最後は施設を爆破する自爆行為による殉死と云う最悪の幕引きと成ってしまった。

世界を未曾有の混乱の中に叩き落した、一宗教の世界規模のテロ。

戦争後の世界は、長く辛い復興を迫られたのは、言うまでも無い現実だ。

コンピューターvirusによるダメージ、首都・主要都市、主要施設の破壊、水爆による夥しい死者と放射能汚染による数々の後遺

症……。人、大地、環境が汚染され、資金難に全ての国が喘ぎ。
遂に、世界レベルでの核エネルギー廃止運動が巻き起こる。

在る一人のジャーナリストが、今回の大事件を、人の知識が引き起こした悲しい事件として報じた事から、「地球の嘆き」と謳われ、世界で非核エネルギー・非核武装が促進する結果となる。

「世界の嘆き」から5年後、核武装・核エネルギー廃止法が国連法の決議で賛成98%という大差で可決。

10年後、世界から核ミサイルは姿を消した…。

それから、半世紀以上が経過した…。

1. ルバルト・ナイツ・ウォーカー

20XX年・22世紀まで、残り5年も無い12月の初めのこと。

寒い曇り空の朝、NEO ARKの中央区の8丁目を男が歩道を歩いている。

男が歩いている左右はビルだらけ、大都市を思わせるのも当たり前で。この都市は、核ミサイルによって碎け散った大都市ニューヨークの新しく生まれ変わった都市なのだから。

都市人口は500万人超、日中は地方や周辺各地から外国から人が

来るから、1500万人は居るだろうか。男が歩いている歩道脇の路肩は、違法駐車の前が犇いて占有し、朝の通勤ラッシュの中で、道路上は絶え間ないk l i a x o nのメロディーが雑踏を慌たたくさせる。

歩道も、地下鉄から溢れ出る客と通勤者で騒がしく、露店のファーストフードから来る匂いが、少しうざったい。

男が歩いているこの区画は、役所など公的機関や法人などの集合区画だから、朝の通勤ラッシュは半端な混雑では無かった。

歩く男は藍色のコートとスーツに身を包む。身長は、190近く。スラリとした体は無駄が無く、前髪以外はバツクに流す。髪色はブラウンカラーで、中々の男前であった。

彼の名前は、ルバルト・ナイツ・ウォーカーと言う。FBIの敏腕捜査官で、主に殺人課である。州を跨る猟奇殺人や連続殺人などを手掛けて、検挙率はハイアベレージを維持していた。

ただし、ルバルトは捜査官としては鬼だが、飼い犬に成ってはいない。捜査方針も無視する事も屡々、酒と女が夜の友と云うやさぐれ捜査官でもある。

しかしながら、まだ34にしてその学歴も業績も目を見張るものがあった。

8丁目のど真ん中に聳える、FBIのNEO ARK支部と市警本部。下10階部分は横幅400メートル、縦幅500メートルの面積に鎮座する要塞。此処は、NEO ARK市警察の建物であり、FBIの支部はその上に建つ50階までの上の部分を指す。

ルバルトが警察施設に來ると、ルバルトを知る警察官が親しげに朝の挨拶をしてくるから。ルバルトも、笑顔で。

「おはようさん、マイケル。昨日は奥さんと頑張ったか？
頭乱れてるぜ」

「馬鹿を言つな。毎日乱れてるさ、寝相悪いからな」

「おはよ、ルバルト」

「おう、おはよ。今日も麗しいね」

「捜査官、おはよう」

「お、ケイス、おはようさん」

警察部分とFBI捜査官の施設の入り口は違つが、ルバルトは平気で表入り口の警察部分から入り、朝から慌ただしくこつた返す受けロビーを抜けて左奥のFBI施設へ上がるエレベーターへと向かった。

防弾ガラスの自動ドアが、市警察とFBIの支部の敷居になっている。ドアを開いた中は、円形のフロアに成っていて、中央には上に行く5つの背を向かい合わせた丸みのあるエレベーターが。ゴンドラが上下する筒状のトンネルは、銀色の美しいモニュメントのようだ。

しかし、その手前には金属の枠と電車の自動改札機のようなゲートが

在る。

ルバルトは、ゲート前に立ち、

「ID25687432、ルバルト、出勤だ」

すると、ゲートから機械音声がする。

「ルバルト出勤認めます。 今日も、アルコールと香水を纏っていますね。 少しは慎んでください」

「ふん、女も抱けない機械に言われたか無いね」

「女性は愛する物です、おはようございます」

「同じ事さ」

ルバルトは、ゲートを潜り抜けてエレベーターへと入り、28階へと向かった。 人工知能を有する警備システムで、世界最先端のテクノロジイーだ。

“地球の嘆き”後、復興は世界各都市バラバラで、金の在る国から進んで行く。 だが、コンピューターの進んだ技術が支配し切らないのは、あのテロ戦争で人々が機械に対して恐怖を覚えた証なのかも知れない。 先進技術を取り入れたビルや施設でも、何処かにアナログの部分が残る。 戦争の爪痕が、技術の促進と遅滞を促し。

80年前と格段に進んだ分野と、滞らせた分野と二分した結果だろつ。

ルバルトは、自分の所属する課の在る階に下りた。

FBI殺人課。 毎日起きる殺人犯罪の中でも、特に猟奇殺人は年々内容が悪化し、狂氣的な殺人が増える。 警察官達と共に、精神的におかしくなりそうな死体を前にしたり、狂氣的な犯人と対峙する事が多い課で在るが故、配属されても最後まで継続出来る人間は数少ない。

取り分けルバルトは、あらゆる面で最も最悪のケースの事件ばかりを担当する。

しかしながら、ルバルトは警察官に傲慢な態度はしないし、時には手柄を警察に預けたりもする。

その反面、女と酒にはいい加減で、同じ捜査官には嫌われる風潮があった。

ルバルトを信頼しているのは、同じ捜査官でルバルトの前の敏腕捜査官で、定年間近なチャダンと中年捜査官のオフマン。 他は、受付などに居る女性達で、殺人課や統括部などのお偉方には嫌われている。

だが、長官や副長官などはルバルトを評価しているから、ルバルトを表だつて攻撃はして来ない。

そもそも、ルバルトはイギリス人である。 しかも、家は由緒ある公爵の血筋、大学はオックスフォードを3年、ハーバードを2年、両大学院を1年づつで卒業し、FBIに入ったスーパーエリートだった。

所が、このルバルトと人物は、出世にはほとんど興味が無いらしい。

だが、行動は派手で、殺人の裏に居る黒幕すら平気で引きずり出すなどの強行する。大物政治家だろつが、大会社の社長だろつが地位など構わない。権力と金を笠に着る者に対しては、容赦ない捜査を執る。

その態度から、冷徹な捜査官（frozen・agent）と言われる事もあった。

だが…この日が、有る意味からする彼の運命の日だった。

ルバルトが、自らのデスクの在るオフィスの一角にて、昨日の逮捕した殺人犯の捜査書類を制作していた時だ。

10時頃、コーヒーのお代わりを取りに席を立った。

「ルバルト、お客様よ……」

来たのは黒人の受付嬢ジニー。

「へ、俺に客ね」

スラッとした脚線美をスカートから覗かせ、引き締まったボディの知的美人なジニーだったが。顔は曇っている。

「何か凄く取り乱してるわよ……、ライラさんって云う女性だけどルバルトは、その名前に顔を引き締めた。」

「何？　ライラが？　アレックスに何か有ったか？」

ルバルトは、言つのと動くのが同時だった。

後に続くジニーから居る場所を聞かや、ルバルトはオフィスを軽やかに走り抜けた。

出入りで、ウルサイ主任のパンサムに鉢合わせしたが、向こうの嫌みなど聴かないままに歩き抜いた。

下の階の応接間に、ルバルトは飛び込む様に入る。

「ライラっ」

広さ8畳程の簡易的な応接間にて、若い金髪・ブロンドの可愛らしい女性が泣いていた。

「ルバルトおっ、い・いきなり来てごめんなさい……」

この真冬の寒い中、ライラと云う女性は赤いカジュアルシャツにロングスカートだけの姿だ。直ぐにかなり動転して居るのが解った。涙をポロポロ流し、長いウェーブの掛かった髪も乱れてさせているライラ。

「気にするな。それよりどうした？ 何か有ったか？」

と、ルバルトはライラに近寄って、肩を触る。

ライラは、泣き崩れるかの様に、ルバルトにしがみついた。

「ル…ルバルトお…ア・アア・アレックスがあ…」

「ん？ アレックスがどうした？」

「居なくなつたあ…居ないのおっ…」

ルバルトは、その言葉にジニーを見る。

ジニーは、ルバルトを見て驚いてしまった。

「ジニー、住まないが車を用意してくれ。 ライラを病院に連れ

て行く。 彼女の掛かり付け

の精神科医が居るから」

「わっ解つたわ」

ジニーは、直ぐに動いた。

ルバルトは、ライラの話の聴きつつ宿め、一先ず落ち着かせる為に病院へ連れて行った。

NEO ARKの東側に在る病院にライラを連れて行った。 ジニーが運転して同乗してくれたのは心強く、ルバルトはライラから話を聞いて、医者に後を任せてFBI支部に戻る。

病院から支部へ戻るの車内で、運転するルバルトは、信号待ちに2度目の礼をジニーに述べた。

「ジニー、助かった」

黒いスーツ姿のジニーは、帰りは助手席から笑って。

「いいのよ。　　ディナーでいいわ」

「OK、夜まで頑張る」

「ふふっ」

ジニーは、微笑んだ。　　しかし、直ぐに真顔に成ると、

「でも、どうゆう事？　　アレックスが行方不明だなんて・・・。
しかも彼女、ルバルトとも随分深い知り合いみたいだけど」

ルバルトは、窓から対向車を見て、それを聞いた。

「ま、ちよつと有った。　　それより、アレックスだ。　　花嫁泣

かせてどーする気だ。　　全く、何処に居るやら」

「えっ!？　　アレックスの来月の結婚相手って、彼女なの？」

「そう、じゃ無かったら彼処まで泣かないよ……」

ルバルトは、FBI支部に戻る中、運転しながらアレックスとの過去を思い出していた。

ルバルトがFBIに入ったのが、26歳の春だった。

その同期がアレックス。

ルバルトより一つ下。　　今は、情報管理部に在籍しているが、一年の実務経験後に一緒に殺人課に配属して、チームを組んでいた。

ルバルトが野性味と気品を合わせ持つナイスガイなら、アレックスは絵本から出た王子様って云う所か。

優しく美しい顔立ち、知的で物静かなアレックス。

しかしながら、アレックスは大きな誤解を受ける人物でも有った…。

それは…ホモである。

何せ奥手で、女性とまともにも口も訊けない。しかも、通りで女性に声を掛けられるものなら、ルバルトの背後に逃げるのだから。

だが、理由は在る。

アレックスは、幼い頃にその容姿の美しさから、中年女性に誘拐されたのだ。捕まった女性は、仲良く成りたかったと言っていたが、性的な虐待があったらしいと精神科は判断した。体にも、その痕跡は残されていたからだ。

女好きのルバルトと女性恐怖症アレックスは、とある事件で初めて一緒に成った…。

【連続婦女暴行殺人】

一人暮らしの若い女性の宅に押し入り、暴行した上で猟奇的にいたぶり、徹底的に暴行して殺してしまう。

州を幾つも跨いで猟奇殺人事件だった。その最後の被害者が、ライラである。

ライラが事件に有った日、ライラの部屋に犯人が押し入りつた直後に、捜査していたルバルトとアレックスがライラのアパートに来た。独身女性が多い住宅街に、ルバルトとアレックスは手分けして聞き込みに来たわけだ。

そして、アレックスはライラの部屋に行き、逮捕を恐れた犯人に捕まった。

ルバルトの機転で、直ぐに警察とFBIに連絡が入る。犯人は逃走したいが為に、ライラとアレックスを人質に。

人質を取られた警察と犯人は、数時間に及ぶ交渉に入る。だが、夜も遅くなり始めた頃。ライラを人質に逃走を企てる犯人は、アレックスを殺そうとする。首を絞められていたアレックスは、危うい所を踏み込んだ警察官とルバルトに助けられた。

結局、アレックスはその時の恐怖が後遺症となり殺人課から離れ、情報管理部に移動した。

だが、課が離れてもルバルトとアレックスの仲は離れ無かった。

ルバルトは、事件の被害者や加害者との交流も欠かさない人物だった。

ライラを見舞うルバルトは、アレックスの事を気にする彼女とアレックスが上手く行くのではないかと思ひ。二人を逢わせ、仲を見守って来た。

ようやく、今年に二人が結婚をしようと云う形になった。ライラは、まるでアイドルのような可愛らしい容姿をしている。元々、

フィギュアスケートのメダル候補選手だったのだから。周りからは、お似合いカップルの様に言われたし。双方の両親も、二人の仲に心から応援をしてくれていた。

ルバルトは、その事を思い出しつつ戻った脚のままに、警察の生活相談課に向かった。

ライラが出した捜索願いを担当した刑事に会う。

「あゝ、あの事が。おたく等の捜査官だそうだし、顔立ちがいって、多分は新しい愛人作って逃げ出したんか？ 詰まらん捜索願いさ」

刑事の言葉だ。

ルバルトは、冷静に捉えながらその言葉を貰って、また支部の自分のデスクに戻った。事件調書をPCで作成した後、検事と話し合ったのは夕方だった。

だが。仕事の終わったルバルトは、ジーに挨拶だけ残し、其の日はそのまま一人で街に消えて行った。

2・行方不明の行き先

ルバルトがアレックスを探し回り、上司の言うことを無視して職務規定違反を咎められたのは、クリスマスを間近にした23日…。

呼び出しを受け、ルバルトはNEO ARK支部に留まる長官に呼ばれて、話し合いをする事に。そこでルバルトは長官に、初めて今までの一人捜査の理由を打ち明ける。

藍色のスーツの上下姿のルバルトは、FBI支部の最上階の円卓会議室にて、長官と二人きりになった。

長官は、右側の窓前に座って、60に成るその皺の多い顔を困らせていた。

「ルバルト、今回はちよつと行き過ぎだ。事件は毎日発生している。君に頑張って貰わないと困る」

ルバルトは、大して動じる事も無く、

「では、昔を思い出して長官が捜査されては如何ですか？ 同僚のチャダンは、今だ現役ですよ」

長官は、皮肉を食らったみたいで溜め息をつく。どうも、もどかしい気持ちのようだ。

「長官、アレックスの行方不明は聞いていますか？」

「ああ…一応な、アレックスが警察の言ったような事に成るとは信じられん。また、友人である君が捜査する気持ちもな…。だが、我々は組織として動いておる」

すると、ルバルトは、

「では、今から行方不明者の捜査をウチで遣らせて下さい。多分、いずれそうゆう事態になります」

長官の顔が、ピタリと止まった。

「なんだと?」

長官は、ルバルトの言葉に意味深な匂いを嗅いだ。

「此処最近ですが、NEO ARK だけで通常の2倍近い行方不明者が出ています。調べて行くうちに、色々と不可解な事が解りましてね」

「どうゆう事だ? 我々が捜査しなければならぬと言っているのか?」

「はい」

ルバルトの口調からすると、FBIが必要になると言っているのも同然の言い方であった。

ルバルトは、プリントされた2枚程の書類を長官に見せた。

「?」

読んで行くうちに、長官の顔が引き締まって行くのが解る。

「ルバルト…これは本当なら大変な事だぞ」

「ええ。ですから確かめる手段として、その調査の為に自分自身が行こうと思っています。3日程、休みを頂きます」

その言葉に、驚く長官はルバルトを見た。

「大丈夫なのか？　こんな所に行って、アレックスも行った道なのだろう？」

「はい。　しかしながら捜査対象とする為には、行かなければ成りません」

ルバルトは、強い口調で言う。

「だが、ルバルト…。　アレックスがもし死んでしまったとしたら。　君も危険だぞ？」

「解っています。　でも、確かめなければ…。　これはアレックス一人の問題では有りません」

長官は、それ以上の言葉が出なかった。

ルバルトは、静かに退席していった。

一体どうゆう事が…。

老いた長官は、ルバルトの出した書類に再度目を落とした。　そこには、この数日間に調べたルバルトの入手した情報が書いてあった。

もし、これが本当の事だとしたら、アメリカ全土を揺るがす大事件になるかもしれない。

24日の早朝5時、深い霧の中。

ルバルトはNEO ARK郊外にあるバスターミナルに居た。

深い霧が立ちこめていて、集まった人々10人がお互いを確認する為には、目の前までの間近まで寄らないといけない程だ。

このバスターミナルは、最近ツアーなどの集合地として使われ出したが。回りが工場の倉庫群で、海岸間近。この時間帯に人氣は全く無い。みんなが立っている場所は、倉庫群を囲う坪に沿った歩道上である。

白い息を吐くルバルトは、ハイネックのタイトなブラックセーターに、青いジャケットとズボン姿でバスを待った。

バスは、程なくして直ぐに来た。豪華な二段バスだ。

来たバスは、倉庫群に入る入り口の格子門の前に停車する。

バスに皆が近づいて行くと、バスからバスト豊かなスタイル抜群の美女が降りて来た。

「はい皆様、今日から3日間のナヒゲーターを務めさせていただきます。ジェイル・マーシユと申します。さ、バスにどうぞ、お待たせ致しました」

ルバルトは、5人目でバスに乗り込む事になる。

最後に乗ったのは、可愛いらしい少女と、鋭い目をした長身の中年

紳士である。二人、連れの様だが・・・少女がかなり顔色が悪かった。

バスは、一路ニューヨーク州北部のキャッツキル山地に向かって走る。

バスの一階は、広々としたリビングルーム。ワインセラーもあれば、立派な冷蔵庫も有る。

まず、一階に運転席の後ろにテーブルを囲むソファアが大小3つ。

真ん中よりやや後ろに二階へ行く螺旋階段があり、階段の左右には、クーラーボックスや、ワインセラーや、簡易的なキッチンがある。最後尾に、固定された台の上の大きなテレビを前にする形でぐるっと囲むシアターリビングに成る。

トイレは、その奥に男女共用の物が二つ。

一方、螺旋階段を上がった二階はリラックスルームとなり、くつろいで寝れるベット型シートが幅の余裕を持って15席あり、前方部には曇りガラスの先がシャワールームと成っている。

まるで、このバスが、'動くホテル'の様だった。

今、午前10時過ぎ、バスの前方部のテーブルを囲むソファアには、6人の男女がナビゲーターの美女を含めて喋り合っている。

上のリラックスルームには、あの目つきの鋭い紳士風の中年男と、かなり老いた感じの老人が横に成っていた。

(とんだバスツアーだ)

ルバルトは、長旅13時間の詰まらないミステリーツアーに呆れていた。テレビの見えるシアターリビングにて、横に成って衛星放送の映画特集を鑑賞し続けている。今日は、ホラー系、アニメルパニック特集、で、古い映画から新しい映画までの、動物や怪獣が登場するパニック映画をやっていた。

(以外に面白いな…)

ゴキブリが科学薬品で不気味に巨大化した映画をやっている。

ルバルトと一緒に、口元までをマフラーで隠し、デカイサングラスを掛けている黒髪の若者が見ている。少し、ルバルトと離れて座っていた。

ルバルトは、チラリと若者を見る。痩せ形で黒いロングコートに黒の洗い晒しのシルクワイシャツ、黒いジーンズという姿の若者は、シートの後ろに腕を出して脚を組んで座っていた。

ルバルトは最初の挨拶時に、彼を只の粹がった若者と囁いた老夫婦が、前方部のリビングルームにて若い客と喋っているのだが。しかし、ルバルトが見るに…。

(違う…コイツただ者じゃ無い…)

と感じていた。

マナーを気にして無い風に見える。だが、若者には隙が全く無い。

ゆったりして見せているのに…。

(何者だろうか…)

そう思っていると若者の顔が僅かに動いて、外を見た。

(?)

ルバルトも軽く起きて見てみれば…。

(雨か…こりゃ夕方の山ん中は雪に成るな…)

バスは高速道を走り、黙々と山を目指していた。

やはり、バスが山の参道の道路に入った頃、雨は雪に変わっていた。山間道路に入る手前から、高速を外れたのか、道をすれ違う車の音がしなくなった。

それも其のはずで、バスが山間道路に入った後、人気のない道路を閉じるように金網の扉が閉められた。閉めたのは、繋ぎの作業服姿の男で、そのまま路肩に止まっていた車に乗り込み、去って行く。

そんな事実をバスの乗客は知るよしも無く。ルバルトは、シリーズ3作目になっているゴキブリのパンック映画に飽きて、ずっと一緒に見てきた若者に声を掛けて見ることにした。

「凄い雪になって来たな」。空調効いてても、底冷えするみたいで寒いね」

すると。

「だな。 バスが雪に埋もれないことを祈るよ」

若者が返した。 いい声だ。 少しトーンが高く、通りのハッキリした若い声である。

（喋った。）

ルバルトは、窓の外の雪を見て、この若者が2度だけ立ち、外を観に前に行ったのを覚えている。

「いやいや、ホントだ。 たまの休みで旅行してみたが、雪でオジヤンはいやだよ。 俺は、ルバルト。 NEO ARKで会社員やつてる」

若者は、同じく窓を見て、

「悠貴ゆうきだ、悠貴・アーサー・・・ハーフなんだ。 アルバイトして遊んでる」

「ほく、名前・・・日本語か？。 名前がカンジってヤツなんだな。 大学時代にいたわ、凄い真面目で、勉強ばっかりの日本人」

だが、ルバルトはのんびりとした言い方をしているが。

（アルバイトってのは、嘘だな）

と、思っていた。 根拠は強いて無い。

さて、夕方が早くも迫り、薄暗く為り始めた午後3時。 あの胸の

大きいツアーコンダクターの美女が、今回のツアー内容の書かれた書類を全客に配った。一冊一冊のファイルで配られる。

ルバルトは、貰ってテレビ前のシートにて、彼の若者と二人で眼を通す。

「ほほ、ミステリーツアーね」

ファイルは、開くと同時に映像が流れる。ファイルに人物が浮んで、3Dのビデオ映像を見ているかのようだ。今、本は文字と映像が融合し、マンガは同時にアニメのように見るのが主流である。

ブックファイルは、音読機能も有して、朗読してくれるから若者の文字離れはもう手に負えない。

この旅行は、旅行会社“シャングリラ”と、大手不動産企業との土地開発提携にて開催されているツアーらしい。この山一帯は、あの80年以上前に起こった悲劇、“地球の嘆き”にて、原子力発電所が爆破された。汚染された土地の持ち主だった不動産会社が、系列のバイオ産業会社の協力の下、汚染の浄化を続けた。

今、やっと人が立ち入る事が出来る土地になったが、悲劇のお陰で植え着いた不信の種は根深く、土地の販売が上手く行かない。

そこで、イメージアップの一環としてツアー旅行にて、お客様に宣伝塔に為ってもらう事にしたい。

ルバルトは、前車体のリビングシートにて、不安をぶつけてる他の客を遠目に見た。

「それって、大丈夫な訳？ 被爆したらどーするのよー！」

まだ、若々しい金髪の女性が、食って掛かっていた。

ルバルトは、小声で。

「被爆するなら、もうしとる。どこまで浄化したかは知らんが、健康被害が出ないくらいには下がってるよ。バスに乗ってて、誰も体調不良言ってるない。しかし、このクソ寒い中で、廃墟の病院使って、迷路遊びとはねえ」

すると、悠貴も。

「面倒臭いことだね。まあ、賞品が豪華だし、そのうちみんなやる気になるんじゃないの？」

「同感だ」

資料には、フロリダの土地付の別荘をはじめ、ダイヤモンドだの、商品券だのと豪華な賞品があり。名前の売れた代議士や会社社長の顔写真とコメントもある。

開いたファイルの下には、各資料項目に飛ぶアクセスページキーがあり、何度も映像を見れる。ルバルトも、若者も、何度か映像を見直した。

「しかし、随分と寒い時期までやるもんだ、温かい時期だけでいいだろうに」

ルバルトは、ぼやいてみせる。

すると、そこに声が。

「はい、皆様、前方に街が見えてきました。あれが今夜から3日間、皆様が住んで遊ぶ所となります。廃墟ですが、行く行くは街として再建を計画している所です」

コンダクターの女性が、運転席近くで立って言う。

下に全員が下りていて、一斉に立って前を見た。山間の広大な針葉樹林の森だけしか見えない周りの景色。だがバスの行き先の遙か向こうに、まるで森に浮ぶように薄っすらと建物の姿が見えていた。

ルバルトは、若者を見て。

「前いか、映画終わったし」

悠貴も、

「後の3本が面白くないから、行く。丁度観たいのが夜中とは、全くシケてやがる」

「夜中のって、日本の古い特撮映画だろう?」

「ああ、ゴジラ面白いじゃないか」

「ほほっ」

二人は、雪の舞う森が広がる山間の光景を観に行った。バスの左

右には、大雪の中に広がる山岳地帯と、果てしない森林だけが広がっていた。まるで、天然の監獄のような印象をうけた・・・。

「欲望の産物 FILE 1」(後書き)

これが、自分が中学の時の考えた最初の小説の走りですね^^

今に、合わせて、色々考えて書いてみました^^

「欲望の産物 FILE 2」

「Intelligence crisis

s ファースト 欲望の産物」

3. プリズンマウンテン

夕方、5時。もう辺りは真つ暗に近く、西の彼方に薄つすらと太陽が手を伸ばすかの様に雲が鈍く明るだけ。山間の森に降り続く雪は積もり始め、もうバスのタイヤが雪を絡めて徐行運転をしている。誰もが不安で、立ってそれぞれ近くの窓から外を見ていた。

一人だけ。悠貴は、後ろのシアターシートに戻り、コーヒーカーツプを片手に雪の降る外の上空を見ている。

「皆様、これより街中に向かいます。目的の病院は、街の中心にあります」

バスは、断崖絶壁の谷に掛けられた機械仕掛けの橋を渡る。

「おゝい、もういいかの」

雪の中、外から人の声が。悠貴以外の皆はバスの前に集まり、渡った橋元を見ると、ライトを持った初老の男性が居るのが見えた。

やや小太りで、背が高く温厚そうな人物であった。

「あれは？」

年老いたエルダン夫妻の夫クライチエスが、コンダクターに尋ねる。

「橋の管理人です。橋は必要な時にしか掛けないんです。たまに、遊び半分で肝試しにと若者達が入り込むことがあります。復興が始まるまでは、橋を必要以外は掛けないんです」

ルバルトは、呆れて。

「こんな山奥まで、遊びにくるのか？」

「夏は、頻繁ですよ」

コンダクターは、呆れ笑いの顔で言った。

最もらしいが、ルバルトは嘘だと思う。私有地で、封鎖しているだろうし。こんな山奥に頻繁に来るなら、もっと先にある街に行くか。もっと手前のキャンプ場にも行くだろう。この地の被爆は、今時子供でも知っている。

「気を付けて、良い旅を」

管理人は、ライトを振ってそういった。

20代と思えるそばかすの多い女性ルーシーは、その初老の管理人の言葉に困惑し。

「こんな場所で旅行かしら・・・」

と、不満気に漏らす。

バスは、黒いアスファルトの道路を走り、雪化粧を始めた森の中を走り抜けた。

そして・・・。

「うわっ、まっ・・・まま街だ！」

太った中年会社員アルチェンは、いきなり現れたように見えた街に驚きの声を上げた。

「うそおっ！！　これが今日から泊まる街なのっ！　ゴーストタウンじゃないっ！！！！」

その視界に移る光景にルーシーは、悲鳴に近い声を上げた。

街の入り口には、ガソリンスタンドらしき建物の崩れた姿がある。

雪が積もり始める中、ガソリンを給油するホースが付いて無いガソリンメーターの機械が半壊して朽ち果てていた。　スタッフの詰める建物は、壁ガラスが無く。　枠を黒く腐食させて残るのみ。　全く、不気味の一言だ。

バスが街に入ると、街一つが本当に無人の廃墟となっていた。

「惨い・・・昔を思い出す」

クライチェスは、しみじみと言う。

彼が生まれたのは、NEO

ARKがまだ復興前だ。 幼い頃から復興を目の当たりにしてきた時代の人間だった。

「しかし、コイツはスゲえ・・・記事書けるぜ。 久々に真つ当なライターに戻る」

興奮気味の眼鏡男は、旅行サイトや情報誌の記者だというキーラだ。 ブラウンカラーの髪が曲クマのある中年男である。 記者というわりには、華奢な体つきだ。

暗い闇が舞い降りて、もう街の中はバスが照らすライトの中に入る道なりの光景だけが見えるのみ。 ひっくり返った車は錆朽ちて雪を乗せ、電信柱が折れたままになっていたり。 映画に出る廃墟がそのままに、此処に存在している。 だが、通る道路は舗装されていて、確かに人の手が入っているのは解った。

「この街の復興には、約300億ドルは必要といわれています。 とても我々の会社の努力だけでは戻せません。 この街が復興することは、あの大惨事を克服した証になると社長は仰ってありました」
コンダクターは、静かに言う。

「ふん、全く申し込んで失敗だった。 こんな茶番につき合わされるとはな。 復興でもなんでも勝手にやればいい。 土地が売れるようになってから言うて欲しいな。 価値の無い土地に興味は無い。 ま、フロリダの土地付の賞品が無ければ、バスを引き返させていたぞ」

傲慢な言い方で言い放つのは、ハンスという中年男だ。 この男が、目つきの鋭い中年紳士。 背がルバルトと同じくらいで、体つきは

スッキリしているが、・・・肩幅も広めで格闘技でもやっていそうな感じである。

その少し離れた所には、ハンスの前では終始無言の娘エリスが居る。ルーシー達とは、言葉少なに会話していたが、父が下に降りてからは無言無表情の人形のような顔立ち。綺麗な顔立ちと、愛らしい眼鼻立ち。金色の髪は長く、腰まで伸びる。黒いブラウスに黒いロングスカートを穿いて、黒いジャケットには、紫の宝石と金で作られた蝶のアクセサリが胸に光っている。大人顔負けとはこの子の事が、アイドルになったら、人気ができるのは間違いないと思えた。まだ、14歳らしいが、そのボディバランスは、2・3歳は上だろう。

さて。バスが街中を縫うように進んで行くと、ライトの明かりが遠くに見える。一瞬、街灯のようにも見えたが、それは街の中心の一角だけが明るい。

「あれが、病院なの？」

ルーシーは、闇の中にライトにてほんやりと照らされた建物の影の一部を見て指差す。

コンダクターは、頷いて。

「はい。地球の嘆きが起こる前に、この街には国内最大レベルの病院があったそうです。ヘリポートから、トラック救急車、救急鉄道の全てに対応した最高医療施設だったそうです。ERには、150床もの収容ベットがあったとか」

「ほ、今の最新医療の最初が、ここにあった訳だ」

キーラは、街の事をメモに取るべく、両手にペンとメモ用紙を持ってなにやら忙しく書いている。

今や当たり前のER機能を装備したトラック救急車と、街中で火事などの大量急病人を一度に搬送する救急地下鉄は、地球の嘆き以前に此処に初配置されたと言っているのである。

「じゃ、病院の規模自体も大きかった訳だ？」

ルバルトは、コンダクターに尋ねてみると。

「かなりの規模がありますね。病棟は、本棟は各科に別れて3棟。別棟が離れて1棟。職員宿舎に、発電室やリハビリ施設のトレニング棟もあります。地下も広く。地下5階までが緊急救命病棟で、その地下に救急鉄道のホームと格納庫が」

「おいおい、どんだけ広いんだよ」

「そうですね・・・大手大型テーマパークが2つくらいは入りましようか」

「なんて広さだよ・・・」

聞いたルバルトが呆れてしまった。

近づくにつれて、だんだん建物が見えてくると、その大きさが誰にもわかった。確かに大きい、病棟一つで、マンモス学校の校舎に見劣りしない。

コンダクターは、見えている病棟を指差して、

「アレが、一番小さい本棟のC棟です。明日は、あの棟からゲームをスタートさせます」

雪が更に降る強さを増し、バスのフロントはワイパーが全力で動いている。

バスは、病院の敷地を高々と囲む塀に沿って裏の入り口に戻った。

鉄格子の頑丈で高い扉の前で、コンダクターが携帯で連絡を取る。

「こちら、NEO ARK班です。お客様が到着です。開門おねがいいたします」

すると、直ぐに門が開いた。

「へへ、どこかに操作室があるの?」

ルーシーは、コンダクターに問う。

「ええ。病院は、管理チームによって毎日管理されていますから」

「んじゃ、私達以外に、スタッフの人とか居るのね?」

コンダクターは、微笑み。

「ええ、居ますよ。料理を作る人から、ベットメイクする人も。今回は、ワシントンからお客様がお見えになるといつてましたよ」

ルーシーは、ホツとした顔をして、

「なんだ、人が結構居るのね。安心したわ」

コンダクターは、軽く笑っていた。

バスが病院の敷地に入る。C棟の壁面が正面まん前に見える、壁に見える全てのガラス窓が壊れていた。一番小さいC棟なのに、高さも幅も広く。ライトの影になって、病棟が聳えていた。

バスがC棟の裏側に回った。すると、遠くに煌々と光る明かりが敷地を照らす街灯の様なライトを頼りに、バスはコンクリートの二階建ての施設に着いた。

「さ、皆様、宿舎に着きました。お部屋にご案内いたしますので、降りて下さい」

コンダクターの案内に、皆がコートやダウンジャケットを着てバスから降りる。

「寒いつ!!!」

一番太っているアルチェンが先頭だが、吹雪いている雪に晒されて思わず言った。

「うわっ、本当にさむっ」

ルーシーが降りて、更に続いて人が降りる。

全く喋らない高齢の老人であるモーリスという人物が、一度運転手

をギロリと睨んだ。

それを、最後に降りるルバルトも悠貴も見ている。

ルバルトも、モーリスの後に続く。

だが。悠貴は、降りる時にサングラスの隙間からしっかりとバスの運転手を見た。無口な運転手は、鋭い瞳を悠貴に返す。

「よく、13時間もぶっ続けで運転できんな」

そう言って、悠貴は降りていく。

(なんて瞳だ。生きてる人間の瞳じゃね〜よ)

運転手の瞳を見て、悠貴はそう判断した。いや、強ち間違いとも言えない。悠貴を睨んでいる運転手は、青い制服をしっかりと着ている無表情の男だが。瞳だけは炯炯と光り、獲物を狙う獣のような感じだった。

悠貴以外の客達は、雪の寒さに宿泊施設に走りこんで行く。駆け込んだ施設のロビーは、ホテルのロビーと変わらない内装だった。観葉植物の鉢植えが隅にあつたり、簡易なフロントがあつたり。

そして、フロントの奥の扉にコンダクターが入っていったとき、悠貴がロビーに入ってきた。ルバルトに会うなり。

「こりゃ、監獄だな。病院は、扉に囲まれて。街は、断崖絶壁と、橋が上げられたから外へ出る道が無い。しかも、山のと真ん中だからケータイの電波も届かない」

雪を払い落とすルバルトは、言つとおりだと思った。

4・最後の晚餐の始まり

優雅なクラシックの音楽が流れる。雪が降る外の景色を見ながら、晚餐は始まっていた。

ルバルトは、客の数を把握すべく、他の客と話し合っている。晚餐は、宿泊施設の左側にあるステージ付の円形フロアで行われた。

大きく丸いテーブルが、広いフロアに7台。テーブルの上には、オードブルから、パン、メインの肉や魚の皿が並び、20人足らずのパーティーにしては、豪勢なバイキングとなった。

まだ、ワシントンからの客は到着して来ていない。

7人の客と、ドレスアップしたコンダクターの8人で晚餐は始まった。

「こんばんは」

「どうも、こんばんは」

お互いで挨拶をする。

早速、記者のキーラは、バスの中で話し込んでいたコンダクターに絡む。

客の対応には、ウエイトレス一人、ウエイター二人の接客係が居る。

この接客をする男女は、物憂げで暗い感じのする者達だ。何か雑談を振っても、膝を伸ばす素振りはない。

ルバルトは、最初に老齡のエルダン夫妻と話す事にした。挨拶をすると、穏やかな口調で、

「どうも、こんばんわ。 クライチエス・エルダンです」

「こんばんは、妻のステラよ」

と、挨拶が返ってくる。老夫妻の二人は、物腰柔らかな夫妻だった。二人して、元教職員だそうだ。クライチエスは、高校の。

ステラは、小学校の先生だとか。

ルバルトが、旅行に参加した経緯の話をする。夫のクライチエスが笑って。

「いやね、インターネットのアンケート懸賞で旅行が当たったんだよ。二人一組でも行けると聞いたからね。いやいや、女房孝行でもしようと思って参加したんですよ」

「そうですか、夫婦仲良くいいですね。仕事人間には、とんと女性の縁が無くて」

「いやいや、君だって出会いがあれば大丈夫さ」

ルバルトは、エルダン夫妻に励まされてしまった。 隠密捜査だから、いつもの自分を出すわけにはいかない。 毎日、違う女性とベツトを共にしている実情は語れない。

エルダン夫妻と話しているところへ、エリスとルーシーとアルチェンが加わった。 6人となり、人通り挨拶をする。

ルバルトは、エリスに父親のことを聞いた。

「エリス、君のお父さんは晩餐に来ないのかい？」

「えっ？ さあ・・・お父さん・・・変わってる人だし、贅沢人間だから。 自分の口に合わない料理出されるとでも思ってるかも」

「ほ」

すると、嫌味な人間が陰口を叩く様に、ルーシーが小声で。

「エリスには、悪いけど。 エリスのお父さんって、なんかキツイわよね」

エリスは、力無く頷いて。

「うん、お父さんは資産家の息子として好き勝手に生きてきているから。 本当に我儘なんです。 お父さんの事は、放っておいていいです」

エリスの顔は、非常に暗いものだった。

ルーシーは、話題を変えようと。

「それにしても、この旅行ってなんだかちぐはぐで凄いわよね。料理はこんなに豪華なのに、観光しないでゲームなんて・・・映画みたい」

「本当だね。・・・でも、料理美味しいね」

アルチェンは、体に違わぬ食欲で、皿に盛ってきた料理を食べる。

ルバルトは、話題が変わったので、この場を放置し、悠貴を探した。

(居ない・・・どうしたんだろう)

部屋割りを決めるとき、晚餐に行くと聞いたルバルトだったから、不審に思った。

「ねえ、ルバルトさん」

いきなり、ルーシーから声を掛けられる。

「あ？ あ、はい、なんででしょうか」

「明日のゲームって、チームでなんですって。 組めるなら、一緒にどお？」

これは初耳だ。

「ほお、二人一組ですか・・・。 ま、いいですよ。 私は誰でも

喜んで」

と、笑顔で返しておく。

ルバルトは、悠貴を心配して腕時計を見る。

7時過ぎ

いきなり、ロビーの方が騒がしくなった。

「あら、ワシントンからのお客様が来たかしら」

コンダクターが、キーラに断りシャンパングラスをテーブルに置いて、両開きの扉に向かう。そして、ドアを開けて出て行った。

ルバルトは、コンダクターを目で追って。

「来たかな？」

繭を纏めるルーシーは、肉料理を皿に取りながら、

「早く来て欲しいわ。こんな山奥じゃ、人は多い方が安心する」

アルチェンも、何処かオドオドした雰囲気を見せて。何か人の声
がコンダクターの消えた扉の向こうから聞こえて来るのに。

「だね。本当に、来たみたい」

人声が間近になり。コンダクターが直ぐに戻ってきた。

「皆様、ワシントンからのお客様が到着致しました」

コンダクターが、開いたドアの脇に控えると。

「あゝ、寒いよおおお」

大きい声と共に最初に中に入って来たのは、2メートル近い身体のでっぴりと太った男性だった。

「ようこそ、皆様。 さあ、晚餐へどうぞ」

太った巨漢の男性に続いて、ワシントンからの客に付いていたであろうと思われる30前後と見れる小柄のコンダクター姿の女性が現れ、その後に数人の客が入って来た。

場が、一気に明るく賑やかになる。合わせて総勢17・8人の晚餐が始まった。

「いやゝ、寒かった。 こんばんは」

ルバルトは、長身の中年黒人男性に、声を掛けられた。

「こんばんは、ルバルトといいます」

丁寧に挨拶を返すルバルト。 気品が見え隠れする彼に、声を掛けた黒人男性は驚きを交えた笑顔を見せて。

「おお、私、ニモンド・ブルックです。 ワシントンで、清掃員やってます」

43だというニモンドは、気さくな男性だった。話もし易く、ルバルトは、彼との雑談も弾んだ。

さて、他の客で来ていないのは、エリスの父親ハンスと、最高齢と思われる皺だらけの老人モーリス氏だ。そして、あのサングラスをした黒ずくめの若者悠貴の3人。ルバルトは、そう判断していた。

料理を皿に盛って食べるニモンドが、ルバルトにワシントンから来た客を覚えてくれる。

最初に大きい声で入ってきたのは、19歳の若者でコールというらしい。なんでも、大手スーパーで食品ラインの担当してるとか。

今、メインテーブルにて、男女が皿に料理を取っている。男性は、30代と思える雰囲気の良いスーツをキツチリと着こなしたキャリア的な感じを受けるビジネスマンタイプであり。女性の方は、背が割りと高いのに更に高いヒールを履き、膝が丸見えに肩・胸空きのワンピースを着るかなりのグラマラスな美女だ。

だが、ルバルトは、

（あれは、コールガールの類だな・・・遊びの旅行か、浮気旅行か・・・）

と。ルバルトは、NEO A E Kで夜に生きる女をたらふく見ている。雰囲気や化粧から、直ぐに解った。

男性は、ジェスター。女性の方は、ラヴィというらしい。

次に、一人で静かに食事をしている若く日焼けした青年がいる。

「彼は、カーエルという」

インディアンの一族らしく、ワシントンに出稼ぎにきているとか。

物静かで、バスの中でも殆ど話しはしなかったらしい。黒とブラウンの混じる髪に、日焼けしている様にも見える褐色の肌をした感じは、確かにインディオの雰囲気か滲んでいた。

そこへ、

「こんばんは」

「こんばんは、仲間に加えてください」

4人の男女が、ルバルト達の輪に入って来た。

「こんばんは、ルバルトといいます。よろしく」

「こんばんは」

輪に声を掛けて入って来た女性達は、若い18歳のほっそりと痩せた大学生のナンシー、38歳という割には若々しいキャリアウーマンのような印象を受けるエルザ、優しそうな微笑を湛えるほんのりとした美しさを持つソウエルだ。

男性は一人。ナンシーと同期の大学生で、名をフィリップという生意気盛りの若者といった感じの白人青年だ。

「ん、こんな山奥で、美味しい料理に逢えるのね」

アップにまとめた髪がスツキリとしたエルザ。私服なのかベージュのパンタロンパンツとスーツを着こなし、白のコートを椅子に掛けた姿もインテリが香りスタイリッシュである。

「ホントですね。ただ、もうちょっと温かいスープとか欲しい」
微笑み、こう言ってローストビーフを食べるのがソウエル。赤いセーターに、ジーンズ姿。黒髪は肩に届くくらいだが、その艶やかさは漆黒の闇のように深い色合い。瞳は優しく大きい、吸い込まれるような温もりが感じられる。年齢は26だというが、その落ち着き振りは大人の女性であった。

フィリップは、ふて腐れた子供のような顔で、皿に盛った料理を食い散らしている。身体つきはしっかりしているが、態度が悪い。
ナンシーとは実の従姉弟に当たり、懸賞に当たったナンシーに付き合ってきたが。バスの中でラヴィに色目を使われた所を、ジェスターに視られて怒られたとか。ジーンズにフードつきのトレーナーを着た上に、ダボつとしたダウンジャケットを着たまま食事している。

「所で、あれって誰？ ワシントンの方の人じゃないわ。教えてくださる？」

流暢な言葉遣いのエルザが、ルバルト達を見て言う。

「え？」

ルーシーの声と共に、11人の顔が、奥のステージがあるまん前のテーブル台に。そこには……。

「おっ、これ美味しいな」

「でしょ、こんなの初めて食べたよ」

太った青年コールと、もう一人の若い青年が会話していた。物静かな青年のカーエルでもなければ、誰でもない。やや長い前髪はソウエルの黒髪のように漆黑。肌は白く、顔はスッキリしていて印象的。青い瞳なのに、顔つきは東洋的である。和と洋が合わさった神秘的なハーフ特有の美しさだ。

「悠貴・・・か？」

ルバルトが、呟いた。

「ユウキ？ それって、バスでサングラス掛けて横柄な態度で乗ってた彼？」

ルーシーが、驚いた顔つきで尋ね返す。

「ちよっと、失礼」

ルバルトが、悠貴の元に向かおうとした時だ。

皆が入ってきた宿舎側とは反対にあるステージ側の奥に、料理を運んだりしていたドアがある。そこから、一度消えていたワシントン方面のコンダクターが、二人の男性を携えて現れた。

「皆様、こちらを注目してください。支配人にして、総括部長のハレスさんと、副部長のワスターさんです」

ルバルトは、何かと思って立ち止まった瞬間。

「あっ！」

小さく声を上げた。今、まさに、コンダクターに紹介されてステージに立つ人物は、アレックスに瓜二つの人物であった。

(アレックス……)

呼ぼうと思った……が。

(違う……、そんなばかな)

アレックスと目が合ったのに、相手はルバルトを客の一人としてしか見ていない顔で、ステージ上から客を見回して挨拶をする。

ルバルトは、ふっと悠貴を見た。彼もまた、冷めた瞳でアレックスの後ろに控える50ぐらいの皺が入る男性を見ている。

(?)

視てみれば、

(に……似てる?)

悠貴の顔のアクセントと良く似た渋みがあったナイスミドルな男性が。

ルバルトは、静かにステージに顔を戻して、挨拶を聴いた。

5・晚餐に潜む不安の陰

8時半過ぎ、晚餐はまだ続く。支配人、副支配人の両名は、挨拶後に直ぐ消えた。

固まっていた皆が別れ。カーエルという青年は、自分の部屋をコングクターに聞いたのか消えていった。

ルバルトと悠貴は、二人で窓側に立つ。もう、外の雪は積もり、50センチは積もっているだろうか。

「遅かったな」

ルバルトが言う。

「ああ、ちよつとな」

悠貴は、素っ気無く返す。

「お前さん、居なくなった副支配人に用があるのか？ さっき、ず

「とっつと視てたる？」

すると、驚く素振りも見せず悠貴は、

「お互い様だろ。 アンタだって、支配人をずっと視てた」

「ま、な。 ちょっと、な」

ルバルトは、悠貴が自分を振り返ったのが解らなかつた。

すると、悠貴は、ルバルトを見て、フォークで指す真似をする。

「アンタ、会社員じゃないな。 その雰囲気、観察力、どう見ても政府機関の臭いだ。 FBI？ CIA？ いずれにしろ、普通の仕事じゃないな。 バスで逢った時から、思ってた。 アンタだって、俺の事を感じているだろ？」

いきなり、ルバルトは、腹を読まれた。

「ま、そうかも・・・な」

はぐらかしてみたものの、確かに内心びっくりだった。

すると、悠貴はルバルトに近寄り、小声で。

「多分、今回はおたくらに出張って貰わないとな。 この施設、人の殺された形跡だらけだぜ」

悠貴の言葉に、ルバルトは緊張して目を見張り。

「有ったのか？」

ルバルトの眼を見つめ抜く悠貴は、軽く頷く。

「凄いぜ、視たら驚く」

ルバルトは、悠貴を改めて見て。

「お前は……一体……」

すると、悠貴は、金属のプレートをズボンのポケットから出した。

「こいつは……お前……バウンティ？」

「警察なら、俺の名前は知ってるヤツ多い。ま、本業は探偵だがね」

「探偵か……」

「ああ、もう14か5年に成る」

「あ？ 14・5年って……幾つからやってるんだ？」

「5歳から。っていつても、オヤジの助手からだかね」

ルバルトが、更に突っ込もうとしたときだ。

「こんばんは、一緒にいいかな？」

太っちょコールが、エルザとソウェルを連れて来た。

素っ気無い悠貴は、いい加減に挨拶を交わすや否や。　パツと顔を少し真顔に変えて。

「ん？　医者居るのか？　消毒液の臭いがする」
いきなりだ。

「え？」

コール・ルバルト・ソウエルが、驚いて自分達の輪を見回す中で。

「あら、バレたわ。　よくわかったわね」

エルザが、ちよつと驚いた顔をして悠貴を見た。

「鼻とか眼はいいんだ」

悠貴は、お茶の入ったグラスを口に付ける。

「それ、なんだ？　カクテルか？」

ルバルトに問われ、

「日本茶さ。　アルコールは、飲んでも酔わないから詰まらないんだ。　俺は、お茶の類か、コーヒーしか飲まない」

すると、医者とバレたエルザが、

「特異体質ね、アルコールの分解が早いか、吸収しないんだわ」

と、分析してから、更に続けて。

「一応、人と動物の医者やってるわ。博士号も持ってるけどね。現場人間だから、婚期逃してばっかりよ」

すると、途端に悠貴は瞑想して。

「んなら、妥協が一番。安心できる人が最適だ」

耳に痛い悟りの言葉にエルザは、瞳を細めて。

「知った口利くじゃない、まだ若いのに」

「うちのオヤジの台詞のパクリだ」

「なんだそら」

突っ込んだルバルトは、呆れた眼を悠貴に向ける。

悠貴がアルバイターと聞き、ソウエルは思わず。

「嘘、なんか役者さんかと思ってた。凄くかつこいいから」

これには、エルザやルバルトも頷ける。同じくそう考えたコールは、

「悠貴って、ハーフなんだね。僕みたいに身体も顔もデカイと、女の子からバカにされるけど、悠貴みたいだとモテそうだね」

コールが、がばがば食べつつ言うのに対し。

「人それぞれだよ。顔が良くても、節操無いとバカを見る。コールみたく、人当たり良くて素直なのが一番。俺は、正直人当たりが悪い」

コールは、動かすフォークを止めて、顔を引き攣らせる。

「マジで？」

「マジ。俺は、口の利き方はかなり悪い。学校も、中学で辞めてるし」

ルバルトは、呆気に取られた。

「お前、中学を中退してるのか？」

「ああ。センサーと喧嘩して、頭来たから辞めた」

話を聞いていた4人は、閉口してしまった。

「で、アルバイト生活な訳？」

エルザは、何とか声を出す。

「ああ、まあ〜ね。たまにパソコン弄ってたら、懸賞当たるし、運は学力要らないからいいよね〜」

悠貴は、気の無い言い方で言うが、それに、コールが反応し、

「それは言えるね。 僕も良く当たったもんだと思うよ」

悠貴は、年が近い所為かコールには話の膝を伸ばして。

「コールは、一人暮らしなのかい？」

「え？ 違うよ。 アンケートには、一人暮らしが目標だから、
一人暮らし”って入れちゃったけどね」

「あら、私は一人よ」

と、エルザ。

「私も」

と、ソウエル。

「なるほど、一人暮らしか。 あっちのおじいさんみたく夫婦か、
どっちかなんだね・・・、この旅行に来た人ってさ」

と、悠貴はルバルトを見る。

ルバルトは、無言で頷いた。

悠貴・ルバルト達の輪に、更にエリスとルーシーとナンシーがやつて来た。 ニモンドとフィリップが寝ると引き上げたからだ。 8
人で、話はまた盛り上がる。

一方。 眼鏡を掛けた記者のキーラは、美人コンダクターを捕まえ
て、その肩をに腕を回したりしながら色々と話かけている。 下心

が見え見えであった。

どの位話し合った頃だろうか。悠貴は、10時を回ったのを腕時計で見て、エルダン老夫婦や、ニモンドなどが寝る為に引き上げてしまったものだから。

「そろそろ、今日はお休みスツか。さて、夜食でも作るうつか
な」

と。皿を目の前のテーブルに置く。

「夜食？」

と、コールやアルチエンが反応した。

「ああ、パンもハムもサラダもチーズもある。サンドイッチつくるのに、材料は最適」

「この寒さだものね。まず、2日は腐らないわ」

と、エルザ。

ソウエルは、エルザや他の女性達に、

「じゃ、そろそろシャワー浴びちゃいます？一階の奥にシャワーあるみたいですけど」

「寒いから浴びたかったです。私、行きます」

と、ナンシーも。

そこで、ルバルトは、

「もう、寝た方がいいか。明日のこともあるしな」

そこに、コンダクターと話していたキーラが立ち上がった。

「シャワー浴びるなら、ジェイルさんが案内するってよ」

美人コンダクターも立ち上がった。

「お湯を出しますわ。他の方々にも、声をかけてみます」

山の中だから、水は大切である。シャワーを使うときは、コンダクターに一声掛けてくださいと言われていたのを、ルバルトは思い出した。

「私も浴びるわ」

ジェスターに一方的に語りかけられていたラヴィも、近くのテーブルからそう言っつてよこす。

一方、悠貴は、コールとあれやこれやと語りながら、夜食のサンドイツチを作る。

その時、ワシントンから客を連れてきたコンダクターに合わせ、静かに客の世話をしていたウエイトレスやウエイターが奥に下がる。

料理は、このままにしておいてくれるとか。ケーキや、ワインなども置きっぱなしにしてくれるとか。

(そんなバカな)

ルバルトは、料理をそのままに残すなんて有り得ないと思う。 衛
生上有り得ない。

だが、ワシントン方面のコンダクターと一緒に、行ってしまった。

ルバルトは、コールと悠貴が離れたのを見て。 何の気なしに悠貴
に近づいた。 サンドイッチを、自分も作る振りをして。

「夜、会えるか？」

悠貴も小声で。

「現場は、俺の部屋さ。」

ルバルトは、殺人の現場のことだと思い。

「なんだと？」

「驚くことはないさ。 自分の部屋も、壁紙やカーペット剥いでみ
な」

ルバルトは、手にしたパンに何も挟まないままに、テーブルの上に
置いた。

「じゃ、先に失礼する」

ルバルトは、その場に別れを告げて、井戸端会議になりそうな女性
達の横を一目散に通り返した。

.....。

その様子が、モニターに映し出されている。

そこは、真つ暗な部屋で、モニターの明かりがライト代わりである。点灯しているモニターは、18インチほどのもので、立派な木作りのデスクの上に置かれているのだが・・・。ただ、部屋の壁中には、テーブルの上のモニターよりも小さい小型のモニターが所狭しと犇んでいる。モニターには、客が泊まっている各宿泊部屋、シヤワー室、晚餐の行われているフロア、ロビーなど。宿泊施設の全体であつた。

デスクの前には、スーツを着た男が一人チェアに座っている。腕組みをしていて、細めた瞳でモニターを監視していた。モニター画面から発せられる明かりに照らされる顔は、面長で30前後の男性である。顔つきは、ちょっと中南米系だが、スマートで知的な印象を受ける。身体もスラッとしていて、なかなかの印象的なイイ男と思える。

見るからに監視をしていると思えるこの男が、デスク上のモニターにて解散し出す客を見ていたそこへ。

コンコン

ノックがする。

「入れ」

チエアーの男が、言った。 男の声は、一度聞いたらそう簡単に忘れない独特の声をしていた。

部屋の左奥扉が開き、支配人としてルバルトたちの前に現れた男が、中に入りモニターの前の男に恭しく頭を下げる。

モニターを見ていた男は、支配人の男を見て。

「ご苦労だった。 モニターで見ていたが、我々に気づいた者達がいる」

チエアーに座る男の声は、男性の声のものとしては微妙にトーンが高い。 そして、感情の無い無機質な話し方は、不気味に近かった。

「リスクー様、それは本当でしょうか？ 我々に、ミスが？」

「いや、一人は呼び出したジジイだ。 だから、知られていて当然。 だが、部屋を調べた若い男は、何か気づいた方だろう。 後、もう一人は、何か理由が在るのか外に出た。 コツチは意味が解らん。」

リスクー（危険）と呼ばれた男は、モニターにまた顔を動かした。

其処に、支配人の男性は一礼して。

「リスクー様、実は困った事が」

「何だ？」

「Bランクのクリーチャーが、血を求めております。先週、培養した血液も送ってしまいました。中でも、スタッフに使うクリーチャーが、特に餓えています。明日まで、保ちますかどうか」

すると……。リスキーと呼ばれた男は、奇妙な仕草をし出した。右手を左腕の肘に添え、左手を顔に覆うように触れると、左手の中指で右側のコマカミを打つ。奇妙な仕草で考える。

1分ほどして。

「仕方ない、明日のゲームは中止だ。今から始めよう。どうせ、今回でこの施設は封鎖する。準備が出来次第にバイオクリーチャーを放つ。深夜を過ぎるまでは、客達は大人しくさせておけ」

晚餐時に、ハレスと名乗っていた支配人の男は一礼して

「畏まりました。して、率先して殺すターゲットなどは居ますでしょうか？」

「いや、それよりも、モーリスという老人を捕まえてきてくれ。怪我をさせるなよ」

「はい、解りました」

「もう、宿泊施設のほうには居ないだろう。モニターを見ていたが、多分外に出た。今さっき、C棟のカメラに不信な影を映したからな」

「解りました、手配いたします」

リスキーは、奇妙な仕草を止めて、改めてモニターを見ると。

「ま、ゆっくりやればいい」

了承するハレスを、リスキーは下がらせた。

部屋から出て行くハレスの後ろを、横目にリスキーは見ていた。

此の者達は、一体何者なのだろうか。

ただ、此処で恐ろしい事が起こっている事だけは間違いなかった。

「欲望の産物 FILE 2」(後書き)

どうも、騎龍です^^

今回は、幾つか話を纏めて、月一でどど〜んぱと、出す方向の小説
です^^

あゝ、本当は、マンガかゲームにしたかった作品です^^;

「欲望の産物 FILE 3」

is ファースト 欲望の産物」
「Intelligence crisis

6・浮き上がる事実

10時半を回り、ルバルトは自分の部屋で立ち尽くす。

「こんな・・・、気味の悪い臭いが微かにしていたが・・・。まさか、こんな・・・」

6畳の部屋、TVもオーディオもあるしっかりとした部屋だったが、ベットをどかし、カーペットをどけて、床や壁の保護紙を剥がしてみれば、そこは黒ずんだ血の跡が・・・。血の広がる範囲を見ても、夥しい血の量が流れている。しかも、だ。床の血の色、壁の血の色に微妙だが違いが見える。調べてみなければ解らないが、下手すると何度も殺人が起きていた可能性がある。

（なんてことだ、入って気味が悪い感じはしていたが。冬の寒さで血の臭いが薄れていたか・・・）

ルバルトは、直ぐにでも悠貴に会う事を考えた。

一方、その頃。女性達は、エルダン夫人を除いて全員がシャワーを浴びていた。さほど大きくないが、5〜6人は入れる円形浴槽もある。広いフロアの真ん中に浴槽が、入り口から右手に、仕切り分けだけされたシャワーが7個。ピンク色のタイル張りの天井や床に、7人の使うシャワーの湯が響く。

「ねえ、あの若いコ、可愛くない？」

いきなり、4番の真ん中のシャワーを使っているラヴィが、隣のシャワーを使うエリスを覗いて言う。

お互い裸だ。ラヴィと、コンダクターのバストは、100を超えているのだろう、張りもあるが量感が凄い。

「あ・・・悠貴さんの事ですか？」

急に言われて、エリスは困惑する。

「悠貴ユウキっていうの、ふ〜ん」

厚ぼったい唇で、グラマラス過ぎるラヴィは、悠貴の名前を繰り返した。

そこに、エルザがエリスの隣より顔を出して、

「あら、連れれの男性が居たんじゃないの？ 現地調達で、二股？」

明らかに、棘がある言い方だ。

ラヴィは、シャワーを浴びに身体を戻し。 機嫌を悪くしたのか素
っ気無い言い方で。

「好きである男と来たんじゃないわよ」

と。 ラヴィのような女性は、男の欲望を満たして金を得る仕事を
しているのは、エリスとて予想が出来た。 現実、失業率10%を
超えるアメリカの現実は、身体で稼ぐしかない女性を増やした。

ルーシーは、ラヴィの逆隣だ。 そつと顔をラヴィに見せて、

「給料は安いけど、普通の仕事もあるわよ。 いやな男に付き合わ
されるより、いいかも」

ラヴィは、返す言葉も無く黙ってしまった。

そこへ、ルーシーの隣に居るソウエルが。

「でも、悠貴っていい人よ。 女性の過去とか気にしなそうよね。
あれで、20歳なんだから、ちよつと驚きだわ」

エルザは、取って付け加えるように。

「口の利き方悪いけどね」

ソウエルは、にっこりしてシャワーに戻る。

ルーシーは、7番目のシャワーを使うコンダクターのジェイルに、

「でも、コンダクターも大変よね。客に色目使われて。キーラって記者、完全に貴女を狙ってるわよ」

ジェイルは、顔は出さずに声だけで。

「ですね。困るんですけど、お客様ですし、無碍にもできませんし」

「いいのよ、変な事したら引っ叩いてやれば」

息巻くルーシーに、ジェイルはシャワーを浴びながら。

「ルーシーさん、遅しいですね」

そこに、エルザも。

「当たり前よ。嫌なんだから、嫌って言ってあげればいいのよ」
と、ソフトに添えた。

その話を聞いていたラヴィは、やや尖った口調で、

「客商売は、そうもいかないわよ。セクハラも度を過ぎてこない
と、告訴だって出来ないわ。軽く告訴なんかしてたら、会社から
クビにされちゃうし」

そう言ってラヴィはシャワーを止めると、豊かな胸と引き締まるヒップを揺らして浴槽に向かった。

ジェイルもまた、シャワーを浴び終えて浴槽に。

エルザもルーシーも、ラヴィヤジェイルの背中に何か暗い影を見た気がした。

「あの・・・」

そんなエルザに、別の声が伸びる。

「ん？」

気付いて見れば、エリスが探る様に自分を見ている。

「エリス、・・・どうしたの？」

エルザを見るエリスは、何処か不安気で。 晩餐の時から、この美少女の顔色は優れなかったままだ。

「あの・・・、エルザさん、私を泊めてくれませんか？」

「は？」

いきなりの話に、エルザがキョトンとして聞き返す。

ルーシーは、エリスが一人は怖いんだと思い。

「怖いのかなあ〜？ エリスも、もう14歳だぞ〜」

と、お姉さんぶった。

しかし、俄にエリスは首を激しく振って、泣き出しそうに成った顔

で。

「違うのっ!!! 私・・・今夜犯されるっ!!!」

いきなりの大声だ、そこに居た女性全員が、エリスを見た。

エリスが、訴えたのは深夜11時前。

そのとき、内内に動いている人物達がいた。

一人は、キーラである。皮のジャケットに、スラックス。寒くないようにと、ベージュのハイネックセーターを着ている。こっそりとした足取りで、晚餐が行われていたくらいオリエンテーリングフロアに入り、壁伝いに奥へ。

(全く良く降る雪だぜ。ま、今夜は柔らかい女カイロで温まるか)

今、まだジェイルはシャワー室に居るのに、彼は知らないままに支配人達や、ワシントンから客を案内してきたコンダクターの消えたステージ横の扉にむかった。顔は何処かにやける微笑が漏れて、あまり気持ちのいい顔とはいかない。

(しかし、嫌がついていそうだから落とすの難しいと思ってたけど。

言ってみたらあっさりだったな)

晚餐時にキーラは、コンダクターのジェイルを口説いていた。そして、解散直前にジェイルに言い寄って。

「今夜、一緒に寝ないか。寒いから、お互いに産まれたままでさ、心まであっためるよ」

と。臭いセリフを吐いた。キーラは、遊び人の部類に入る男だった。顔も綺麗で、肉体が素晴らしいジェルに、最初っから眼を着けていたいたのである。

意外にジェルは、直ぐに首を縦に振った。

「じゃ、11時前にこっそりと部屋を抜けて来て。ウエイトレスやウエイターが出て行ったドアを抜けて廊下を歩いていくと、“応接室” っであるから、ここに来て。貴方が来るまでに、シャワーで身体を綺麗にしておくわ」

ジェルの言葉に、キーラは久しぶりの女性の柔肌を味わえる事を喜んだ。それこそ、寝るときに嫌がられても、悪い記事書くぐらいの脅しをかけても抱く気でいた。

ステージ横のドアをキーラが開けると、天井にライトが点っていた。天井の中にライトを埋めて、パネルのようにガラスや透明な素材の板で天井を飾るものだ。

「パネルライトか。手を加えてるんだな」

キーラは、廊下を見回しつつ歩いた。何の変哲もない廊下。歩く床は黒い石の材質、壁はコンクリートのような材質の物。木なんて使われてないから、足から底冷えが来る。暖房の効いていた宿泊施設とは違い、廊下は急に冷え込んだ。

「寒いな・・・」

廊下は真直ぐだが、5・6メートル先の所で右に曲がっていた。

キーラは、曲がり角の突き当たりにあるドアの無い仕切りの先を見て。

「厨房か」

中を覗けば、なかなかの広さで。電気調理の出来る調理台をはじめに、水圧圧縮調理機や、大型の業務用の冷蔵庫もある。かなり、本格的な調理室だ。

（確かに、晚餐のディナーは美味かった）

これから、あのグラマラスなジェイルを抱けるのだから、今夜は2度美味しいと思える。

厨房を過ぎて、更に奥に行くと。行き止まりとなっていて、前方と、左右に扉が。

（どれかな？）

木のドアを見てみると、右は“休憩室”。左が“応接室”。前方が、“関係者通用口”だった。

（よし、いくか）

コンコン

ドアをノックした。が、反応が無い。

「こんばんは、キーラです」

声を出してもう一度ノックすると、ドアが引かれた。

「ジエ……」

声を掛けるつもりだったが、見えるドア枠からの視界にジェイルの姿は無い。

(?)

キーラは、中に一歩足を踏み入れた。部屋に入ったとき、右の視界に揺らめく影が。

「あっ」

キーラがギョツとして声を上げた瞬間、直ぐにドアが閉まった。

「うぐう」

キーラが鈍い呻き声を上げると同時に、

グギ!!!、バキバキっ!!

何か、木の棒でも折るような音が響いた。そのまま、扉の奥からは、

ズルズル……ベチャ……

不気味な音が響いて来ていた。

……

その頃。

ルバルトは、悠貴の部屋に来ていた。悠貴の部屋もまた、カーペットが捲くられて、壁紙が剥ぎ取られていて、黒い血の跡がべったりと部屋一面に残っていた。

「悠貴、お前さんの言うとおりだ」

悠貴は、ルバルトを見ながらベットに腰掛けていた。

「行方不明者を追って此処まで来てみれば、此の様よ。ルバルトさんよ、客に医者居たる？ 事情を話して、調べて貰おうぜ」

ルバルトは、悠貴に向かって確かめたかった事を聞く。

「悠貴、お前も人探しか？」

「おたくも、だろ？」

切り替えされて、ルバルトは本心を言う気になった。

「ああ。俺は、俺の代わりに潜入してしまった友人、アレックスを探しにだ。だが、目的の半分は、この旅行の調査でもある。FBIを動かすにも、現実的な証拠が要るからな」

悠貴は、理解して頷き。

「やっぱり、FBIか」

「ところで、悠貴。お前は、一体誰を探しに来たんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オヤジ」

「今日の晚餐に居た、副支配人か？」

「ああ、姿形だけは、な」

ルバルトは、その言葉に引っ掛かった。

「“姿形”？」

「ああ。オヤジは生理的に、整髪料の類はアレルギーで浸けられない。しかも、本物は左利きなのに、晚餐の男は右利き。更に、オヤジは左腕の筋を壊してるから、左手が器用にいかない。なのに、今夜の副支配人とやらは、いとも簡単にシャンパンのコルク抜きをした。ありゃ、オヤジの皮を被った別人だわ」

悠貴に口調は淡々としている。だが、瞳は目前の偽りに怒りを湛えていた。

ルバルトも頷く。実の所、自分も悠貴と同様だった。

「そうか。・・・俺も支配人を見たとき、友人のアレックスと思った。思ったが・・・違う」

悠貴は、立ち上がり。

「で？ どうにするよ」

「うん。明日まで待つか……。今、血の事を持ち出しても、パニックにして恐怖を煽るだけかもしれない。第一、相手がどう出るのか」

ルバルトも、対処に困っていた。

しかし悠貴は、部屋を見て。

「待つのは賛成出来ないな。此処で血があるってことは、夜に襲われてるかもしれないだろ？ 見す見すやられるまで待つてるのは、どうかな」

「そうかもしれない。だが、今言ってる客が俺達の言う事を聞くか？ こんな事件は前代未聞だぞ。事件ばかり追ってる俺達と、普通の一般人には溝が在る」

悠貴は、ルバルトの言う事も理解は出来た。

「でもな、犠牲者が出てからじゃ……。とにかく、施設を調べてみないか？」

「それはいいな。どうせ、監視されているとすれば、もう俺達の行動はレッドカードレベルだろうしな」

そのときだ。シンと静まる宿泊施設に、男の声が響きだす……。

諸君、こんばんは。私は、全ての進行を見る監督者だ

いきなり、宿舎の中に放送が流れた。

「学校かつつの」

悠貴は、上を見てぼやく。

「誰だ？ 首謀者か？」

構えるルバルトに対して、

「多分」

と、落ち着いた悠貴。

二人の会話の間にも、放送は続く。

諸君、我々は君たち人間を喰らう者だ。君たちを殺戮する事に
快楽を覚える。

「随分、過激に来たね」

悠貴は、余裕に言い返す。

だが、ただ死ぬのも可哀想というものだ。だから、あがらつて
くれたまえ。戦う相手は、直に解る。先に言っけて置くが、逃げ
場はない。では、少し席を空けさせてもらおうよ

放送は、一方的に終わった。

「おいおい、なんだそりゃ。名乗りもしないとは、無礼者だね」

悠貴は、詰まらない物の言い草である。

ルバルトは、声のして来た上を見て。

「もう、本性現したか」

「ルバルトさん、これでもうパニックじゃないか？」

「あ」

悠貴に言った事は、まさしく現実であった。

「おいっ！！！！ 今のは一体なんなんだっ！！！！」

廊下に、誰か男の大声が上った。

更には、

「どうなってるんだよっ！！！！」

アルチェンの声もする。

「あゝあ、パニックだ」

悠貴は、呆れた様に頂垂れた。

「悠貴っ、呆れてる場合じゃないぞっ！！ まずはみんなを落ち着けないと」

「はあゝ、苦手なんだよねえ」

悠貴は、その場にしゃがみ込んで頭を掻く。

「なに？」

「俺、対人関係は親父任せで、主に捜査や捕り物関係の対応だから」

ルバルトは、悠貴の言葉に呆れてしまった。　そうするうちに・・・

「何よっ！！　今の何なのよっ！！」

ルーシーの声。

「女だ。　こりゃ、ウザい」

悠貴は、重い腰を上げた。

廊下にルバルトが出て、後を悠貴が行く。

「おいつ、今の聞いたか？」

最初に会ったのは、黒人の中年ニモンドだった。　奥のほうから遣ってきた所で、二人は出逢った。

ルバルトは、相手がニモンドだから、

「ああ、とにかく落ち着こう。　協力して欲しい、俺はFBIだ」

と、ライセンスを見せる。

「ええつ、あ・アンタ・・FBIだったのか」

「ああ、みんなを集めて、安全を確保したい。俺一人では無理だ、協力してくれないか？」

ジーンズに、チェックのカジュアルシャツという姿から、二モンドも寝ていたらしい。

「わ・解った。コート、取ってくる」

宿泊施設は、ロビーから向かってくとT字路になり大きく四角を書くように別れる。左右に別れて、両方とも曲がって直ぐのところから、ドアが5メートルの間に2つ。それぞれの部屋で、右には廊下に沿って、悠貴・モーリス。左には、キーラとカーエルが。

また、廊下は折れ曲がり合流して、ロビーから見て真直ぐになる。

廊下を更に進むと、右手には、自動販売機などが並ぶ共有休憩場があり、左に折れる廊下の先は、晚餐があつたオリエンテーリングフロア。

ルバルトが、ここまで部屋を回って居たのは、カーエルのみ。まだ起きていたカーエルを見たルバルトは、居ないキーラの事を尋ねる。

カーエルは、以外のも落ち着いた雰囲気であつた。

「カーエル、隣のキーラは？」

「さあ、さっきドアが閉まる音がしたから、出て行っただんじやないかな」

「何時だ？」

「時計見てないから解らないけど、11時頃かな。音がして、少ししてケータイの時報が鳴ったから……。でも、電波届いてなくて、少しズレてるかも」

「そうか、解った。カーエル、晚餐のあったフロアに行ってくれないか？ みんな集めて、全員の安全を確かめたい」

「ああ、いいよ。寝てたら、いきなり放送がして、どうしていいか判らなかつたから助かるよ」

カーエルも、椅子に掛けてあるダウンジャケットを取って、ルバルトに従った。

一方。晚餐のあったフロアに居て、安全を確かめている悠貴。明かりを点けて、暖房のスイッチを入れてみると、二モンドが来て

「よう、無事か？」

「ん？ ああ、俺は、大丈夫さ」

と、悠貴は何処か横柄な口調で返す。

「ルバルトが手伝ってくれと言っただが」

「あゝ、そうか。んじゃ、此処を。人を集めるから、俺じゃ喧嘩になる」

ニモンドは、悠貴に近寄って、彼の左手に銃が有るのを見て驚いた。今や、アメリカでも一般人の銃の規制はウルサイのだ。無闇矢鱈に拳銃を持つ者は、職質連行ものである。

「君は、銃を持つてるのか？」

悠貴は、手の銃を持ち上げ。

「当たり前だ。俺は探偵だし、バウンティだもの」

「バツ・バウンティっ!!!？」

ニモンドは驚く。聞く所、警察から特別に許可を貰って、賞金首の犯人を逮捕する捕り物屋が“バウンティ”だ。だが、取得は警官を辞めた人物か、凄腕の探偵、兵役を終えた軍人のみ。一般人が頑張って取得出来る資格ではないと聞いている。

悠貴は、ニモンドに向かってぶつきら棒に。

「とにかく、人を連れてくるからさっ、宥めてくれ」

悠貴は、そう言ってまたルバルトの居る部屋のほうに戻っていく。フロアの出入り口にて、カーエルとすれ違い。後からきたルバルトと合流した。

「二人だけ？」

「ああ、キーラと、モーリスっていう老人が居ない」

「もう、二人もかよ」

げんなりする悠貴。

話し合う二人の元に、奥のシャワー室の方から来た女性達が濡れた髪のままに。先頭はソウエルとエリスだ。

「無事だったか？」

と、ルバルトが声を掛けると。

ソウエルが、頷きつつも小走りでやって来て。

「ええ、そりより大変なのよ。放送を聴いてから、ルーシーとラヴィがジエイルを問い詰めてるのっ。彼女、“知らない”の一点張りで、みんな興奮しちゃってるのよ」

「なんだって？」

ルバルトは、頷いて直ぐにシャワー室に走る。

悠貴は、ソウエルとエリスに向かって。

「中で待つてなよ。全員集めるから」

と、だけで、ゆっくりとした足取りでルバルトの後に行く。

ソウエルが頷くのに対し、エリスは悠貴の左手の拳銃に目が。

「じじっ・銃・・・」

驚き、ソウエルの後ろに隠れた。

ソウエルも、エリスに言われて気づいた。

「ねえ、どうなってるのよっ!!」

「あの放送なによっ!!」

宿泊施設の中間の右側には、浴場がある。その入り口から先の脱衣場で、女性が口論しているのが聞こえた。

しかも、その声を聞き、アルチェンとフィリップが更に廊下を行つた奥から出てきているのが見える。ルバルトは、急いで浴場に入った。

「こら、ややこしい」

女性の言い争う声と、不審な顔で歩いている二人を見た悠貴は、そう呟くと。アルチェンや、フィリップに向かい。

「晩餐の在った所に、みんな居るぜ。誰が居て、誰が居ないか知りたいから、そっちに行ってくれ」

すると、パニック気味のアルチェンは、ヒステリックになっ

「何が起こってるんだよ!! 説明してよ!!」

と、怒鳴る。

悠貴は、呆れて。

「おいおい、俺等も同じ客だぜ。 解るかよ」

すると、フィリップは、悠貴に向かってイラついた態度丸出しで。

「なら、命令すんな。 解らないくせにっ」

と。

そこに、今度は奥の二階から騒ぎを聞きつけたジェスターや、コー
ルも階段を降りてやってくる。

「どうした？」

と、いうジェスターに、フィリップが。

「コイツが、晚餐の在ったフロアに集まれたとき。 誰が居て、誰
が居ないかを調べる為だよ」

「何？ 誰か居ないのか？」

と、ジェスター。

悠貴は、面倒臭いと思いつつも。

「キーラっておっさんと、モーリスってじいさん。 トイレにもい
ないぜ。 ついでに、今、放送が流れたから見に行ったら。 ロビ
ーの入り口に分厚い金属のシャッターが降りてた。 各部屋、窓も
無いから、出口が無い。」

話に驚きジェスターは、晚餐が在ったフロアにも外が見える大窓が幾つも有ったのを思い出し。

「オリエンテeringルームは？ 晚餐の在ったフロアは、窓が有ったろ？」

「それも、金属板でシャッターされてる」

悠貴が説明していると、ルバルトが浴場より出てきた。泣きじゃくるドレス姿のジェルに自分のスーツの上着を貸している。ジェルは、髪の毛が拭かれていない濡れたままに滴を落としてだ。

「さ、向こうに行こう。ちゃんと説明を聞くから、まずは落ち着こう」

嗚咽激しいジェルは、頷くのも解らない位。

驚く男達の中で、驚く素っ気も無い悠貴は、後から急いで出てきたエルザに。

「おい、タオルぐらい持って行けよ」

と、言っただけズケズケと更衣室に入った。そこには、着替えたばかりのルーシーや、途中のラヴィが居て。

「あんた等、風邪ひきたいのかよ。タオルくらい持っていけよ」

と。悠貴は、言っってから大き目のバスタオルを取って、浴場入り口に立ち止まったエルザに投げる。だが、悠貴本人は廊下に出ず。シャワーなどがある浴場に、ラヴィ達の脇を抜けて向かう。

イラついていたルーシーは、悠貴に睨みをを一瞥して出て行くが。ラヴィは、まだスリップを着ているだけの姿。下は下着すらつけてない。肉感と張りの在る胸がスリップから食み出そうだ。

「何？ まだ着替え中よ」

「あ、そ」

言われた悠貴は、ラヴィを無視して浴室に入ってしまった。

苛苛していたラヴィだが、自分に見向きもしない悠貴の美しい顔に、強い興味をそそられたのは事実だ。そっと、悠貴の後を追って、浴室を覗く。

「・・・・・・・・」

入った悠貴は、浴室を備に見回している。

悠貴が、天井の金網の掛かっている空調ダクトの排気口を見上げて、見上げたままに・・・。

何か在るのかとラヴィは気になり、着替えを忘れてその姿を見続けた。

7・始まりの殺戮

ラヴィが見ている中、悠貴はとんでもない行動に出た。

「はっ……」

息を呑むラヴィの前で悠貴は、垂直跳びをして空中で縦に一回転し、なんと高さ3メートル以上ある天井の空調ダクト入り口を閉じる金属の格子に右手を掛けた。そして、左手の拳銃を格子の隅に向けて撃つ。

「キヤッ!」

銃声が、狭い浴場に鳴り響く。驚いたラヴィは、思わずその場に屈んだ。

「うゝわっ」

「きゃっ」

戻って来ていたルバルトや、出た外でジェスターにラヴィの事を聞かれたルーシー達も、浴場からの銃声に驚いて、その場に伏せてしまふ。

一方。

「よっ」と

格子網が留め金の一方壊し、悠貴のぶら下がる格子の蓋が片方側だけ外れて、右側に倒れ掛かる。悠貴は、空中に身を右手一本で投げ出し、絶妙の間合いで剥れた格子蓋の内側に右手でまた掴まった。

「う・・・嘘お・・・」

屈んで見上げていたラヴィは、その凄いショーに呆気にとられてしまった。

身軽な若者である悠貴は、格子を伝って上の空調ダクトに入った。

「うえ、くっせえっ。眼に滲みるぜ？」

ダクトの中は、一応空気を吸い上げる。風の流れるを感じるから、稼動はしているのだろう。だが、凄い腐臭がしている。垂直の管は、直ぐに横向きの大い管にぶつかる。悠貴は、管の上に身体を入れて、腕時計の一部を捻ると・・・パーっとライトが光る。

「うおおお、なんじゃあああ~~~~こりゃあああっ!!」

叫んだ悠貴の音が、ダクトから浴槽へ落ちる。その声は、明らかに驚きと緊張を含んでいた。

そこへ、血相変えたルバルトが、浴場に駆け込んできた。

「悠貴っ、どうしたっ?!」

ルバルトの声を聞いた悠貴は、ダクトの左右を見つつ、その光景を物語る。

「ルバルトさんっ！ 上の空調ダクトの中は、人の屍骸が詰まっているっ！！」

ルバルトは、事に驚き。ダクトの真下付近に踏み込み。

「なんだとっ！！？」

「どれも一部だらけだけど、骨や、腐った肉付きの骨が在らあ。破れた服の一部もあるし、見たければ落とすが？」

ルバルトは、パニックになる事を考え。

「いや、止めておけ」

「ok、解った。映像で取っておくよ。こりゃ、この先は進めそうにないや」

「そんなに酷いか？」

「腐った死体の上を、匍匐前進したかないね」

ルバルトは、様子を想像してしまい顔を顰める。

「そらっ、嫌だな」

ルバルトの後ろで、銃声にへたり込んだラヴィが、

「と・とと跳んだわよ・・・あのコ、あそこまで跳んだわ」

後ろから言うラヴィを見てルバルトは、また悠貴の居る天井を見てからまたラヴィに向いて。

「4メートルはあるぞ?」

ラヴィは、ガクガクと頷く。

「よおつと」

悠貴が、浴室の床に降りてきた。着地した悠貴は、大きさがスリムサイズのペットボトルほどの何かを持っている。

「あゝ、臭かったぜ。鼻が腐りそう」

「悠貴、大丈夫か?」

悠貴は、近場に立つルバルトを見て。

「ああ、それより見てくれよ。この骨、なんか齧った跡があるぜ。エルザの姉さんに診てもらったほうがいい」

「あ? ああ」

「ルバルトさん、後は居ないのは誰だ?」

「あ・ああゝ、エリスの父親のハンスと、エルダン夫妻がまだ居ない」

「ふうん。この騒ぎで起きて来ないなんて、ソイツはおかしいだろ?」

鋭い視線で云う悠貴は、ルバルトを見返す。

ルバルトも、全くの同感である。

悠貴は、戦慄くスリップ姿のラヴィを見て。

「おい、早く着替えろよ。 風邪ひくぞ、股の中丸見えだし」

ラヴィは、ガクガクと頷いて、脱衣所の床に落とした着替えのジーンズを手繰り寄せて穿く。

ルバルトは、ラヴィを見ずして廊下に待たせていた皆のほうに戻った。

「大丈夫だ、なんでもない。 さ、一旦、晚餐の在ったフロアに行ってください」

出て来たラヴィも、直ぐに行かせる。

悠貴は、ラヴィの後から出てきて、近くにまで戻って来ていたエルザに近寄った。

「エルザさんよ、コイツ診て欲しい」

「え？ 何？ これ・・・」

声を掛けられてエルザは、悠貴に歩み寄ってソレを手取る。 モノ確認した瞬間に、悠貴を見返す。 真剣な目は、事態の只ら無さを物語る。

「これ、何所で？」

「浴場の天井のダクトの中」

「ええっ？」

「とにかく診てよ。後、残りの居ない人たち見てくる。それと、コイツを渡しとく」

悠貴は、コートに中の腰に手を回し、何かを取り出した。

「ほれ」

悠貴が出したのは、小型の銃だ。

「ちょっと、私に銃なんか・・・」

他の人たちも、それを見ていた。

「コイツは、ニードルガン。反動が少ないから、女性向き。一番理性的のある人間に持たせるんだよ。男共は、どいつもピリピリしてて、冷静さが薄い」

エルザと悠貴は、目が合った。悠貴の瞳は、落ち着いた物だ。

「・・・護身用ね」

「そう、逃げる切り札ってことにして」

「解った、ありがとう」

エルザは、悠貴が以外に物事を冷静に判断している事に気づいた。それを不満そうに見ていたのは、フィリップである。

一旦、フロアに行きかけていたのだが、見ていて気に入らなかったのだろう。

「おい！ てめえ！！ なんで女に銃なんかもたせんだよ！！ 俺に渡せよ！！！！」

と、怒鳴った。

悠貴は、横目でフィリップを見るなり、

「雑魚はうるさい。黙って膝抱えて座ってる」

これには、フィリップの自尊心も傷つくだろう。フィリップの顔がみるみる怒りに変わった。

「てめえ！ 言わせておけばこの野郎！！！！」

いきなり、悠貴に殴り掛かった。

が

「う」

殴る寸前で、悠貴の右手の中指と人差し指が、ピタリとフィリップ

の両目に寸止めされた。 フィリップは、悠貴の右手が来たのが見えなかった。

悠貴は、右手を下ろして初めて目を細めた。

「死にてえか？ 懸賞首の殺人犯や、死に物狂いの人間とドンパチやって、斬った這ったの生き方してる俺と、本気でやりてえか？」

悠貴の凄みは、フィリップのハラワタにズドンと墮ちる。 悠貴の目に、フィリップは吞まれたのだ。

「わ・・・悪かった」

「さっさ行けよ」

「ああ・・・」

フィリップは、足元をふらつかせてヨロヨロとフロアに向かう。

一方の悠貴は、廊下の奥にて、待つルバルトの方に歩きつつ。

「手間かけさせんなよ。 この緊急時に」

と、詰まらなそうに言い捨てた。

「彼・・・怖いわね」

その様子を見ていたルーシーは、怯えながらエルザに言う。

だが、エルザは悪い人間に悠貴は見えないと思う。

「そうね、でも判断力は凄いわよ」

エルザは、悠貴という人物が嫌いにはなれなかった。

一部始終を見てて呆れた顔のルバルトは、悠貴が目の前に来ると。

「キツイの。ま、いいクスリだがな」

と、苦笑いを。

「ごちゃごちゃうるせーからだ」

苛立たしげな悠貴は、浴場の前の廊下を更に奥へと歩き出す。

人が丁度すり違える程の幅の廊下に、左右対称にドアが見える。

ドアには、ネームプレートを挿す所に、今日からの宿泊客の名詞が挿してあった。

ルバルトは、アルチェンとニモンドの名前を確認して先に。

だが、悠貴はわざわざドアを開けた。

「・・・」

ルバルトは、悠貴にプライバシーもあるから。

「悠貴、居ない人物の部屋だけでいいぞ」

「いや、部屋の構造を知る上でも、見ておいたほうがいい。他と

違った部屋があつたら、それこそ危ない」

「なあゐる」

異常が在るか無いか確かめて、悠貴はドアを閉めた。

次は、コールとフィリップの部屋だ。ルバルトが開けて、悠貴と二人で確かめる。窓の無い、息が詰まる空間が同じく広がる。

更に次の部屋を目指して廊下を行くと、二階に上がる階段が見えた。

ルバルトが、先に階段を見て。

「二階は、女性とツインルームが在ると」

悠貴は、ラヴィとジエスターに掛けて、

「お楽しみで来たのに、楽しめないのお〜。新たなプレイが産まれそうな予感だ」

ルバルトは、困った笑いで。

「新しいプレイね」

と、階段を上り始める時。

何かに気付いた悠貴は、背を向けるルバルトに向かって、

「ちよい待ちだぜ」

「ん？」

階段途中で振り向いたルバルト。

悠貴は、辺りを探る様に見せて・・・。

「ルバルトさん、なんか臭わないか？」

「何の？」

「ほら、なんか血の臭い」

「?!！」

ルバルトは、ぐっと緊張して臭いを集中して嗅ぐと・・・。

「微かだが・・・血の様な・・・」

ハッと二階を見るルバルト。

悠貴は、声を真面目にさせて。

「コイツはルバルトさん、おっ始まったんじゃないか？」

ルバルトは、腰から38口径の銃を抜いた。

二人が二階に上がると、踊り場のように少し広くなっている。

ド
右隅

アも何も無い壁には、非常用消火ホースの収納扉が・・・。
には、観葉植物のプランターが置いてある。

それに構わずルバルトは、先に二階の奥に向かうべく左に。悠貴は、ルバルトの後を追うが、一回だけホースが収納されている扉を見た。

廊下を急ぎ足で行くルバルトは、最初に見えた右手にある一サイズ大きい扉を見つけて。

「エリスと、ハンスの部屋か・・・」

と、確認してから、遅れて来た悠貴に向いて。

「悠貴聞いたか？ エリスの話」

突然の話に、悠貴はサッパリの顔で。

「はあ？ 何の事？」

「エリスは、ハンスに無理やりこの旅行に連れて来られたそうだとよ。エリスがいい具合に育ったから、自分の物にする気だったとよ」

聞いて悠貴は、ため息一つ。

「ふう〜。世も末だなあ。バスの中から、なあ〜んか時化^{しけ}た面^{ツラ}してんな〜と思ったが。お金持ちも大変だよ」

と。

二人銃を構える。親の方が話して駄目なら、捕まえるしかないのは明白だ。

ルバルトが、ノックをする。　だが、反応は無い。

ルバルトは、ノブの在る右側に。　悠貴は、構えて正面に。

「ハンスさん、失礼しますよ」

と、ドアを押し開ける。

悠貴は軽やかに素早くぱつと中へ。　だが、部屋の中には人影は無かった。

「居ないぜ」

後から入って来るルバルトに、悠貴。

「だな」

「だけど、ルバルトさん・・・」

「ああ、血の臭いが鮮明になった」

二人は、エリス親子の部屋から出て、隣の部屋に向かった。

次の同じ右側に見えたドアのドアプレートには、エルダン夫妻とある。

「血の臭いが、強い」

と、小声で悠貴。

「エルダンさん、起きていますか？ エルダンさん、開けますよ」
ルバルトは声を掛け、反応が無いのに悠貴を見て頷く。 悠貴がまた正面に、ルバルトは、ドアを開けた。

瞬間、噎せ返る血の臭いが部屋から吐き出された。

飛び込んだ悠貴とルバルトは、二つ並んだベッドの上から、その周辺にべつたりと夥しい血の跡が残るのを発見したのである。

「これは！」

睨む目で見る悠貴は、血の量を見据えて。

「ルバルトさん、こりゃ殺しだぞ。 凄え血だ」

頷くルバルトは、急いで辺りを見回した。

「悠貴、死体は無いな」

悠貴は、カーペットに染みて血溜まりになる部分を見て。

「死体は無いが、肉片や白髪とかは残ってるぜ」

「ベッドの脇に、指の断片があるな。 はあっ……、思いたくは無いが、これは二人とも殺されたかもしれない」

ルバルトは、現場に残る残存物が、明らかに人の体の一部分であると認識。 先ほどまで話していたあの夫妻が、死んだとは思いたく

ない。

悠貴は、またズボンの後ろのポケットから、四角い何かを取り出して、現場に向けた。

ルバルトは、浴場でも見たと思い。

「そいつは、何だ？」

「これか？ 俺のポケコン」

「ポケットパソコンか」

「只のパソコンとは、ちょっと性能が違うぜ。なんせ、俺の友人のお手製のスペシャルなパソコンだからな」

「そうか」

「ルバルトさん、俺袋持ってるから、その肉片や指を入れちまおう。証拠だ」

「ああ・・・」

ルバルトは、悠貴の場馴れしている感じを見て。

「本当にバウンティらしいな」

「3年前から、バウンティはやってるよ。ま、金よりも探偵の依頼での捕り物か、警察から依頼で出張るか。どっちかだけどね」

ルバルトは、それを聞き。悠貴が、縄張り根性の強い警察にも信頼されている事を悟った。未だ、警官には保安官のような縄張り意識が強く、余所者に協力を頼むようなことを嫌う傾向が強いのだ。それは、余所者だった自分が良く知っている。

「しかし、死体は何所に運んだんだろう」

悠貴は、ルバルトが疑問を出したのに応じて。

「魔法とか使ったりして」

「ばか」

ルバルトは、周りを見て、

「持ち去ったんだ。だが、どうやって、何所に……だな」

屈む悠貴は、ルバルトを見上げて。

「もう、大体見当ついてるくせに」

ルバルトは、悠貴を見下ろして。

「お前は、どうなんだ？」

「さあ」

悠貴は、とぼけた。

ルバルトは、血を見下ろして。

「まず、死体はビニールの様な袋に入れられたのは間違いない。血の状態を見ても、塊切らない血だ。普通に持ち上げたら、床などに落ちるだろうが、このベットの周りのみというんだから、何かに入れたんだろう」

それには同じ意見と思う悠貴は、肉片などを袋に入れつつ。

「でも、人二人分の死体を担ぐのも大変だけど、持って行くのも大変だね。他の人に見つかりたくないだろうし」

「だな、集まった皆に話を聞いて、捜査開始だ」

すると、其処で悠貴は。

「持って行かなきゃ良いんじゃないっすか」

「ん？」

ルバルトは、意味深な悠貴の言い方に、若者を見た。

悠貴は、部屋を見回して、もう調べるものは無いのを確認すると。

「あの、二階に上がってきた踊り場。壁に消火ホースの収納扉あったけど」

「ああ、確かにな。それが？」

「扉に文字は書いてあったけど、肝心の非常ベルのスイッチ無かったで」

「ああ？ そんなの・・・まさかっ！」

ルバルトは、ハツとして部屋を飛び出した。

残された悠貴も、肩を竦めてルバルトの後を追う。

踊り場に駆け戻ったルバルトは、非常用の消火ホースの入っている扉を見ると・・・。

「ホントだ・・・スイッチも無ければ、ブザーの鳴るのと同時に点滅する筈のランプも無い」

追いついた悠貴は、ルバルトに。

「そこからも、僅かに血の臭いしてるよ」

ルバルトは、パツと悠貴を見てから、直ぐに扉を開けた。開かれた扉から、冷たい空気が吐き出された。しかも、血の臭いも一緒に。

「コイツは、隠し通路だ・・・下に伸びてる」

扉の向こうには、一人人が楽々降りれる通風用のダクトの様な管が下の伸びていた。しかもよく見れば、梯子状の階段も壁に沿って伸びている。

「これが、逃走経路は」

ルバルトが、ステンレスの様な四角いダクトを見下ろしている。

悠貴も覗いて。

「なんか、鈍く明るいな。下も然程さほどの深さ無いし。もしかしたら、地下通路があるのかも」

「同感だ。とにかく他の部屋を見回って、早く皆の元に戻ろう」

「へいへい」

ルバルトは、悠貴の返事で彼を見る。やる気の無さそうな言い方だった。

「不満か？」

悠貴は、首を傾げて。

「いや、今まで手分け捜査ばかりだったから。こつ、時間をかけるやり方は初めて」

「そうか。こんな状況じゃ無いなら、お前さんを一人行かせてもいいんだが。正直、お前さんを一人で行かせるのは、出来ない」

「仕方無いでしょ、とにかく行こつ」

悠貴は、先にまた廊下に行く。

ルバルトは、悠貴の背中を見て、

(さっきのフィリップの態度とは、ガラリと違うな……。判断

力も、捜査能力も鋭い)

まだ20歳だという悠貴に、ルバルトは足音も立てない若き相棒に
感心した。

「欲望の産物 FILE3」(後書き)

どうも、騎龍です^^^

頑張つて、今回は半日で手直ししてだします^^

眠い^^^;

「欲望の産物 FILE 4」

S i s ファースト 欲望の産物」
「Intelligence cri

8、ヘルプリズンサーチ

悠貴とルバルトは、立食パーティーの行われたオリエンタリングフロアに戻った。集まった皆が、それぞれに固まって不安げに休んでいる。

ルバルトは、全員に報告した。

「皆さん、報告があります」

髪の毛を未だにグツヨリ濡らしているジェイルは、ステージの隅っここで一人震えていた。悠貴は、彼女に近寄って。

「びしょ濡れだぜ。風邪ひかれても困る」

と、風呂場に有った使われていないタオルを渡す。

「あ……ありがと……」

塗れたドレス姿のジエイルは、ぎこちなく髪をタオルで拭う。

その中で、ルバルトが、一同に説明を続ける。

「みなさん、今、行方の解らない人物が5人います。問題は、エルダン夫妻の部屋が血まみれだった事です」

全員が、驚いてルバルトを見た。

悠貴は、ジエイルまでが髪を拭うのを止めて驚いたのを見て。

「どうした？……計画に無い事なのか？」

ジエイルは、怯えて首を振り……。

「計画は明日だって……」

ルバルトが、エルダン夫妻の部屋の状況を語る中で、悠貴はジエイルの前に屈んだ。

「計画って、ミステリーの謎解きゲームか？」

ガクガクと頷くジエイルは、

「あつ・明日、みんなを殺すって……」

悠貴は、“みんな”に引つかかった。

「みんな？・・・何でアンタは生きてるんだ？前に来た客なんだろう？」

「だ・・・騙す人間が必要・・・だから」

悠貴は、なんとも理解が行かない。

「“騙す人間”？じゃ、人間じゃない奴も居るのか？」

これは半分アヤカケであって、本気で言っただんじやない。

だが、ジェイルは真剣で驚いた瞳を悠貴に向ける。

「何で知ってるのよ？・・・あのバケモノの事。貴方・・・私達が前に来た客だって・・・どうして知ってるの？」

こう言われた悠貴は、話がとんでも無い方向に行く気がした。

「あゝ・・・冗談で言っただが。本当に、“人間じゃ無い”奴が居るのか？」

ジェイルは、グツと返答に詰まる顔で黙った。

悠貴は、一つ想像してた事があって、カマを掛けて見る事に。

「アンタ・・・さ、まさかさ。夜の晚餐の時にしつこく言い寄ってたキーラってオッサンの居所・・・知ってるんじゃないのか？」

聞かれてジェイルは、寒気では無い様子でブルブルと震えて俯く。

そして、声を震わせて、絞るように言った。

「もう・・・死んでるわ・・・。奥で」

悠貴は、パツとステージ脇の支配人やウエイトレスなどスタッフが出入りしてた扉を見る。

「向こうか？」

「ええ・・・」

ジェイルの体全身が、恐怖に震えている。

ルバルトが、現状の報告をしていた。部屋の血の跡や、悠貴が見た空調ダクトの中の事。医者エルザが補足のように、悠貴が空調ダクトから持って来た骨が、人の骨である可能性が極めて高いと付け加える。

悠貴は、その途中を遮る。

「ルバルトさん。ちと」

何事かとルバルトが、悠貴を見れば。

悠貴は、扉を指差して。

「向こう、キーラってオッサンが行ったらしい」

「誰が・・・ん？」

ルバルトも、そう言いながらジェイルを見る。そして、悠貴を見

ると……。頷く悠貴。

悠貴は、直ぐに立ち上がると。

「コール、済まないが此処に居てくれないか？」

と、扉の前を示す。

太った大男のコールだが、死体の事を聞いてビビッてしまっていた。

「ええっ！！ なんてっ?!?!」

「俺達が奥を見てくる。何かあったら大声だしてくれりゃいい。

後は、逃げる」

「ぼおぼぼぼ僕がつ?!?!?!」

その様子に悠貴は、直ぐに変わらぬ声で。

「嫌ならいいぞ」

すると、そこにカーエルという青年が席を立ち。

「俺でいいなら、居るよ」

声を伝にカーエルを見た悠貴は、確認してから頷き。

「じゃ、頼む」

そして、悠貴は続けて。

「ニモンドさんって言ったか？ 宿舎の方、注意してくれ。遺体が忽然と消えてるから、何処かに隠れ道が在るかもしれない」

「わ・解った」

黒人の中年男性ニモンドは、恐怖に怯える顔を引き締めて返す。

臨戦態勢の悠貴は、強くルバルトを見て、

「行く」

「ああ」

ルバルトは、銃を抜いて頷き。それから、

「女性は、なるべく真ん中に、エルザの近くに居てくれ。直ぐ戻る」

と、報告を途中で打ち切って皆にそう言う。

驚いたフィリップは、立ち上がって。

「おいおい、どうゆう事だよ？」

悠貴がドアに近づき。

「キーラってオッサンがこっち言ったってさ。見てくる」

フィリップは、直ぐに。

「みんなで行った方がいいんじゃないか？」

ルバルトは、ドアを開けた悠貴を見ながら。

「殺人の犯人が居たらどうする」

誰も息を呑んだ。

キーラの行った廊下へと入った悠貴とルバルト。

直ぐに悠貴は、廊下を見て。

「血の匂いがしてら……。しかも、風が奥に向かって行ってる」

ルバルトは、良く解らなかった。

「奥か？」

「ああ、微かだけど・・・奥」

二人は、直進して右折している廊下に行く前で、壁に設けられた戸の無い仕切りから奥に広がる厨房に入った。中は立派な厨房だ。

セラミックの調理台が真ん中にドンとあり、電気加熱ヒーターの調理器が内蔵されている。壁に密着して、水圧圧縮粉碎機や、大型の冷蔵庫もある。

悠貴が業務用冷蔵庫の中身を見て、豊富に揃う食料を前に。

「ほほう、こいつは飢え死には先だな」

ルバルトも、脇から覗いて。

「随分あるな……」

「ああ。多分は、明日までの食料は用意してたんだ。ただ、なんか予定を変えざる負えない理由が出来たんじゃない？」

「俺達か？」

「かも。カーペットとか捲って、見ちゃならね〜証拠見つけちゃったし」

「なるほど、な」

悠貴は此处で、天井の隅に伸びる空調ダクトを見上げて。

「でも、此処も臭い……、空調ダクトから腐臭が降りてる」

「俺にはサツパリだ」

と、ルバルト。本当に、臭わないのだ。

だが、悠貴は、空調ダクトから眼を反らしてルバルトを見ると。

「とにかく、此処にキーラってオッサン居ないね」

「ああ、戻って、曲がった廊下を奥に行こう」

「へいへい」

二人は、戻って応接間の廊下の方に進むことに……。

悠貴は、廊下上で直ぐに奥を指差す。

ルバルトが、鼻を触って摘むジェスチャーをすれば、頷く悠貴。

“ 臭う ”

と言う事。

二人は、3つの扉の前に遣って来た。もう、ルバルトにも血の臭いが解つたぐらいに、鮮血の噎せ返る臭いが来ている。正面の扉は、ステンレスか何か金属で出来た頑丈そうな扉で、左右の扉は木製だ。

ルバルトは、正面の“ 関係者通路 ”を見て直ぐに開けようとするも、ロックが掛かっていて開かない。悠貴は、ルバルトの肩を叩いて、耳打ちし。

(“ 応接室 ” って方のドアの隙間から血の臭いがしてる)

頷いたルバルト。

ルバルトがドアに手を掛け、悠貴がドア正面に銃を構えて立つ。

(オーケー)

悠貴が頷く。

ルバルトは、サツとドアノブを回して開けた。

瞬間、また血の臭いが溢れてくる。

悠貴、まるでしなやかに獲物に襲い掛かる豹のように素早く中に走りこんだ。

(早いっ!!!!)

ルバルトは、その素早さと足音も立てない動きに驚きつつ中に。

だが……。

「また、か」

悠貴は、死体の無い血だらけの部屋が視界に入り、進展が見えなかった事が気に食わなかった。

入ったルバルトの足元のカーペットに血がベツタリと染みていた。しかも、肉片や骨らしき物も。

「う……踏んじまった」

退くルバルトは、夥しい血の量跡に。

「なんて血の跡だ……遺体を見るのが怖いな」

悠貴は、屈んで血の跡を見ながら。

「毎度、事件で見てるクセに」

「はっ、慣れてもいい気分じゃない」

「だわな。それより・・・なあ〜んかへんだな」

悠貴は、カーペットを指で触りつつ言う。

「何がだ？」

「さっきのジーサンバーサンの部屋の時もなんだが・・・。ホラ、染み付いてる血の跡に比べて、カーペットが含んでる血の量が少ないような・・・気がするんだ」

ルバルトも、実はこれは同感だ。

「ああ、確かに。気付いてたか」

「それに、なんだ？ このなぞつた様にカーペットの繊維が一方向に寝てる・・・。丸で、拭いたかの様に・・・」

「舐めたみたい・・・ってか」

ルバルトの感想に、二人は顔を合わせた。

悠貴は、先に嫌な顔をして。

「まさか・・・ね」

だが、ルバルトは至って真面目に。

「いや、否定も出来ない。前に、そうゆう奴が犯人だったケースもある」

悠貴は、立ち上がって。

「想像したくないが、可能性はあるって訳か・・・」

ルバルトは、絨毯の血溜りの中で千切れたボタンに、破られた服の一部も見つけて。

「悠貴、アレ見ろ」

悠貴は、指し示されたルバルトの指先を見る。血溜りの近くのベツト下に落ちている携帯電話だ。

「光ってる・・・な」

今や携帯電話の形状は、折り畳んだ厚紙程度に薄く成ったり、細く棒状に成ったりと、様々に変化している。しかも、様々な新機能が追加されている。悠貴は、持って来たハンカチで拾う。

ルバルトも覗く中でディスプレイを開くと、“ビーっ”“ビーっ”と異常音が。

「おいっ、悠貴コイツは・・・」

ディスプレイには、“death”の文字が。

悠貴は、機能を弄るに。

「間違いない、あのキーラって云うオツサンの物だ。しかも、体調管理ソフトの“バイオキャプチャー”機能の表示で“death”って事は……」

二人見合わせて。

「死んだ」

バイオキャプチャーとは、持病持ちの人間に開発された機能で。自分の遺伝子の解析コードを入力し、付属のナノマシンを飲んでおくと、バイオリズムを携帯で管理できる。脈拍から、血糖値に体脂肪率まで。もしもの時は、自動信号で救急シグナルを出すのだが。もう、“死んでる”と、携帯が言っている。電波が届けば、今頃は救急救命コールセンターに連絡が行っているハズなのだが……。

「電波、届かないサイン出てら……」

薄っぺら委いディスプレイを見る悠貴は、やるせない思いが広がった。

二人は、応接室とは逆の部屋も調べてから、皆の元に戻った。

9、参加者のそれぞれ。そして輝く超新星の瞳

スーパーノヴァ

「死体は無かった・・・。だが、キーラは健康志向が強いのか、それとも持病があったのか、携帯にバイオキャプチャーをつけてたみたいだ。そして、携帯は“death”のハザードを点灯させてた。悠貴によれば、この機能の有効範囲は200メートルある。携帯にこれと言って壊れた形跡も無い。総合的に判断して、キーラは死んだ可能性はあるといってもいいだろう。死んだ時間は、11時8分」

悠貴は、テーブルに凭れながら、ルバルトの報告を聞き。怯えるジエイルを見た。

（まだまだ何か隠してるな。強引に聞くのもいいが・・・、しても仕方ないこともな）

またもや流血の跡に、誰もが怯えた。

そこに、エルザが代わって、

「今、悠貴の持ってたPCで血を調べたわ。“応接室”に有ったのは、男性の血液でA型。二階エルダン夫妻の部屋に有ったのは、B型とO型でそれぞれが男女の血液ね。骨の方を分析したら老人の形跡があるし、バスの中でお話したルーシーが、エルダンさん二人の血液型を聞いていて、今回の二階に残された血液型とピッタリ当てはまる。二階の血液は、紛れも無いエルダン夫妻と聞いていいわ」

アルチエンが、怯えた声で。

「そ・そんな事・・・解るの？」

エルザは、悠貴の小型PCをヒラヒラと皆に見せて、

「コレ、凄い機能を持つてるわ。水質、物質、薬品の成分とかみんな計れるの。私、これでも医者よ」

フィリップが、イライラした口調で。

「でも、死体がね〜じゃないかつ。死体が無い以上は、確実に死んだって言えないだろ？もしかしたら、輸血の血を撒いたとかじゃないのかよっ?!?!」

「無いわ」

エルザは、キッパリ否定した。

ルーシーが青い顔をして、壁に凭れて居ながらに。

「确实？」

「ええ。固まりやすい血液を、固まらせないようにする薬剤も成分も一切入ってないわ。それから・・・、私たちが入ってたお風呂の天井に有った空調ダクトの中に、こんなモノが」

映像を壁やカーテンなどにも映し出せる悠貴のPCで、ステージにある暗幕を引いて映し出したものは・・・。

「キャー！っ！！！！」

「うわあああーっ」

声を上げる者、たじろぐ者様々だが、悠貴以外はその映像に度肝を抜かれた。人の骸骨、しかも顔の骨に、腐った肉が付着したままで転がっているのだ。

「有ったのは、コレも含めて人の身体の部分だけ……。しかも、大きな鼠でも齧られたみたいなき痕もあるわ。正直、血の跡や全員の部屋に残された古い血痕……。そしてこの映像……。此処では、間違いなく人が死んでるわ」

エルザが、ハッキリと断言した。

「うそ……。こっ・こんなことってっ」

貧血気味のナンシーが、もう憔悴した顔で頂垂れた。

悠貴は、エルザからPCを返してもらい。

「とにかく、だ。様子を見ておこう。寝るのは何所でもいいが、なるべく安全を考えるなら、全員が集まれる此処だ。全員も疲れてるし、一休みして朝から動いても問題無いと思う」

ニモンドは、おぞましい映像を見ての冷や汗を掻いた顔を手で撫でて。

「しかし、ゆっくり休めるのだろうか……」

悠貴は、軽く頷いて。

「大丈夫、秘密兵器持ってきたから」

ルバルトは、近づいて。

「なっ・なんだ？」

「アラームセンサー。 此処に向かって通らなければならぬ所に、コイツを仕掛ける。 ま、アラームが鳴るだけだが、イニシアチブを取られないだけマシってことで」

ルバルトは、その用意周到さに呆気が出る。

だが、悠貴曰く。

「敵の土手っ腹に入るんだもの、それなりに用意はするさ」

と。 悠貴は、自分の部屋に荷物を取りに行く。

そこに、ラヴィの相方のジェスターは立ちふさがり。

「お前、此処がこうゆう所と知ってたのか？ なんて言わないんだっ！……！」

悠貴は、少しイラッとしてギラリと睨む。 その強い眼光に、ジェスターは身をたじろいだ。

「ウルセエな。 俺は、端ッから此処を調べに来たんだよ。 誰もこんな所だなんて知るかつ。 知ってたら警察行くワイっ。 大體、最初に言っただけ誰か信じたか？」

ジェスターは、返答に困る。

「どけ、アホっ」

悠貴の激しい気性の一面が出た。

だが、ルバルトは止めなかった。ただ、

「悠貴、早く仕掛けて休もう。俺も眠い」

悠貴は、いい加減に頷くと。

「わ〜ってる。ザコいんだよ、周りが」

「仕方ない。俺等はプロだが、みんなは素人だ。味わう感じ方が違う」

「ほ〜い」

悠貴は、子供っぽくそう言って出て行く。

誰もが、もう疲れていた。

悠貴は戻って来ると。不安げなままに黙って居る一同に向かって。

「俺が厨房の方からセンサー仕掛けるから、みんな布団や荷物をルバルトさんと取って来いよ」

聞いたルバルトも、同意して一同に。

「甘えようか」

皆が動いた。

悠貴は、ジェイルに近づいて。

「ちと」

と、呼んだ。

「・・・」

ジェイルは、ルバルトの上着を肩に掛けつつ、悠貴の後を着いてきた。

廊下にて、扉の前に向かう中。悠貴は、金属の扉を指差して。

「向こうの関係者の通路、開かないんだけど・・・？」

ジェイルは、横を向いて。

「朝まで無理よ」

「ふうん、あつそ。んじゃ、なんでオッサンを呼び出して、自分分は風呂なんか？」

「もう一人のコンダクターの・・・エミールに相談したら・・・呼び出させて言われたの」

悠貴は、晚餐にて、確かにワシントン方面から来たコンダクターと

ジェイルが、支配人や副支配人がスピーチしていた時に話しかけているのを見た。

「んじゃ、なんで御宅等は生きてるの？」

ジェイルは、口を閉ざして俯く。

苦渋に満ちたジェイルの顔を悠貴はわき目に見て。

「緘口令つか。なるほど・・・敵のスパイ役とも思えるな」

悠貴は、扉の前に来たので、自分のナツプサックから、やや大きいゴルフボールの様なものを出した。

悲壮感に満ちた顔のジェイルは、呻く様に悠貴に言う。

「違うわ。言っても無駄だからよ・・・。私も、貴方も、もう直に殺されるわ」

「じゃ、言いなよ」

と、悠貴は手に取った黒いゴルフボールのようなものを、半分を境に捻る。すると、半分に取れて、青緑のクリアーな光を放つ。それを、膨らむ方を壁に押し付けると・・・見る見る半球体がホツトケーキのような円状になって、壁に引っ付いた。

悠貴は、その光を放つものをセットしつつ、ジェイルの話に耳を傾ける。

ジェイルの語る話に囚ると・・・。相手は、なんでも“血”を吸

うバケモノなんだとか。身体は、見た目に人なのだが。正体は、顔の無い白っぽい半漁人みたいな奴と云う。

「血……、ね」

悠貴は、其処に何か引つかかった。

そのバケモノは、身体全体が舌の様で。特に顔は、血を直ぐに吸い取るんだそう。鉄も切り裂く鋭いツメが40センチぐらいは伸びて。しかもそのバケモノの中には、血を啜った相手に変身が出来ると言う。ただ、見た目だけなんだとか。

聞いていた悠貴は、そこには驚き。

「なんだって？ 変身？」

「ええ……。クセとか、性格とか、傷跡とかは真似できないみたい。個々に能力差みたいのがあって……。喋れたり……。字が書けたり出来るか出来ないかとか……。でも、力は異常よ。普通乗用車とか、軽々持ち上げたりするし……」

「ほ、映画のスーパーマンか」

だが、云う口調はおどける悠貴だが、話には真剣に聞いている。

「私が来たのは、2ヶ月前……。私以外は、その時の客はみんな殺されたわ。私は……。死にたくなければ言う事を聞けつて……。捕まったの」

「ふん。じゃ、今回もまた向こうに逃げ戻ればいいんじゃない

か？」

ジェイルは、ルバルトの上着を強く握って首を左右に振る。

悠貴は、事情が在りそうなので。

「なんで？」

ジェイルは、もう瞳が溶けそうなくらいに眼を潤ませて。

「だって・・・此処は、貴方達のツアーで閉鎖するって・・・足が着きそうだからって」

「人間は、皆殺しですか？　今まで生かされてた者も含めて？」

頷くジェイル。

「一番偉い人、“リスキー”って呼ばれてたわ。　凄く怖い・・・」

悠貴は、妄想して。

「ゲームや映画に出てくる悪魔にたいな感じ？」

「ううん、見た目は人・・・でもっ」

ジェイルが、言おうとした時、

「終わったかい？」

カーエルが、丁度曲がり角を曲がって来た。

驚いたジェイルが、パツと壁の方に向く。

悠貴は、立ち上がり。

「ああ、今終わった」

すると、カーエルは、悠貴に真っ直ぐ向かって来て。

「なあ、少しいいかな……。実は二人に話……。あるんだ」

悠貴は、ジェイルを見てから。

「なんだ？」

「ああ、こっちの人に聞きたいんだ」

悠貴は、自分の境遇からピンと来た。

「まさか、御宅も誰か探しに来たのか？」

「えっ？」

カーエルの暗い顔が、驚きに変わった。

「凶星かい」

悠貴は、横を向いてポツリと。

カーエルは、ジーンズの後ろのポケットから一枚の写真を取り出す。鮮やかな楓の森の中で撮られたものだ。大人びた女性が写っている。

悠貴は、写真を受け取って見ながら。カーエルの語りに耳を向けた。

「僕の彼女・・・なんだ。11月に、実は一緒に旅行に行く予定だったんだ。でも、僕が急な仕事の予定が入って・・・で集合時間に間に合わなかった。彼女の名前は、“トレイシー”って言うんだけど」

するとジェイルは、パツと写真を悠貴から奪う様にして見た。

悠貴は、その行動やその顔を見て。

「知ってるみたいだな・・・」

ガクガクと頷くジェイルに、カーエルはびっくりして詰め寄った。

「トレイシーは・・・トレイシーを知ってるの？」

ジェイルは、怯えるようにカーエルから向きをずらす。

「ねえっ。答えて、教えてくれ・・・トレイシーは？」

悠貴は、カーエルから視線を逸らし、廊下の奥を向きながら。

「教えたれよ。もしかしたら、全員死んじまうかもしれない。せめて、誰だって事実くらいは知りたいだろう」

悠貴の話に、ジェイルは、肩を振るわせて。

「し・・・死んだわ・・・。私、一緒に・・・居たもの・・・。」

驚いたカーエルは、ジェイルの肩を掴んで。

「本当かつ?!」

力無く頷くジェイル。

悠貴は、脇目にジェイルを見据えつつ。

「同じ時にこのツアーにか?」

涙を流して語るジェイルは、首を左右に振って。そして、思い出すのも辛い表情をして、泣き声で。

「私の・最初の・・・コンダクターの・・・お客さん・・・。」

悠貴は、自分のカードの様なプレート型の携帯も取り出して、画面に父親の顔を写し出して。

「この男の事は?」

カーエルは、ジェイルと一緒に見て驚く。

「あゝっ・・・晚餐に居た・・・副支配人?」

だが、ジェイルは、涙目の顔を何度も頷いて。

「知ってるわ……。その人も、最初のお客さん。すつ・凄
一杯……。あのバケモノ達を倒して、一週間も生きた人……。そ
して、貴方の……」

と、カーエルを見る。

「俺の？……何？」

ジェイルは、涙を流しながら。

「貴方の彼女の血を……。吸った……。バケモノの一匹に、ツメで刺
されたわ。だ・騙まし討ち……。されて」

カーエルは、直ぐに何を言ってるのか解らなくなり。

「は？ 何だつて？ ……“血を吸う”？」

映画や、ゲームや小説に出てくる化け物話しだと思っただが。

悠貴は、理解が行く。

「そうか……。そうかつ。だから、晚餐で俺が見た親父は、姿
形以外は別人だったって訳かつ、クソっ」

と、一人で納得する。

“親父”と口走った悠貴を見たジェイルは、何処か携帯の映像の中
年男性と似ている悠貴を見て。

「貴方・・・まつま・まさかあの人の・・・？」

「ああ、探しに来たんだ」

悠貴は、そう言って肯定する。

理解したジェイルは、悠貴に近づくと。

「奥・・・」

「あ？」

見た悠貴の眼差しと、ジェイルの涙眼が合う。

「あなたのお父さんの遺体は、まだ回収されてないわ。一番大きい病棟の・・・一階の奥に・・・元の更衣室があるの。そこに、怪我しながら逃げ込んだわ。丁度ルバルトぐらいの年頃で、あの支配人の姿の人と・・・大怪我して、二人で・・・」

その時だ。悠貴の瞳がクリアっ見開かれた。その瞳に宿る強い意志の輝きは、なんとも力強く湛えられていた。悠貴は、一つだけ強くしつかりと頷いた。

「助かった、それが一番知りたかった」

そこに、ルバルトも来た。

「おい、終わったのか？」

ルバルトを見る悠貴は、応えて。

「ああ。後、宿舎の方にも仕掛ける」

と、動き出した悠貴は、カーエルの肩に手をやって。

「カーエル、此処は普通じゃない。多分、俺もアンタも、最も見たくないモノを見るかもしれないぞ」

カーエルの背筋に冷汗が走り、恋人の死の事が浮ぶ。

10、不安の夜、パラノイアの死亡

深夜、2時を過ぎた頃。締め切ったオリエンテリングフロアで、疲れ切った全員が寝ていた。

悠貴は、一人ステージの上で、堂々と寝転がる。

他、みんなは、固まったりしてルバルトの間近に寝る。

コールなどは、怯えて顔をテーブルクロスの中に入れて隠れてるつもりで寝た。

エルザが睡眠薬を持っていて、ナンシーもアルチェンもエリスも、薬で眠った。悠貴が、強引に寝ると言ったのもあってだ。

さて、その頃より、少し時間を戻した夜11時頃。

「なっ！　なんだっ？！！！！　何で閉まったアっ？！！！！！！」

降り続く雪に強風を伴い、吹雪ブリザードに向かう外で。エリスの父親のハンスは、宿泊施設の玄関に来て驚いた。いきなり、ブ厚い鋼鉄のシャッターが下りて、中に戻れなくなった。

この男、やはり頭がズレて狂っているのか……。どうも、言動が幼稚だ。

「開けろっ！！！！　開けろおおおおー！！！！！！！！」

蹴ったり、叩いたりしてみるが、なんの反応も無い金属のシャッター。一応、ロングコートに、ハイネックのセーターなどの厚着はしている。

この男は、一体なんで外に出たか。理由はなんと、娘を犯す為に配電盤を探しに出たのである。停電させて、エリスをパニックの中で外に連れ去ろうと考えていた。

しかし、この吹雪く雪の中を探しても、それらしき場所は見当たらず。施設や歩ける範囲を一回りして戻ってみれば、この通り入れなくなった。リスキーが、“訳が解らない”と言ったのは、この男の事だ。

ハンスは、困ってまた宿舎の周りを見回る事にした。

なにせ、この宿舎。 オリエンテリングフロア以外に窓が無い。円形のフロアに行けど、窓にまで厚い金属もシャッターが。

「寒いいつ。 おのれええーっ!!!」

頭も、眉毛も雪に塗れる。 もう積雪が1メートル以上に届く勢いで降り積もり。 歩く足どころか、身体の腰までが埋まりそうだ。 190以上の体格ながら、全く雪に纏れる。

「クソっ!!!!!! なんで私がこんな目につ!!!!!!」

ハンスは、宿舎の裏にまで来た時だ、

「ん？」

向こうに、誰かが歩いている。 木の陰に隠れつつ近づいて行くと、相手は知らない男では無かった。 あの、自分達を連れてきたバスの運転手が居たのだ。

(あの野郎っ。 捕まえてブン殴ってやる)

だが、ハンスが近寄る前にバスの運転手は、バスガイドに案内されていた明日のゲームの始まるC病棟にドアを開けて入って行ってしまう。

「おいつ、コラア待てええっ!!!!!!」

大声で言うも、吹雪が強まり。 ビュービュー言い出して聞こえて

いないようだった。

「このバカがああー！！！！」

寒さとエリスを手籠めに出来ぬ思いに悶えた中年男は、異常な眼に汚れた光を宿して、必死に雪を掻き分けてC病棟に入りこんだ。アルミのドアは、もうボロい。

「クソクソクソっ！！！！」

中に入ると、真直ぐの廊下が暗い中で伸びている。だが、外に点っている街灯の様なライトでは、建物内部まで光がしっかり届かない。ハンスは、悴む手を上着のポケットに入れて、ジツポライタを取り出してで火を起こした。

「アチっ」

火力を一番上に上げ過ぎて、起こした火が指に掛かった。イラつく顔で廊下を進んで見れば、左右の壁がどんどん斜めに下り、T字路の廊下にぶつかれば、壁は階段になっていた。

「なんだ・・・階段か」

見上げる階段の左右どっちいっても、二階へあがる途中の踊り場に向かう様だ。二階は、踊り場を経由して、“く”の字に上って行く造りであった。

「アイツ・・・どっちに行つた？」

ハンスは、とにかく廊下を右に行ってみようと思った。廊下を階

段に上がらずに行けば、そこは広いロビーの様な広間が。崩れた腰掛の木枠や、観葉植物を飾る昔のプランターのプラスチックが壊れて散らばる。

(随分と広いな……。 テニスコート2・・3つはあるんじゃないか?)

本当に、それぐらいの広さがあるような感覚のロビーだ。しかも、奥の一角には、長い受付のカウンターの名残のようなテーブルが朽ち果てている。

ハンスは、此処が気味悪く。早く離れたくなった。

その時……。

カサカサ……カサカサカサ。

何かが、ロビーの床を動くような音がした。

「ん？」

音の方を向くと……なにか黒い物体が見える。シャッターの下りた長い空港の入り口のようなガラスゲート枠が並ぶ前の一角に、なにやらゴミのようなモノが溜まってる場所から音がするではないか。動く黒い物の高さは、ハンスの向う脛くらい。

(何だ? 何か居るのか?)

近づいて行ってみると……なにか黒いサーフボードみたいなモノが蠢いている。

と、百足の様な生物の胴体を蹴つ飛ばした。 凄^い勢^い飛^んだ生物は、5メートルは軽く飛んで壁に当たり、ズルズルと朽ちかけた受付カウンターの内側に落ちた。

その勢いに圧倒されたのか、ゴキブリじみた生物がススつと動かなくなつたハンスから退いた。 首^が千切れて無くなり、夥^しい血を流すハンスの遺体を前にして、バスの運転手は着ていた服の胸元を握^って、引き千切るようにして剥^いだ。

「.....」

この氷点下30度近い寒さの中、上半身裸になつた運転手は、なんと.....その血溜まりの中にうつ伏せに寝^転が^った。 到底信じられない、有り得^無い行動だが。

チウチウチウ.....

暗いロビーの中に、ストローで何かを齧^るような音が響^いた。

「欲望の産物 FILE 4」(後書き)

騎龍です^^

今月は、この話まで^^

来月、どうなるか、お楽しみに^^

「欲望の産物 FILE 5」

「 Intelligence cri
sis ファースト」

11、朝

朝は、どんな最悪の中でも普通に訪れる。 生きている限り……。

パツと眼の覚めたエルザは、寒さに震えて起きた。

「……あ」

もう、悠貴が起きていた。 一人で、コーヒーマイカーやら色々持
つてきて、ステージに一番近いテーブルの上には電子レンジまで。
晚餐の食事を暖めたりしているようだ。

ふと腕時計を見れば、午前8時を回っている。 毛布を上げて、壁
に並べた椅子の上に避けてから、悠貴の元に向かった。

「お早う……もう起きてたの？」

悠貴は、肉やらサラダなどを炒めて来たらしく。 湯気の上だった
料理を皿に乗せていた。

「ああ、もう朝だし」

エルザは、悠貴の近くに来て。

「朝から随分食べるのね」

皿だけで、四皿。 ケーキやスープの皿を除いてだ。

「腹減った。 俺、大食い体質だから」

悠貴は、ぶつきら棒にそう言った。

皆が緊張の面持ちで起きてくる中で、悠貴は済ました顔で食べる。

全員が起きたのは、9時前。

悠貴の腰を下ろした横に、ルバルトもどっかりと座り。 ステージの段差に腰を降ろしてコーヒーとパンを齧る。

「良く食べれるな・・・」

気味の悪い物でも見る様な言い草のフィリップに、二人は無視。

皆、二人が違う意味で緊張しているのを、静かな様子から垣間見た気がする。

その二人の近くに、自然とカーエルとジェイルが居た。

悠貴は、腕時計を見て。

「そろそろ、朝の9時半だね」

ルバルトも、

「うん、そろそろ動きたいな」

そんな二人の会話に、誰もが何を言ってるのか解らないと思っ
た時だ。

やあ、おはよう。 諸君、良く眠れたかな？

「えっ？」

皆が驚き。

「また放送だわ・・・」

エルザは、天井を見上げた。

悠貴は、ボヤク様に。

「やっとかい」

放送は続く。

諸君、私はこのツアーを計画した者だ。 名前は、“リスキー・
ルーラー”（危険の支配者）と云う。 早速だが、我々はキミ達の
DNAが欲しい。 だが・・・髪の毛なんて詰まらない物じゃない。
死体が欲しいのだよ。 我々の食料であり、我々に新しい肉体を

与えるからだ。ま、言っても解らないだろうがな。この施設は、キミ達を殺す為に用意されたテーマパークだ。キミ達も只で死ぬよりは、あがいて死んだほうが満足だと思うから用意したのだ。さて、テーマパーク内には、前に来た客やらが残した武器もほったらかしにしてある。使えるかどうかは解らないが、利用してくれ給え。精々あがいて、我々に歯向かって楽しませて欲しい。では、奥の扉を開ける。自由に進み給え

放送は、終わった。

全員は、お互いを見合ったりしている。意味が解らないのだ。

悠貴は、

「一方的で、ムカツクね」

と、立ち上がると。突然に……。

「今から一ヶ月前だ」

と、いきなり、喋り出す。

「あ？」

フィリップや皆が、悠貴を見た。

悠貴は、ステージの上に立つ。

「俺のオヤジが行方不明になった。何時も一緒に仕事していたし、毎年母さんの墓参りしてた命日のある今月半ばにも帰って来なかつ

た。そして俺は、一人で捜査した。“旅行へ行く”の一言を残した親父を探してな」

気の強そうな女性のルーシーは、イライラした顔で。

「だからなによ、一体何の関係あんのよっ」

そこにルバルトも立ち上がり。悠貴の話を継続させる。

「俺も、同様だ。俺の親友で同僚のアレックスが旅行に……。なんでも、今このアメリカで謎の失踪者が続出していると云う。情報屋が俺に持ってきた情報だったが……。忙しい俺の代わりにアレックスが引き受けちゃった。しかし、それから音信不通……。で、探し回った訳さ」

悠貴は、ルバルトと見合って頷く。ある程度、話す気になった。

悠貴が先に貰い。

「昨日の晚餐の時、俺のオヤジは副支配人として……。そして、ルバルトさんの親友は支配人として現れた」

驚いた皆。その中のニモンドが、

「何だっつてっ?!?!?!」

ルバルトは、疑問の皆を左手で制して。

「問題は、支配人や副支配人が、我々二人に気付いてもいない素振りだった以上に、姿以外が全ておかしかったこと。姿形は、本人

なのに、全く本人と違うんだ」

悠貴とルバルトは、昨日も言い合った問題点を挙げた。

医者エルザは、医学的に在り得ないと思い。

「そんなのおかしいわよ。二人が言ってるのは、有り得ない。人間は洗脳されていても、クセや精神的に味わった恐怖などは潜在意識に残ってるわ。しかも、筋を壊したはずの手でシャンパンなんて、手術でもしたって言う訳？ アレルギーなんて、催眠術でもどうにも出来ない生体過剰反応よっ？」

悠貴は、指を刺して。

「その通り。多分は、別人だろう。一々搔つ攫つた人間の体なんかメンテナンスして、DNAレベルでイジクル・・・なんて、おかしい話なものな。でも、何故に俺やルバルトさんの知人が此処に姿だけでも居るのか・・・。その答えを、ガイドのジェイルが教えてくれた。確かに、旅行の客として来ていたんだ。俺の親父も、ルバルトさんの友人も・・・、この場所に。俺達と同じ様に、この場所に客としてな。何でもこのウソクセゝ旅行は、ネットの中だけで全てが決まってる」

皆が、自分の事を思い出す。

ルバルトが繋いで。

「共通点は幾つもある。その1つは、誰もがインターネットの中でアンケートに答えている。2つ目に、コールや俺達みたいに偽って答えた者以外は、個人、または夫婦などで来たなら家に誰もいなく

なる家庭環境に在る。 3つ目、旅行は急激に決まった。 しかも、スケジュールの都合を即決して決められた者だけが当選する、抽選クジ」

代わる悠貴は、渡されたあの旅行案内のファイルブックを片手にしていて。

「俺達は、旅行会社の代理店を調べたが、真つ赤な嘘。 店も何も無い。 しかも、このツアーは必ず早朝に出発して、バスの出所は毎回変わってる。 一見すると曖昧で、杜撰で、適当なやり方に見えるが。 会社の情報などは、“ミステリーツアー”と称してバスの中で開かされるし。 ネットの中だけの幽霊会社は次々と姿を変えて痕跡を消し去り、行方不明者は只の失踪事件扱い。 このツアーの起こり始めたのが、今年の7月・・・。 それ以前は、ネット中でもツアーの応募に関する情報は存在してない。 俺は、オヤジにこの事件の捜査を頼んだクソツタレから、チケットを受け取った」

ルバルトは、コピーしてきた用紙を皆に見せながら。

「俺は、俺に情報を持ってきた情報屋からだ。 悠貴の挙げたのは、どれも状況を踏まえた推理の域を出ず。 捜査機関を動かす物証が欲しくて、潜入捜査に来た。 一応、俺の行った捜査状況は上層部に残して来たが。 ジェイルの話では、この場所は今回限りとか。 多分、証拠隠滅が行われる。 だから、俺が死んで行方不明になつて捜査が開始される頃には、この場はどうにかなってるだろう」

悠貴は、ファイルを閉じて銃を手に。

「脱出して、公にするしか無いって事。 ココ、携帯の電波もな〜んも届かないから。 先に言っておく、信じるも信じないも勝手。」

「ただ、俺は捜査に行くから。あんた等がウダウダ言ってるのとか、どうする気も無い。以上」

ルバルトは、悠貴のいい加減な言い方をどうする気も無いのか、見もしないで。

「残るか、残らないかは。皆で決めてくれていい。ただ、俺もむぎむぎ死にたくないし、この現状の捜査に行く。正直、安全地帯なんて、何所にも無い」

この奔放な言い様に怒ったエルザは、ルバルトに苛立った顔で。

「何よその言い方はっ?! 貴方は公務員でしょうがっ。人命が最優先が鉄則でしょう?!?!」

「誰も守らないとは言っていない。ただ、俺や悠貴の指示に従えない者を守り切る余裕も手段も無いと言ってるんだ。俺ですら、籠の中の小鳥さんなんだからな。いつ死んでも、おかしくないって訳」

その時だ。蹲っていたカーエルが立ち上がった。

「僕は、二人に着いて行くよ。この現状の情報を持って居るのも二人だし。バラバラでやっても殺されるだけだ」

困惑した顔のニモンドも。

「私もだ。正直……どうしていいか解らない」

女性達も、次々に着いて行くと言い出す。

一方で、フィリップは悠貴やルバルトに。

「じゃ、武器を探してくれよ。武器を手に入れたら、自由でいいんじゃないか？」

すると、ラヴィのパートナーのジェスターも。

「そうだな、私も銃は扱える。武器を手に入れてくれれば、協力も出来るし。手分けしてもいい」

悠貴は、呆れた顔でルバルトを見ながら。

「だつてさ」

ルバルトは、仕方無い顔で。

「個人の責任でやるのなら、仕方無い」

悠貴は、サバサバした顔と言葉で。

「なら、調べるついでに武器確保ですかい？」

答えるのは、ルバルトではなくジェスターで。

「ああ、そうしてもらいたいね」

悠貴は、頷くだけだった。

さて、ルバルトも悠貴も、昨夜この二階にあるタミーの防火用消火

ホースの中に行くのは止めていた。

悠貴は、ルバルトに近寄ると。

（んで？ 上の消火ホースの扉はどうするよ）

と、耳打ちをする。

（行ってもいいが、手分けになるな）

（俺が一人でこっそり行こうか？）

（一人で大丈夫か？）

（ああ、全然）

ルバルトは、この申し出に迷った。だが、道が二つ在る以上は行って先を知りたい。だが、どんな危険が待つか解らない。悠貴を一人で行かせていいものかどうか……。

（解った、一人で頼む。俺は、扉の先を……）

悠貴は、ルバルトに真剣な顔で言う。

（どっちも危ないぜ。奥の扉はゲームへの入り口。つまりは罠の入り口だ。二階の道は、殺人犯にいきなり出くわす可能性が高い。どっちもリスクが大きい。先ず、どちらかに絞ってもいい。この人数を守るのも骨が折れるべさ）

ルバルトは、それは先刻承知ならばと。

(なら、先ずは奥の先に行つて見ないか？　もし、罨で行き止まりなら二階の道を・・・)

(それでもいい。　念の為に。　二階の扉の前にも、階段にも、二階の廊下にもセンサーを仕掛けてある。　センサーに引つかかったら、俺のポケPCに信号だけが着て。　音は鳴らないから相手に悟られる心配が薄い)

ルバルトは、悠貴の判断の良さに加えた用意周到さの広さにも感心した。

(よし、では先ずは奥からだ)

二人が離れると。　腕組みのエルザが二人を見ていて。

「 隠し事？　いい趣味ね 」

悠貴は、エルザに構わずにジェイルの元に歩いて行き。

「 悪いが、道案内を頼むぜ。　皆とは別で、俺等と先頭を来て貰う 」

寒さに蒼褪めていたジェイルは、力無く頷いて。

「 どつちに殺されるも一緒よ・・・ 」

悠貴は、鼻で笑つて。

「 俺は、自分で死ぬ気も無いし、アンタを死なす気も無いぜ 」

と、顔で“来い”とジェスチャーした。

ルバルトは、直ぐにカーエルとニモンドを見て、

「俺が呼んだら皆を少しづつ前進させてくれ。もし誰かが居なくなっても、探さなくていい。それは、俺と悠貴がやる」

二人は、了承した。

12、デーマパークの入り口は、地獄の入り口

さて、スタッフが昨夜出入りしていた扉を先に行く悠貴とルバルトとジェイル。

悠貴は、先ず廊下の曲がり角に在る厨房に差し掛かった時に、ピタリと立ち止まった。

「・・・」

ルバルトは、不思議に思っ

「どづした？」

「いや、厨房からヘンな音がする……。さっきはしなかったのに……。何か居る」

悠貴は、また厨房に入りながら。

「姉さんは来なくていい」

と、ジェイルを見る。

ジュルツ・ジュルジュルル

厨房に入った悠貴に。厨房の入り口にて悠貴を見守るルバルトの耳に、なにやら不気味な音が響いて来た。

「おい悠貴……。今のは一体何の音だ？」

ルバルトは、厨房を見渡すが、音の出所が解らない。

悠貴は、厨房の天井の縁に沿って通る空調ダクトを見てから。ルバルトを見て、口に右手の人差し指を立てて、“静かに”と。

ルバルトは、黙り頷く。

悠貴は、そつとダクトを指差して頷く。

それを見たルバルトは、スツと銃を構えてダクトをに向けた。確かに音が聞えるし、ダクトの音がしている部分が震えている。中に何か居そうなのだ。

悠貴は、右手で“そのまま、撃つな”とジェスチャーすると、背中

のコート中に手を入れて、スルリと刃渡り40センチ近い包丁を引き抜いた。

(どうするつもりだ?)

ルバルトは、黙ったままに見ている。悠貴は、何か動いているような不気味な音が徐々に厨房の奥に進んでいるのが解っているようで、先回りした。そして。

「あっ」

ルバルトが小さく声を上げたのは、悠貴がフロア中央の調理代と壁沿いの流しの間に、フワリと2メートルは跳躍して素早く包丁を振るったからだ。空気を斬る音と、薄いステンレスのダクトを切断する小気味良い音が厨房に響く。

「出てくるぜっ!!」

着地と同時に、悠貴が鋭く言っつて銃を構える。

「むっ」

ルバルトも銃を構えた。

切断されたダクト管は、中にいる何かの重みで、切断されたあたりからグニヤリと下に垂れ下がった。

すると……。

「なっ!!」

「何だあつ?!?!」

悠貴も、ルバルトも驚いた。出てきたのは、異形の化け物と言って良いだろう。又メ又メした粘液を纏う蛇の頭と云うべきか、ミズのようなワームと云うべきか。

「悠貴ツ!! 下がれっ!!」

ルバルトは、直ぐに銃のトリガーを引いた。38口径の少し古いタイプの銃声が響いた。

自分の目の前にズルリと這い出てきた生物に対し、悠貴は、軽いバツクステップで距離を取りつつ、その異形の生物を観察していた。

腐ったドブの様な色をした身体に、モゾモゾと伸縮して進行する身体。ルバルトに撃たれて当たった場所からは、腐った汚水のような体液が飛び散った。それでもこの異形の生物は、どんどんダクトの斬った場所から厨房に這い出て来る。

悠貴は、正面から見ていて在る物に気付いた。

「ルバルトさんっ!!!! コイツ顔が有るっ!!」

ルバルトは、いきなりの化け物に慌て驚き何の事かと解らず。

「えっ?!?! 何だつてツ?!?!」

悠貴は、グネグネと動く直径50センチ位の化け物の先端に丸く見える部分を指指して、

「此処に人の顔らしいモンが有るんだってっ!!」

と、銃を構えた。膜の様な頭部の丸い中に、口・鼻・眼の様な物が曇り硝子越しに見えるように見えている。悠貴は、ニユウ〜とその物体が自分に近づくのを見定めて、

「オイ悠貴ッ!! 退けっ!!」

と、ルバルトが叫んだ時に、悠貴がトリガーを2回引いた。重い音で、“ドン!! ドン!!”と鳴り、ルバルトが見ているやや側面からは、大量の体液が頭部から飛び出すのが見える。だが、何より驚いたのは、丸で空に浮く様に素早く悠貴がバク転して距離を取った事だ。音も無くフワリと調理台の上に着地していた。

ガタガタっ!!! ドサっ!!!

悠貴に撃たれた化け物は、暴れ出しながらダクトから長い胴体を更にズルズルと這い出してくる。又チャネチャと、身体の周りの粘液が床にて気味悪い音を立てている。どうやら、苦しんで暴れているようだ。

飛び乗った台の上から生物を見下ろす悠貴は、撃った頭の丸い部分の膜が裂けて黒ずんだ黄色く濁った汚水のような体液が溢れ出し、膜の裂けた頭部からクネクネグニユグニユと人や猿と云った様な感じのふやけてブヨブヨした頭部がヌウ〜と現れたのを見て。

(コレが弱点か?)

と、銃口を向けて狙い澄まし。

“ドン！！！”

と、また火花が吹かれて。弾丸は化け物の頭部らしき所を撃ち抜いた。

カツカツカツ………

撃たれた頭部らしき物が激しく動いて暴れ出し、口の部分からは痙攣に似た動きで歯が噛み合う音が響いた。ボタンボタン暴れる長くて太い胴体……。だが、その音はどんどん収束に向かい、遂に化け物はピクピク動くだけになった。

「ゆっゆっ……き……どう……した？」

生まれて初めての事に驚くルバルトが、脂汗を浮かべた顔を悠貴と化け物に交互に向ける。

モンスターを見下ろしている悠貴は、瞳を細めて。

「死んだ……みたいだね。しかし、何だコイツは？」

と、調理台の上にしゃがんでその化け物をマジマジと見始める。

ミミズの様な胴体に鱗の様な物は全く無く。両生類に、“ウーパールーパー”と云うエラ呼吸のトカゲみたいな生物がいるが、そんな感じに似ている。しかし、手や足は見られない。長い胴体は、まだダクトに繋がりに入っていて、出てきた身体の長さだけでも3メートルは有ろうか。頭部が蛇の頭部の様に丸くなっているのだが、その外見は頭とハッキリ区別のつくものでもない。

「ルバルトさんよ。コイツは・・・地球に居る動物か？」

悠貴の質問に、驚きで生きた心地の無いルバルトは。

「さ・さあ・・・俺は生物にはあまり・・・」

悠貴は、特殊な銃口の銃を化け物の頭に向けて。

「ホラ、身体の中に頭があるぜ。丸で、猿かなんかの頭に似てる」

ルバルトは、背後のジェイルを振り返って見て、

「知ってるのか？」

怯えているジェイルは、激しく頭を振って。

「見た事無いモンスターだわ」

ルバルトは、“モンスター”と聞いて、一瞬口が開いて閉まらなくなり・・・。

「あゝ・・・じゃ、見た事あるモンスターとやらも・・・居るのか？」

ジェイルは、悲しみと怯えの交錯する歪んだ顔で。

「アナタの親友も・・・悠貴のお父さんも・・・そのモンスターに殺されたわ。あんな生物、この世に存在なんてしないわよ・・・」

「なっ?!?!」

ルバルトは、まだこの話を聞いて居なかった。驚いて、衝撃が重なりジェイルに詰め寄った。

「どうゆう事だっ?!?!」

思わず言ってしまったとジェイルは、横を向くと。

「悠貴から聞いたわ……。昨夜の支配人はアナタの……。親友
なんですよ。副支配人は、悠貴の……。あの二人は、私が始
めてのツアーガイドをやらされた時のお客で来たわ……。二人
は、凄く……。息が合っていて……。この地獄で1週間も生きてた
……」

「此処で戦ってたのか?アレックスも……。悠貴の父親も?」

ルバルトは、驚くべき事実だと思った。

だが。震える声に変わるジェイルは、泣き出しながら。

「そう……。でも、二人とも死んだわ。カーエルの……。彼女の血……。吸ったノーフェイスは、一番優秀なモンスターだもの。
二人、騙されて……」

ルバルトは、何がなんだか解らなくなり。

「おい悠貴、ジェイルがおかしな事を……」

すると、悠貴は、眼下のモンスターを見つつ。

「ルバルトさん、ジェイルの言っている事・・・意外にマジかも知れないぜ？」

「おっ、お前っ！！ 知ってたのか？」

「ああ、昨日聞いた」

ルバルトは、厨房に入り。

「どうゆう事だ？ 説明してくれ」

悠貴は、ジェイルの昨夜の話をした。 血を吸うモンスターが居て、凄まじい怪力を持ち。 人の血を吸っては、吸った人物に変身出来ると・・・。

「んな馬鹿なっ！！！」

驚く事実にルバルトは怒った。

だが、悠貴はクルリと屈んだままにルバルトを見て。

「でも、それなら俺達が見た昨夜の支配人や副支配人と、実物の人物の食い違いは説明つくぜ。 大体、この場所も、今死んだモンスターも、もう異常レベルだ。 現実の固定概念を外して、目の前の現実をリアルに受け止めないと、理解なんて出来ない気がする」

ルバルトは、流石に頭痛が来た。 こんな事が在りうるのかと疑った。

そこへ、悠貴は。

「ルバルトさん、こっち来て見てみなよ。 たった今死んだ生物が、こんな風に成るか？」

と、調理台の影になるモンスターを顎でしゃくって示す。

「……」

ルバルトは、悠貴を何度も見ながら、恐る恐る調理台に近付き、そして覗き込んだ。

「あゝっ！！！」

ルバルトは、目の前の事実息を呑むほどに驚いた。 モンスターが、今死んだばかりの生物が、ドロドロに溶け出していた。 特に、悠貴が銃にて撃った部分や、顔の様な丸い前頭部の膜が裂けた部分から、ドロドロと泡を立てて……。

ジェイルが、入り口から中を見て。

「モンスターの体液は有害みたい……。 モンスターの体液が皮膚に付いたら、激痛を伴って肉まで溶かすわよ」

悠貴は、ジェイルを見てからルバルトを見て。

「ルバルトさん、五年前……。 だっただか。 狂った科学者が、人体実験して逮捕させた事件を覚えてるか？」

右手を口に当てて震えるルバルトは、頷いた。

「あ・・・ああ・・・異常な、人体実験してた奴だろう？」

悠貴は、頷く。

「そうだ、ブタに人工授精で生み出した人間の顔を移植して生かしてた・・・。しかも、知能の無い女性を生み出して、毎晩の夜の相手にしてだろう？ バイオテクノロジーの進化で、もう大抵の事は出来る世の中さ。此処も、もっと異常な事・・・やってるんじゃないか？」

ルバルトは、何の気なく。

「でも・・・証拠は・・・」

悠貴は鋭く。

「探しに来たんだろうがっ！！！」

ルバルトの顔が、厳しく成って悠貴に向く。

悠貴は、キーラが殺されていた部屋の方を指さして。

「もう、人が死んでる。 現実に見えることは、受け入れるしかない」

悠貴は、そう言ってジェイルの居るほうに歩いて、調理台から降りた。

ルバルトは、ドンドン溶けてゆくモンスターの姿を見て、

(なんて事だ……。こんなとんでもない事件に……。ブチ当たる
とはな)

気が狂いそうな実情。 此処は、丸で地獄の様な気さえした。

(アレックス……。お前……。もうっ!!！)

なにより、それが信じられない……。信じたくない言葉だった。

「欲望の産物 FILE5」 (後書き)

どうも、騎龍です^^^

自由な時間が急に無くなり、書く量が激減して遅くなりました^^^；
とにかく、間隔連載はして行きますんで、よろしくお願いいたします
す^^人^^

悠貴は、殺風景なコンクリートに囲まれた通路を歩き出して。

「動かねえ。 多分、死んだな」

この通路は、応接室などが有った三つの扉で行き止まっていた場所の正面の扉、“関係者通路”の先である。

ルバルトと悠貴は、厨房で見たモンスターをエルザを呼んで診させた。

そして、カーエルとジェルを連れて、先に進むべく何者かの血の広がっていた応接室へのドアもある廊下の行き当たりから、関係者通路へと進んだのである。

降りの階段を降りれば、この通路に下り。 いきなり、どす黒い液体を口から垂れ流す汚い猿の様な得体の知れない化け物に襲われた。凶暴さが迸る赤い瞳、明らかに餓えて狂った様に襲い掛かってくる猿は、おぞましいモンスターだ。 悠貴は、素早い動きでゴリラ並みに大きい猿の様な化け物の噛み付きや、突進をかわして頭を射抜く。

その後、廊下の長い直線が伸びる先から現れたのが、このムカデのモンスターだ。 毒々しい青い身体に、ヌラヌラと滴を垂らす無数の棘の様な足は赤々しく不気味だった。

悠貴は、最初はムカデの身体を撃つたが、頑丈な甲羅に弾を弾かれてしまう。 代わって、クチャクチャ動く口の中に銃弾を撃ち込み

次に、眉間のような場所を射抜いた訳だ。 正確な判断と、的確な射撃。 弾の軌道すら完璧に計算しての撃ち込みは天才的だ。

悠貴は、足をヒクヒクさせるムカデに近寄り。

「4メートルはあるな。恐竜時代の生物かよ。ケツ……ムカデが蛇みたいに鳴くかよ 気味悪いモン造りやがってっ」

と、苦々しい顔で吐き付けた。

ルバルトは、脅えて腰の砕けそうなジェイルを伴い。

「バイオテクノロジーも、こつ見ると只の黒魔術的な穢れた技術だな」

悠貴は、ルバルトに向かって。

「同じ物だ。 操り切れない手に負えないスキルだよ」

と、言ってからジェイルを見て。

「見慣れちゃいないのか？」

蒼褪めたジェイルは、泣きそつな顔で。

「当たり前じゃないっ!!! モニター越しで見て気絶し掛けるのにつ!!!」

殿のカーエルは、悠貴にムカデを見下ろしながら。

「見慣れる方がどうかしてる……」

だが、悠貴はもう見慣れて来ていた。

「これから、こんなモンスターを何匹相手にするのか知れない俺は、もう見慣れてきた」

と、先に進みだす。

「嘘だろ……」

カーエルは、俄かには信じられない。

逆にルバルトは、悠貴に近い。

「毎日、人の惨殺死体を見ている所為かな……。俺も、少しだけ慣れて来た。さ、行こう」

黒い液体を流して動かないムカデを避けて、ルバルトはジェルを連れて悠貴の後を歩く。

カーエルは、ムカデを見て。

「有り得ないよ……。こんなもの」

と、顔を歪める。理解の出来る範囲を超えていた。

だが、廊下には“ブーン・ブーン”と羽音を響かせて、トンボの巨大なモンスターや、蟻の様な、ゴキブリの様なモンスターまで現れる。

どのモンスターも、頭や急所に人の顔の様なものが膜に包まれている。

るような部分を持っていて。そこを撃ち抜くと、臭いヘドロのよ
うな液体を撒き散らして死ぬ。悠貴が、キッチンナイフで走り抜
けざまに膜を切れれば、映画に出てくる宇宙人に良く似た白い顔に酷
似した物が在った。口をパクパクさせて、顔だけがポツカリ開い
た部分に埋まっているような物である。

だが、ルバルトに遠目から狙い撃ちされ倒されると、その部分は急
速に腐り始める。

「うっ……おえええっ」

銃弾を受けて死んだモンスターの急所が急速に腐り出して行く光景
に、カーエルが、余りの気味悪さに耐え兼ねて吐いている。

通路の奥は、200メートルぐらい先で右に折れ曲がり。その先、
30メートルぐらいの所に、また上上がる階段を見つけた。

「ルバルトさんよ……。地理的に言って、この上は病院だぜ。
距離を考えると……。恐らく中央の第二病棟辺り」

ルバルトは、吐く息白いままに悠貴を見て。

「畏の可能性……。強いな」

悠貴も、眉間に皺を寄せて。

「たりめ〜だ。俺が先に出る」

「解った、援護する」

ルバルトは、ヨロめいて立ち上がるカーエルを見て。

「ジエイルを守れ。俺達二人で、上に上がる」

カーエルは、吐いた後の血色悪い顔で頷いた。自分で志願して来た手前、カーエルもそれなりに迷惑を掛けない様にとしているのか解る。

悠貴は、カーエルも見ずに階段を三段飛ばしで音も無く駆け上がる。

ルバルトは、その後を二段飛ばしで着いて行った。

25・6段上には、壁にアルミ製の凹み傷の見える扉があった。

埃か何かで、ドアはかなり汚れていた。悠貴は、銃を構えて正面に立ち。ルバルトは、ドアノブに手を掛けて、身を屈めて右の壁に側める。

「・・・」

「・・・」

二人の目が合う。

頷く悠貴。

“行け”のジエスチャーのルバルト。

ルバルトが、グッとドアノブを捻って扉を開いた。

悠貴は、捕食動物の様な動きで。俊敏で軽やかに、開かれた扉に

走りこんだ。

「……」

ルバルトも、直ぐに銃を構えて入り口から中を窺った。

「ン、誰も居ないか……」

ルバルトの声に、悠貴は、銃口を下ろして。

「ああ、此処は……旧い診察室みたいだな。ぶつ壊れてボロボロだが、ベットらしき物やライトがある」

ルバルトも、立ち上がって中に入った。水色のタイル張りの部屋、天井にはパネルライトが張られている。倒れて踏み潰された感じのロッカー……壊れてバラバラの簡易ベットのパイプ部分……レントゲンなどを見る照明用具も壊れて埃塗れだ。

悠貴は、壁・床・器具のこびり付いている黒いシミを触り。

「血だな……。あっちこっちに着いたら」

ルバルトは、その血が色の黒く酸化し切ったものから、まだ部分的に赤い新しいものなどをみて。

「何度も、時間や日にちがずれて血が飛び散ったんだ。何人も……か」

悠貴は、ルバルトを見ずして辺りを見つつ。

「何十人かも」

「想像したくないな」

悠貴は、ルバルトを直視して。

「どうする？ 心配なら、皆をこっちに移動するか？」

ルバルトは、入って来た反対に黒い木製の扉を見て。

「先に、外を少し見て回ろう。移動は、カーエルでも出来る。

それに、暑い連中はなるべく暖かい部屋で居てもらおう」

悠貴は、扉に向かいつつ。

「ぬくぬくですか？」

「ああ、ぬくぬくしてもらいましょ」

ルバルトは、通路に顔を出して、階段下に居るカーエルとジェイルを呼んでから。

「この部屋で待機だ。悠貴と、部屋の先を見る」

ジェイルが、階段に近づいて。

「扉の外は病棟よ。第二病棟なら、リクライニングフロアっていう広いロビーと、奥の正面に食堂があるわ」

ルバルトは、キザっぽく敬礼して。

「了解」

と、身を引いた。振り返れば、悠貴は、もうドアを開いて廊下に出ている。

(早い)

開けっ放しの扉の向こうに、悠貴が立って左右を見ている。

「どうだ？ 何か有りそうか？」

向かって言うと、悠貴は頷いた。

「在るも在るぜ。 残骸と死体の一部……、念の為にドア閉めたほうがいいぜ」

ルバルトは、ドアから出て扉を閉めた。

そこは、幅がゆったり4メートルはある廊下。天井は、半円のアーチ型で……扉を閉めたら、真っ暗に成った。

「灯り……無いな」

と、ルバルト。

悠貴は、ダイバーウォッチの様な腕時計を捻って、ライトを灯してから。

「背中腰周りに、使い捨てライトある」

と、黒いコートを右手で捲くつた。

「わか……」

屈んで見たルバルトの目に、悠貴の黒いベルトに幾つも差し込まれたアイテムが見える。

「凄い・な。 お前って」

細いナイフ、太いナイフ、銃のマガジン二つに、黒いペンライトが3本。 最も右には、刃渡り30センチの短剣のようなナイフが鞘に入っていた。

「用意いいな……。 生きてたら見習う」

そう言ったルバルトは、黒いペンライトを一つ引き抜いた。

悠貴は、コートを下ろしてから。

「一応、バックには電池とバッテリーあるから、捨てないで」

ルバルトは、ライトを灯してから。

「解った。 安心して〜女を捨てた事一度もないから」

ルバルトは、悠貴の語尾に合わせた。 基本、ルバルトも砕けたほうだ。 一々細かい事にマジで居るタイプでもない。

悠貴は、廊下に出ての左を見て。

「左、先・・・10メートル向こうは行き止まり。 其処までに、廊下の・・・左右にドア3つ」

ルバルトは、間近の廊下の床を照らして見れば。

(人骨かな)

足元右に、埃塗れの床の上にボロボロの服と、人の肋骨らしき骨2・3本が転がっている。 もう、蜘蛛の巣が纏わり、埃も被って汚れていた。

こんな物が転がっていると云う事は、もう・・・自分達に安息など有りはしないのだろうと。 ルバルトは、心を引き締めた。

悠貴は、ルバルトを見て。

「右は、廊下の先に空間が広がってる。 空間まで、左右に廊下に面してドア4つ。 ルバルトさん、どっちから行く？」

ルバルトは、生じモンスターを見ているだけに、一人の手分けも危ない気がする。

「まず、行き当たる左の調査。 終わってから、右・・・」

悠貴は、ルバルトに怪我されても困るのは承知している。

だから・・・。

「俺、突入。 ルバルトさん、サポート。 で？」

ルバルトは、悠貴に戦う能力は勝てると思わない。 無駄なプライドや意地は持たない。

だから。

「お前に勝てるとは思わないし、手間取らせても悪い。それがベストだ」

悠貴は、頷いた。

14、地獄に連れて来られた者達の末路

バン！！！！ バン！！！！ バン！！！！

ズキューーン！！！！

悠貴、ルバルトの銃声が鳴った。 何回目だろうか。

「殺った」

ルバルトが、闇の中に口でペンライトを啜えつつ、廊下と部屋を隔てるドア近くでモゴモゴした口調で言う。

部屋の中の悠貴は、部屋右奥に屈んで腕時計のライトで部屋を見回す。

「オツケー」

メチャクチャの部屋の中には、鼠のモンスターや、最初に遭った空調ダクトを這いずり回っていたあのモンスター等に遭遇する事に成った。開いたドアの中では、無惨にも殺された人の遺体を漁るモンスターが徘徊していた訳だ。悠貴は、暗視も利くらしく中に直ぐ突入する。逆にルバルトは、悠貴に襲い掛かるモンスターに狙いを定めて、撃つ。

意外に息が合わなければ難しく、ルバルトには、冷静な精神と的確な腕が要求される。悠貴は、云うまでも無くゲリラ乱戦型だ。ルバルトの射程に入らず。寧ろ、モンスターを引き付けたり、攪乱したり……。

倒し終われば、真っ暗な部屋を搜索する。壊れたデスク、割れた電球、古びて塵と化した紙や物品。どうやら、左側の廊下に面した部屋は、それぞれ広い部屋では無く。様々な科別の診療・診察室らしい。まだ、“200?年”と読めたカルテが有ったりしたから、時代の差を感じざる得ない。

問題は、部屋に残された人の遺物……。モンスター共の食い残しの欠けた心臓が干からびて残っていたり、何かに齧られて残された足首だけが、この寒さで凍っていたり。埃と蜘蛛の巣と壊れた物の残骸が残る中、人の存在を示す形跡・遺物があちらこちらに

落ちていた。

「コイツはぁ・・・酷いな」

ルバルトは、床に落ちていた球体の形が崩れかかった物を見て、人の眼球に蛆が湧き。寒さで凍りついたものだとして愕然とした。

悠貴は、壊れた銃の中から銃弾を抜いたり、血と埃に汚れた衣服を調べては。

「正しく阿鼻叫喚の地獄だな。 此処を作った奴のお頭は・・・、
チヨイと別次元だと思う。 酷え〜もんだぜ」

と。しかし、ナイフ、銃弾、飴などの食料を探してはポケットに入れる。天性のサバイバーだ。

ルバルトは、悠貴のその行動を見ていて。

「お前、軍人経験でも有るのか？」

見終えた悠貴は、部屋を見回していながら、

「嫌、兵役には行ってない」

「そうか・・・。随分とサバイバルの経験ありそうだから・・・
スマン」

悠貴は、ルバルトを見ると苦笑いして。

「たまに言われる。“無神経”って。でも、仕事上、悪党に拉

致されかかったり、山の奥まで人捜ししたこともある。依頼者のお陰でムリクリ遭難者捜しに行つて、逆に雪崩で遭難して、何日も山中彷徨つたしな。ま、こうゆう時でも、必要な物を捜すのに何でも調べるのは慣れてる」

「そうか。俺等と同じか」

ルバルトは、もう腐り溶け始めるモンスターを見て言葉を繋ぎ。

「しっかし、コイツ等はなんて速さで腐るんだ。この寒さで……信じられん」

悠貴は、調べ終えたので部屋の外に向かいつつ。

「さ。証拠が残らない様に……だつたりして」

「あ？」

ルバルトは、意味が解らずに悠貴を見れば。

悠貴は、ドアの所で振り向いて。

「もし、街でこんなモンスター暴れさせたとしたら？ 殺されても、証拠を残さない方法の一つかも……。想像だけだね」

「おいおい、冗談止める。想像したくないぞ……。怖い事言うなよ」

強ち間違いとも言えない発言に、ルバルトは蒼褪めた。

二人は、一度カーエルの元に戻ろうと廊下に出て、扉に近づくと・
・部屋の中が騒がしかった。

「悠貴っ」

ルバルトは、ドアノブに手を伸ばす。

「やっねっ」

悠貴は、面倒事かとげんなりした。

ルバルトの開いた扉の中、なんと食堂で待たせていた皆が居るではないか。しかも、カーエルとジェルに、何やら問い詰める勢いでルーシーやらフィリップ・ジエスターなどが詰め寄っていた。

皆、扉が開かれて、驚いた様にルバルトと悠貴を見る。

「ふうっ」

ルバルトは、ため息。

悠貴は、理解に苦しんで。

「何してんだ？ 面倒事か？」

カーエルが、慌てた様子でジェルを庇いつつ。

「あっ・ああ・・・ 皆が、厨房のモンスターの死体を見たって・・・」

悠貴は、集まった皆を見て。

「で？ 足手纏いに来た訳か？」

ヒステリック気味のルーシーは、悠貴に苛立った顔で。

「何だじゃないわよっ！！ 臭い匂いするから見に行ったんじゃないっ！！！！」

ルバルトは、悠貴を心配して見るが……。

悠貴は、詰まらない様子を顔に出して。

「廊下のモンスターも、来る時に見ただろう？ あんなの相手にしてるっただけだ。大体、厨房の死んだモンスターは、エルザの姉さんに検死を頼んでおいたのに。何で、挙って見に行ってるんだ？」

すると、ラヴィの前に居たジェスターが前に出てきて。

「我々も当事者だ。何が起こっているか知る権利がある」

ルバルトは、悠貴の肩を掴んでから。

「それは、確かに。だが、安全な場所から此処に勝手に来て貰っても困るんだがな。こっちは、モンスターの巣窟だ。俺と悠貴が調査している間に襲われたら、カーエルやエルザだけでは守りきれない」

すると、ジェスターも少し憤り出した顔で。

「空調ダクトの中を移動して来るんだっ。安全な場所なんかいるかっ！！！！」

悠貴は、横を向いて。

「少なくとも、此处よりは安全だね。ま、呼ぶ手間省けていいや」

と、廊下に戻る。

ルバルトは、悠貴の脇をチラッと見て。

「とにかく、利用されているだけのジェルや、サポートで来ているカーエルに詰め寄っても進展は無い。もう少し搜索して、戻る。

それまで、黙っててくれ。気が散る」

と、ドアを閉めた。

暗くなった中、ルバルトは悠貴に。

「やはり、さつき連れてくるべきだったかな」

「さあ、通路で足手纏い抱えて通るのも危ない。俺等と一緒にだから安全なんて映画みたいな事さ。戦う事で手一杯の時に襲われても、離れていて襲われても似たような物じゃない？俺等二人も、現に危ないし」

ルバルトは、ライトの光の中で、先の右の廊下を眺める悠貴を見た。

（現実一路だな。だが確かに、犠牲が出て非難される時は、近く

でも離れても同じこと。 皆は、納得行かないだろうがな・・・)

悠貴は、戦う事で被害や危険を最小限に抑えると思っっている。 モンスターは排除を優先しているだけだ。 皆と一緒に居て、モンスターに襲われた場合。 悠貴もルバルトも、守れる領域には限界がある。 人に注意しながら、モンスター達と戦って行けるかどうか・・・ 少なくとも、ルバルトにはまだその余裕は無い。

さて、二人して次の部屋に入った。 廊下を右に向かい、少し歩いて左側に有るドア。 もう壊れて立ってかかっているだけ。

「あ」

悠貴が触れたら、ドアが部屋の中に倒れた。

「壊れてるな」

と、ルバルトは、ライトを照らす。 埃が舞う部屋の中を見るのだが・・・

悠貴は。

「態々立てかけた・・・蓋か？」

パツと、悠貴とルバルトは顔が合った。

入り口から部屋の中を見回せば、職員の詰め所かミーティングルームの様だ。 意外に部屋が広く、引つ繰り返っているデスクの残骸が数多い。 長方形の部屋の中は、ゴミと化した残骸で足の踏み場を選ばなければならぬ様子だった。

「凄い乱れ様だ・・・」

と、ルバルトが部屋の中に足を踏み入れようとした時。

「チヨイ待ち」

悠貴が、肩を掴んでルバルトを止めた。

「ん？ どうした？」

ルバルトは、緊張して悠貴を見る。

悠貴は、腕のライトで部屋の四隅の柱の部分、天井の一角、横の壁の辺りを見て。

「ホレ、あれ、なぐんだ？」

と、真正面の行き当たる左隅の角。 四隅の90°に成る場所で、高さにルバルトの目線と平行になる場所に、奇妙な埃の塊がある。

「なんだ・・・アレは？」

埃色の膜の様なウールの様な物が、長さ1メートル幅も似たような間隔でドーム型に盛り上がる。

悠貴は、じっくり見ながら。

「今でも、古い便所やアパートの家の隅っこに、見かけるのよ・・・アレのちっさいヤツを」

ルバルトは、意味が解らない。

「何だ？ それ」

悠貴は、ルバルトを見返して。

「意外に生まれいい方？ あんな巣を作る蜘蛛・・・見たこと無い？」

「ハア？ 蜘蛛？」

悠貴は、その誇りの塊の真下にライトを向ける。

「ホラ、お食事の時に出る食べカスが落ちてるで・・・」

ルバルトは、ライトの行き先である床を見れば、ネイルアートが施された人の爪を付けた指の一部や、髪の毛などが、床に転がって積もっている。

「悠貴・・・まさか此処は・・・」

「巢だな。人食いスパイダーさんの・・・って、あら・・・。気付かれたかな？」

悠貴は、天井からカサカサと音がするのに気付いてライトを上を。

ルバルトも見れば、天井の中央辺りにあるドーム状の巣から、チラ・チラチラつと顔を覗かせる生き物が。

「デっ・デカイぞ」

現れるのは、頭からプツクリと太る腹までの大きさが70センチは超えるずんぐりとした蜘蛛だった。腹に当たる尻の部分がプツクリと膨れて丸く、黄色と青み掛かった模様のストライプが入る。顔や胴は、かなり黒い。見回せば、あちこちの巣から這い出て来る。

「団体サンのご一行かよっ!!」

悠貴は、直ぐにコートの内側に手を。

「悠貴っ、退こっつ!!!!」

「待てっ、コイツをっ」

悠貴は、コートの内ポケットから緑色に鈍く光る発炎筒ぐらいの棒を取り出した。

「お前っ、何だそれはっ?!!!」

悠貴は、ドアの有った入り口の枠に、透明なキャップを外してその棒を押し付けて塗りだした。

「蛍光塗料ジェル。ライトで照らさなくても居場所が解るっ」

グルリと塗りつけて、悠貴はキャップを戻しながら。

「離れよっつ」

と、更に廊下奥の広間の方に向かった。

「出てきたっ！！！！」

ドアの枠から出てきた蜘蛛のモンスターは、足が短く。壁を動きは早い。歩く場所の面が凹凸していると腹や胴を擦るらしい。足と腹などに、悠貴の塗った塗料を付着させて廊下に出てきた。

悠貴と、ルバルトの怒涛の銃声が響きだす。

「うわあっ」

と、カーエル達皆が一斉に伏せた。いきなりの銃声だったから、不意打ちの様で驚いたことだろう。

「何っ?!?!」

エルザが言えば。

カーエルが。

「モンスターだっ！！！！ さっきから、この調子だよっ」

と、ジェイルを庇う。

「来なければ良かったわっ！！！！」

ルーシーが喚いて床に伏せて頭を抱えた。

合わせて10・・・数発は鳴った銃声も、数分も経たずして鳴り止

んだ。

「と・・止まった？」

床に伏せた一同の中で、ソウエルが顔を上げて呟いた。

皆も顔を上げた時。

ズドンっ！！！！！

「キヤっ！！！！」

凄く間近で、廊下と面したドアの横で音がした。

そして、誰もが息を止めた中で。 悠貴の音がする。

「モンスターが廊下に居るかもしれない。 ドアを開けて廊下に出るなよ」

その言い方、丸で普通の会話の様だ。

ルバルトは、暗い廊下の中で悠貴が来るのを待っていた。

「10匹は居たか？」

悠貴、暗い廊下に転がる蜘蛛のモンスターを見て。

「ざっとそれ位？」

ルバルトは、蛍光塗料を着けたモンスターをペンライトで追うのが

精一杯だったが。悠貴はライトに照らされる前に銃で撃つ。モンスターは身体の形が、見ただけで頭に入っているのだろう。蛍光塗料の着いている場所の確認だけで、モンスターの頭を撃ち抜いていた。

ルバルトが倒したのは四体。悠貴は、倍の八体。

蜘蛛の巣窟と化した部屋の入り口に戻った二人。悠貴は、ルバルトに入り口で待機させ、一人で中に踏み込んだ。

「ゴミが多いな。まだ、奴等居そう・・・」

悠貴が、呟く。

ルバルトは、悠貴を視野に入れながら、部屋を改めて見回す。窓に鉄の蓋がされて光が射さない。この建物は、一体何回こんなサバイバルゲームの舞台に利用されたのか。壁が欠けていたり。銃弾の痕跡や、血の跡。恐らく、このごった返した様相は、前に来た人々が戦って暴れるモンスター達によって形作られた成れの果てだと推察出来た。

（酷い・・・。こんな事が起こっていいのか?! はア）

ルバルトが、この様子ですら地獄の入り口に過ぎない事だと理解するのは。もっと・・・もっと後の事になる。

「欲望の産物 FILE 6」(後書き)

どうも、騎龍です^^^

更新遅くてすみません；>；

しかも、別の所に載せてシマタ；>；

ご愛読、ありがとうございます；人；

「欲望の産物 FILE7」

「 Intelligence cri
sis ファースト」

15、悪夢ノナイトメア」

悠貴とルバルトは、蜘蛛のモンスターが巢食っていた部屋の中に入った。横、25メートル以上の職員室だろうか……。朽ちて壊れたパイプ椅子や簡易デスクがボロボロになって散らばっている。

悠貴の銃が、突然に吹く。

入り口付近で警戒していたルバルトは、パツと銃を構えて向けば、悠貴の前に蜘蛛の姿のモンスターが引っ繰り返ってジタバタしている。

「まだ、居るみたいだな」

悠貴は、倒れているロッカーの残骸の上に歩み出して。

「ルバルトさん、しっかりその辺に居てくれ。まだ、危険かも知れないから」

悠貴は、完全にルバルトをサポートに置いた喋りである。

暗中、悠貴は、ひっくり返った机や椅子の朽ちた残骸を越えて床の死体や物を探す。

すると……。

「ン？」

悠貴の見ていた部屋の奥に、窓に近い所で床下に散らばった血の付いた衣服が見える。足の踏み場を選びながら、悠貴はその変わった衣服に近寄った。ゴミと折れたパイプに絡む衣服に悠貴は屈んで確かめる。

（コイツは……）

黒い繫ぎの様な衣服。しかし、生地は丈夫な繊維の網目が細かい物で、織り目がピシツとした厚手の素材である。この衣服、最近軍用にも採用されている軍服の生地だ。通気性と揮発性に優れていながら、冬でも暖かいと云う優れものらしい。だが、迷彩服での販売はまだされておらず。この場所に在るのは、どう見ても不自然だ。

ルバルトは、悠貴が一箇所に留まっているのに心配を覚えた。

「悠貴……何かあったか？」

「ああ。軍用の最新の迷彩服がある……。誰か、軍人でも客で着ていたみたいだ」

ルバルトは、悠貴に話直ぐに違和感を覚えた。

「おいおい、こんな場所に特殊軍服を持ってくるか？ しかも、ア
シはまだ機密レベルが高い物だろう？」

悠貴は、服を丹念に調べて或る物を見つけながら。

「そつかもね。 どうやら、違う方面の方らしいや……」

「“違う”？ 悠貴、何がある？」

悠貴は立ち上がり、手にした物を見ながら。

「待って、そつちに……」

と、脇をチラッと見た。

「おいおい……」

また、悠貴の動きが止まる。

ルバルトは、警戒しながら不安に成り。

「どうした？ まだ何かあるのか？」

何かを見つけた悠貴は、倒れているロッカーの残骸やデスクの残骸
を足で退けた。

「どくやら、軍人さんは一人じゃ無い。 スタボロにされた服が・
・2・・5・6着有るぜ。 しかも、落し物も。 今、そつちに
全部持っていく」

部屋の奥で悠貴はガサゴソと音を立てて何かを引っ張り出し、繋ぎの服やら色々とバックまで持ってくる。

二人、部屋の中ゴミの山積の少ない場所に。床が出ている所に、悠貴は汚れたバックを置いた。

まず、悠貴はルバルトに。

「見てくれ、このバック。まゝるで武器庫だぜ」

と、バックを開ける。黒い皮製の旅行バックだ。大きめで、数日の旅行にも対応出来る容量が有る。開いた中には、壊れているが自動小銃の一部のパーツや、大量の口径の違う弾薬、起爆装置と爆弾が出てくる。

ルバルトは、この巨大な建物の一つ二つは破壊出来る量の固形爆薬を見て・・・。

「おいおい・・・戦争でもする気かよ。この爆薬で10キロだなんてっ？ ネオ・アークで何十箇所とテロ行為が出来る・・・。恐ろしい、一体何者達だ？」

悠貴は、そう言って驚いているルバルトを脇目に見る。

「そのコメント、当りかもよ」

ルバルトは、ピタリと止まってから頭の中で悠貴の発言を反芻した後で顔を上げた。

「・・・な・・・何だつて？」

悠貴は、コートのポケットに入れたライセンスチップとカードが束で収められた透明なケースを取り出す。

「警官、水道局、マスコミ、医者、看護師、弁護士、清掃員、クレ
ーム技師、溶接技師・・・」

悠貴が何十とあるライセンスチップを取り出しながら職業名を読み上げる。薄く小さいクリップ程の金属板に、ライセンス名が入っている。電子コードの埋め込まれた物で、身に着けているだけで特殊な読み取り機に反応してライセンスを提示する。

「たあくさんあるで〜。顔も名前も違うチップがごくんなに束で・・・。しかも、どれも偽造臭いチップばかり。ホラ、FBIのライセンスチップとカードまで有るぜ」

「なんだとっ?!！」

悠貴の手から渡されたライセンスチップとカードを見るルバルト。

「こっ・これはっ!! 間違い無く偽造チップとカードだっ」

今、公的機関の職員は、注射で本人確認の出来る特殊なナノ合金チップを身体に埋めている。しかし、対人においては証明票カードは未だに有効なのだ。そして、身体に埋め込むチップを読み取るのは特殊な読み取り機で何処にでも在る物では無いから。何処に居ても、本人確認が出来る、職業名が“公務員”と出る小さいチップも存在するのだ。

しかも、ルバルトは、他の偽造カードも見るうちに知った顔の何人かが……。

「コイツ等は……ウソだろうか？」

悠貴は、ルバルトの銃に合う弾をバックから選んで取り出しながら。

「やっぱ、お知り合いが居ましたかい？」

ルバルトは驚きを隠さないうちに頷き。

「ああ……。8月の終わりの事だ。この国に何十人と指名手配の傭兵達が入り込んだ……。軍と国家安全局のバックアップの元、一度に全員を捕獲する予定だった」

悠貴は、呆れ顔で。

「とんでもない所に逃げ込んだ訳だ。身体の一部も残ってる……逮捕の手間は省けたね。生きちゃ居ねえし。逮捕も捕獲も出れないが」

ルバルトは、この目の前に置かれたバックの中の火薬を見て。テロ組織の一部と傭兵達は明らかに此処に来たと悟った。指名手配の皆が早朝に霧の多い中で、乗り込んだワゴン車で山間に向かう高速道路の途中で煙の様に消えてしまったと報告を受けた。

(まさか……こんな所に)

ルバルトは、既に死んでいる何人かが居ると知って悠貴に。

「悠貴……、お前はこれをどう思う？」

悠貴は、暗い中で弾の仕分け作業をしながら。

「さ。ま、普通なら騙されて呼び出されたんじゃないの？
あの、声だけの偉そーな人たちに」

ルバルトは、益々不安を心に増して。

「何でだ？ 何で、あんな危ない連中を……」

悠貴は、ルバルトに弾の入った紙の箱を差し出し。

「向こうには目的が在ったんじゃない？。モンスターの対戦相手を探したのかも知れないし。もしかしたら、この地獄の監獄で生き残る可能性をデータとして欲しがったのかもよ。お客の中には、ルバルトさんみたいな警察やFBIも居るかも知れない……。下手したら、武器を隠し持った現役の兵隊さんも居るかも知れない。どんな人が来ても、脱出されないデータを得るには打って付けの方々じゃないっすか？」

その話にルバルトは、本気の押し殺した声で悠貴に迫る。

「お前……この傭兵達が切り抜けられない場だとしたらっ、俺達は……」

悠貴は、真剣な目のルバルトを見て。そして、……薄く笑った。

ルバルトは、急に笑われた事に少しムツとした。だが、協力者の手前だから、冷静を装う態度を見せながら。

「悠貴……、何が可笑しい？」

悠貴は、下を見て首を振ると顔を上げた。

「ルバルトさん。アンタ、勘違いしてるぜ」

「何がだっ？」

「此処の施設を運営してる方々は、俺達を逃がす気なんかあゝ微塵も無い。増して、こうしてこんな殺人的なテーマパークに閉じ込めて遊んでやがる。恐らく、絶対に逃がさず……そして殺す自信が有るんだろう」

ルバルトは、他の客達に聞かれないように声を押し殺して。

「その通りだっ」

悠貴は、せせら笑った顔で脇を見る。

「じゃ、諦める？」

「そうは言ってないっ だがっ、脱出が出来ないなら意味が無いっ」

ルバルトは、悲壮感が漂う顔で悠貴に気持ちをぶつける。

すると、悠貴は真顔でルバルトを見た。

「ルバルトさん、其処が勘違いだ」

「何？」

「いいか、相手はこんな場所に閉じ込めて。モンスターの様に改造した生き物を放して高みの見物を決め込んでやがる。逃がす気も、脱出させる気も無い。だが、俺達は動ける。殺ろうとすれば、俺達を瞬殺出来るのに、それをしない。チャンスだろ？」

「・・・」

ルバルトは、返す言葉も無く黙る。

悠貴は、弾薬をルバルトの手に渡し。

「動ける間が在り、御誂え向きに弾薬や前の人が使った武器はそのままだ。暴れるスペースが有れば十分。例え、可能性が今はゼロかもしれない。だが、死ぬまでゼロで有り続ける可能性がゼロとは決まっではない・・・だろ？」

悠貴は、ルバルトを見て笑う。不敵な笑みで、強い瞳はまたギリと輝く。

「抑えきれないぐらいに暴れりゃいいのさ。爆弾を見つかりゃ穴も開けられる。針の穴を開けて、抉じ開ければいいだけの事よ。最初っから、可能性の無いに等しい戦場だつて解ってるだろう？ だけど、黙って殺られる気は、俺には無いね」

ルバルトは、悠貴を見て。後悔に顔を滲ませる。

「お前の・・・言う通りだな」

すると、悠貴は鋭い目線でルバルトを見ると。

「ジェイルの話がマジなら、今回でこの場所は最後だ。一々一時的に攫った人達を全員生かすほど連中も甘くない。恐らく考えたくないが、大量の犠牲が出るかも。犠牲出ないで、全員生き残る事を祈りたいね」

ルバルトは、もう大量の出血の後を残している数名を思い。

「だな・・・」

と、銃弾の箱をコートのポケットに仕舞った。

ルバルトは、悪夢を見ているようだ。恐ろしい行動をするテロリストと金さえ貰えるなら親でも殺す傭兵達が、こんな場所で死んでいるとは・・・。

（最悪のデータだ。・・・知りたくは無かったな・・・）

その時、パツと急激に部屋が明るくなった。天井に設置されていた旧式の蛍光灯が灯ったのである。

「おりよゝ、いゝきなり点いたね」

悠貴は、腕時計のライト機能を落とす。

ルバルトは、今だけに警戒を強めた。

「今更、何の真似だ？」

と、言う目の前。 明るくなった視界の中の乱れきった部屋の中にそれ以上言葉が出なかつたのは……。 壁に飛び散つた血の跡、折れ曲がつて壊れたパイプ椅子のパイプに刺さつた人の眼球、もげた腕の一部が蜘蛛のモンスターの巣を握っている。 暗い中で余り見えない視界がいざ見えると、この場が如何におぞましい出来事の在つた場所か……。 容易に想像出来て怖い。

悠貴は、廊下の出入り口に顔を向けて。

「どうやら、新手が近づいてるわ。 広いロビーの方だ……。 なくんか引き摺るような音がする」

と、廊下に出ようと歩き出す。

ルバルトは、頼る様にグツと銃を握つた。

二人、廊下に急いで出る。

すると……。

“ズルズル……ズズつ……”

何か、大きな物が床を這いずる音がしている。

悠貴は、ルバルトを見て。

「先の受付ロビーだ」

「ああ……」

二人、ロビーに走る。

明るくなった廊下は意外に幅広く。そして、血の汚れの目立つ廃墟のような場所であった。

ロビーに走り込んだ二人は、地上3階部まで吹き抜ける広いロビーに来た時、目の前に揺らめき聳える影を見てギョツとした。

12、巨影の・・・塔。

「うわっ、なっなんだあッ?!?!」

広いロビーでモンスターを悠貴が見上げる。その高さは、病棟3階部分に近い。15メートルは在るかも知れなかった。しかも着床している胴体は、まだまだロビーの奥へと伸びている。全長がどの位か・・・解る相手では無かった。

ルバルトも、あまりの光景に唾然として声も無かった。

シュルルル・・・シュルルルル・・・シャー・シャツ・シャツ
!!--

乾いた威嚇の音を出すのは、蛇だ。だが、只の蛇では無い。そのコブラの様な扇状の頭部は、幅だけで5メートルは超えるだろう。支える胴体は、黒々と光沢を見せる青い鱗に覆われていて、最も太い部分は巨木の幹の様に太い。そして、何よりも驚かせるのは、頭だった。

後退りするルバルトは、隣の悠貴の肩を掴んで。

「あああ・・ありゃ・なっ・・なんだっ!!! わっ畏だっ!!!
宿舎に戻ろっ!!!」

しかし、悠貴は、巨大な蛇を険しく見つめているが、動じていない様子で。

「おいおい、ココは日本か？ 古ッ臭い神話のバケモノの再現かいよっ!!!」

ルバルトは、その言葉使いから悠貴があのかげモノ蛇を知っていると感じて。

「お前っ、あんなバケモノを知ってるのかよっ?!?!?!」

「あゝいや、日本の神話に出てくるんだ・・。 ああゆっ、8つの頭を持った大蛇・・八岐大蛇ってのがさ」

「あっ？ ヤマ・・タ・・オロ？ 何を云ってるっ?!?!?!」

ルバルトは、全く理解出来なかった。

悠貴は、拾ったあの武器庫の様なバックのジッパーを開きながら。

「日本語で、“ヤマタ”ってのは“8つ”、8つに分岐してるってみたいな意味だ。“オロチ”ってのは、普通じゃない巨大な蛇の事さ・・。 そら、あゝ確か聖書でもサマエルとか云う墮天使やサタンが大蛇だろ？ 他にも、ギリシャ神話や、インドの神話でも

デカイ蛇は出てくるだろう?」

冷静に説明する悠貴を見るルバルトは、大蛇が此方に気付いたのを見て。

「そつ・そそつ其れ処じゃないぞつ!!!!!! につ、逃げろつ!!!!!!」

巨大な大蛇は、数メートル伸びて個々に動くニシキヘビのような頭を8つ。ニユルニユルルと自由に動かして、獲物でも探している素振りです、奥から此方に出てきていた。

どうやら蛇は、ルバルトや悠貴の立つ位置から、斜め左に広いロビ―を突つ切つた先の一回奥の廊下から這い出て来たらしい。まだ、胴体が全部出切つて居なかった。

逃げる事しか頭に無くなったルバルトだが、悠貴は何かを取り出して。

「チヨイ待ちつ!!!!!! 大丈夫だつ、落ち着けつ」

慌てるルバルトは、何時もの平静は無かった。

しかし、悠貴は動かさず。

「いいか、聞けつ!!!」

ルバルトは、落ち着いている悠貴に怒鳴られてハツとすると。

「コイツを見る」

悠貴は、右手にピンポン球を半分に切った様な半円の黒い物体を持つていた。

「なっ・・・なんだ・・・この黒いの？」

「エっ?!?! FBIなのにコレ知らねえの？ アンタ・・・その内死ぬぞ・・・。いや、マジで」

見上げる巨大な大蛇が、奥の壁際から、ズズズズ・・・と向かってくる。

ルバルトは、悠貴の様子にキョトンとして。

「ほう・・・では、先生、御一つ・・・ご教授を」

悠貴は、向かってくる蛇を見上げて。

「コイツは、今流行りだした小型ボムだ。何処でも吸い付いて、どんな場所でも設置可能な小型爆弾。遣い方は、盛り上がった半球体の上部をグッと押すと・・・」

カチッ

音がする。ルバルトにも、ハッキリ聴こえた。

「音がしたな」

「ああ、この音から、15秒でボンだ」

瞬時にもげ飛んで居た。しかも、扇形の首の集まる付け根が、半分ほど唐竹を割った様に縦に裂けて、ドス黒い血を溢れさせている。ロビーに響く、凄いい叫び声の様な蛇の鳴き声。

悠貴は、憎たらしげに蛇を見上げて。

「くっだらねく物作りやがって……」

と、もう一つ爆弾を投げた。

暴れる大蛇の振動が、二人にも床を通じて足から感じる中。悠貴の投げた小型ボムが大蛇の裂けた扇状の首元に付着。また、“ドガン”と爆発音がして、“バリッ”と大蛇の扇状の首元は裂けて、頭3つを付けたままの半分が千切れ飛んだ。

「かつ・怪獣でも……ゲームでも……無いのか……」

ルバルトは、千切れ飛んだ首元が、3つの頭を残して床に落ち。胴体にくっ付いた方の頭部も激しく暴れながらその場にトグロを巻く様にして崩れるのが目の前で起こっている。映画で見るとより、迫力があり。命を掛けるゲームと云うには、リアル過ぎて凄まじい光景だ。

黙って見ているうちに、大蛇は動かなく成り。爆弾で裂けた傷口から、急速に腐り始めるのだ。血の付着した肉の部分が、ドロドロと爛れ出す。

悠貴は、放心しているルバルトに向いて。

「エルザの姐御を呼んでくるよ」

「あ・・・ああ・・・」

ルバルトは、圧倒的なインパクトに立ち竦むしかなかった。

時間的に、昼頃だ。

「うっ・うっう嘘・・・でしょ？」

広いロビーは、床がタイルで底冷えがする。悠貴に呼ばれたエルザも、吐く息が真っ白である。だが、その寒さも、目の前に横たわる大蛇の姿に忘れてしまう。現実として目の当たりにする衝撃は、恐怖と感動の融合する畏怖にも似たレベルをも遥かに超える。

エルザは、数分動けなかった。

悠貴は、一人でポケコンを手に映像を映す。そして、腐り始めている傷口を視て、

「やっぱり、“血”だねえ。凄え〜強い酸性と、原因が解らないけど何かが作用して腐って腐敗して行くんだ。酸素との結合か、それとも急速な分解作用なのか・・・。身体全身の肉が、ドロドロして来てる」

エルザは、調理場の隅のロッカーで見つけた厚手のゴム手袋をして、

「多分、血管は毒性に持ち堪えられるのよ。ただ、肉体の構造は詳しく調べないと解らないけど。この地球上の生物と変わらないか、近い物質構成だと思うわ。だから、血管を破られると直ぐ死ぬのよ。血が、肉体を腐食させる為だね」

と、千切れた首元と頭の方を視ている。

ルバルトは、冷静に分析をする悠貴が驚きだった。

「悠貴、おまえ・・・生物は好きなのか？」

大蛇と備に視る悠貴。 使い棄て用で持ってきた食事用ナイフで、素早く大蛇の身体の一部を切り裂きながら。

「ああ。 自然なんかは、年に何度か旅行でアフリカ行ったり、オーストラリア行ったりして見るよ。 好きも好きだけど、コイツ等は生み出された怪物クリーチャーと云うか、化物だ。モンスター 弱点が解るのは、対処に繋がるからな。 出来る分析はしないと。 でも、ペットや野生生物を悪戯にハンティングするのは好きじゃ無いね。 今まで、狩りは一度もしたことない。 折角生き抜いてる動物の命を、食べる以上の贅沢や遊びで殺すのは好きじゃない」

エルザもルバルトも、悠貴の語りに顔を上げていた。 今の姿を見る限り、信じるにも難しいが。 確かに、無闇に暴走する気違いにも見えない。

大蛇の胃袋らしき物を切り裂いた悠貴は、金属片や、変形した銃などを見つけて。

「骨も消化出来るが、金属は無理みたいだの。 でも、体内の形成は、確かに・・・地球の動物レベルだ・・・。 蛇の体内と酷似してるっ、うえ〜クセえ〜」

エルザは、悠貴に寄って。

「つまり、別の世界の生き物じゃ……無さそうね」

臭いの強さに鼻を摘んだ悠貴は、エルザに向いて。

「ああ……多分バイオテクノロジーの産物だね。あゝクツセ
……」

大蛇から10メートル以上離れたルバルトですら、鼻が曲がりそうな腐臭がする。近づく悠貴の目は、充血していた。

ルバルトは、悠貴の脇を抜けて。奥の廊下が見える位置に向かう。

広いロビーの壁縁には、食われた人の残骸や朽ちてボロボロのインテリアの残骸が混じりゴミと化す。あの診察室から、このロビーに抜けた壁際には、受付でも在ったのだらう。崩れた台の残骸が多く残っていた。

そして、大蛇の現れたロビーの上部に抜ければ、左に廊下が伸びて階段が見えている。右には、廊下がずくと奥にまで伸びていた。

（丸でゲームのサバイバルだな。それを現実で体験するとは……再現させる方もどうかしてるよ……）

腹の中で、放送をしていたあのキーの高い声の主に怒りが込み上げて来るルバルトだった。

「欲望の産物 FILE7」(後書き)

どうも、騎龍です^^

今月から、ゆっくりと再開してゆきます^^

ご愛読、ありがとうございます^^人^^

「欲望の産物 FILE 8」

「 Intelligence
r i s i s ファースト」

15、リアル過ぎたゲーム

悠貴とルバルトは、大蛇が現れた廊下の見渡せる“食堂”前に二人で立っていた。

「悠貴、こんなデカイ病院なんか見たことあるか？ ネオ・アークの大病院でもこんな施設は無いぞ」

ルバルトに問われた悠貴は、大蛇の尾っぽが腐る廊下を見て。

「廊下の幅だけで4トントラックが余裕で擦れ違えるね。 確かに、デカイわ」

だが、悠貴の目は直ぐに近くのロビーの壁に設置された古いプラスチック製の建物内の案内図である。

「それよかルバルトさんよ。 この地図見てみよ。 一階の部屋数をざっと数えて80前後。 建物全体でなら、300以上だぞ」

と、言いながら。 悠貴は、昨日の時にバス内で掛けていた大き目

のスコープ型のサングラスを取り出して掛ける。

ルバルトには、“目が良い”と言っていた悠貴が態々とサングラスを掛けるのが気に成り。　悠貴の隣に来て。

「悠貴、お前は目が良いんだろ？　サングラスなんて、こんな時に必要か？」

「あ？　ああ、コイツはスキャナースコープ。　ポケPCに連動して、コイツで見た映像を記憶出来るんだ」

ルバルトは、悠貴の脇から悠貴の背に合わせて身を屈め、そのスコープを見ると。

「ほう。　ソイツは便利だな。　だが、見る時は？」

「コイツで見れる。　データをグラスに映し出せるから」

「ふ〜ん。　お前、凄いの持ってるな・・・」

悠貴は、何とも無いと云う素振りで。

「ま〜ね。　確かに、コイツを作った人は偉大な人だよ。　世界的にも有名人だからな」

「そんなに有名な人なのか？」

悠貴は、辺りを見回し。

「ま、此処じゃ誰が聞いてるか解らないから言わないが。名前を出せば、誰もが知ってる人だよ。それより、これからどっちに行く？ 廊下を右に行けば各診療科別の部屋巡り。廊下を左に出れば、二階に行ける階段が在るとさ」

ルバルトも、背中に寒気を覚えながらも案内図を見て。

「なら、次の施設に向かうルートを確認しようか」

「うい」

悠貴が、同意を返した時だ。

「ジジ……」

また、天井から放送の始める音が。

「あら、まゝた放送か？」

と、悠貴が見上げれば。ルバルトは、警戒を見せる様に身構えた。

「諸君。今、確認したが。あの大蛇を倒したのか？ フツフツ
フツ……、これは面白い。よし、ルールを敷こう。実は、君
達を持って成すサバイバルゲームの用意は、略整っていたのだよ。
ただ、面倒だから好きにさせようと思っていたが……。どうや
ら、少しは楽しめるらしいー」

悠貴は、脇目にルバルトを見て。

「喜んで貰えたみたいよ、センサー」

ルバルトは、怒りを浮かべる顔で。

「フンっ、下らないっ」

さて、リスキーと名乗った男の放送は続き。

ーでは、今から二階へ行く通路及び、ゲームのメイクで施設内のシャッターを閉める。シャッターを開く鍵及び、各部屋のキーポイントの鍵はこの3棟の施設内に散らばせて在るから、それを探して切り抜けて来たまえ。第一病棟の3階に辿り着けるなら・・・。
私が直々に出向いて殺してやろう。フッフ・・・フハハハハハ・・・。
そこまで来れるかな？ー

悠貴は、ルバルトに。

「ど〜こまでも勝手なオッサンやね〜」

ルバルトは、遠くで“ガシャン”と云う何かの音に振り向いて。

「クソっ、閉じ込める気か?!」

悠貴は、内心に。

(ム〜シ〜)

ーおっと、私としたことが。君達の下に、もう用済みのスタッフが一人紛れている筈だな。その人間からゲームの細かいルールは聞くといい。難しいルールでは無いが、破ったペナルティへの代償は大きいぞ。では、これにて失礼するー

また、一方的に放送は終わった。

厳しく歯を噛み締めて上を睨むルバルト。

悠貴は、面倒臭いと云った雰囲気、後頭部を掻いた。

「ルバルトさんよ、ジェイルの所に戻ろう。また、放送でパニツクされてもしかたないでしょ？」

「・・・だな。クソっ、コレで完全に罠の中の鼠だ・・・俺達は」

「ああ。でも、道も見えた」

「なんだと？」

ルバルトは、悠貴を見返す。

悠貴は、皆の待つ診察室に向かい出しながら。

「第一病棟の3階に行けば、この一連の首謀者に会える。ソイツを捕まえるか倒せば、先が見える可能性がある。奴等なら、俺達の乗って来たバスも含んだ脱出の移動手段を持ってるべさ？ 寧ろ、其処までの道が用意されたと言う確証でもある。だから、“道は出来た”って事さ」

ルバルトは、確かにそうだと思ひ。

「そつとも言えるな」

大蛇から離れて歩く悠貴は。

「悲観しようが、楽観しようが、事態は変わらねえよ。現実が在るだけ。逃がさない様に山の中の孤立したゴーストタウンに閉じ込められたんだ。今更この病棟のシャッターの扉が閉ろうがどうだろうが大して変わらないよ」

ルバルトは、悠貴の割り切りの速さと冷静さが異常に思えた。だが、それを間違いとかが、異質とは思わない。寧ろ、自分以上に場数が多いと思う。

（大した精神力だな。暇を見つけて、少し話し合ってみるか・・・）

ルバルトも、悠貴の後を追った。

さて。戻った診察室は、悠貴の予想通りに成っていた。放送にビビった何人かが、ジェルをカーエルから引き離して問い詰めようとして。止めに入ったカーエルとエルザやニモンドと口論に成っていたのである。

ドアを開けた悠貴は、ルバルトと二人で呆れて入り口から見るだけ。戻った二人に気づいたルーシーが、恐怖からヒステリックに歪んだ顔を見せて。

「何ポーっと突っ立ってんのよっ！！！」

と、悠貴に。

「あーいや。ルバルトさん、捜査に戻ろう。此処は危険だ」

悠貴は、突然にルバルトにそう言ってロビーに戻ろうとする。

ルーシーは、直ぐに噛み付いて来て。

「何言ってるのよ?!?! 危険っ? 他に逃げ場はっ?!」

其処に、ギラギラした瞳の獣のようなフィリップが加わり。

「おいつ、武器はっ?!?!」

切羽詰まった顔をしているジェスターも。

「そうだ、先に向かう道は見つかったのか?」

コールとアルチェンは、ワナワナとして。

「早く脱出の道を見つけてよ?!?!?!」

「そっ・そそそそっだああっ?!?!?!」

ルバルトは、恐怖に因ってストレスがピークに達し始めていると読む。

(これは不味い……。このままでは、先を搜索する処の話じゃ無い……)

しかし、悠貴は。

「今の所見つかった武器は、どれも壊れて使い物に為らねえよ。先に進むも何も、ルールが在るって言うから聴きに来たんじゃないか。それから最後に。テメゝ等みてえにな、自分達でデカい声を上げてモンスターに現在地知らせてるド阿呆を守るにも限界あるんだよ。そんなデンジャゝな方々と一緒に居れるかあゝつつゝ話さ。んじゃ。かゝつ、戻って精神的にダメージ負ったわさ」

と、廊下に戻ってロビーに向かう。

ルバルトは、これには焦り。

「おっおいつ、悠貴っ!!」

見ていたニモンドも驚いて。

「まっ・・・」

だが、その声を遮ってジェイルが。

「待ってっ!!! ルールだけでも聞いてっ!!!!!! ルールを破つたらっ、大量のモンスターが放たれるわっ!!!! 貴方のお父さんや、ルバルトの友達を殺したモンスターが私達を襲うのっ!!!!!!」

その声は、廊下にまで響いた。

悠貴は、数歩行った先のゴミの蟠り前で止まる。目先のロビーには、天井のライトで明るく為って横たわる大蛇の腐る屍骸の一部が見えていた。

「ふう〜・・・」

悠貴のため息が聞えたルバルトは、その背中に。

「悠貴、ペナルティーは食いたくない。一気に襲われ出したら、道を見失う」

振り向く悠貴も。

「んだの」

と、疲れた様子を見せてルバルトを見返した。

寒い診察室に戻った二人は、皆を黙らせてジェイルの話聞いた。

「寄宿舎の応接室に、まだ私のカバンがあるわ。その中に、サバイバルゲームの進行に関する規約書が在るの。お願い、一緒に来て」

ジェイルが悠貴と一緒に一度応接室のある寄宿舎に戻って、その皮の黄色いバックを持って来たいと言う。

悠貴は、震えて顔色の悪いナンシーや、薄着のソウエルを見て。

「なら、一旦向こうに戻ろう。此処は寒い。ヒーコーでも飲みたいね」

ルバルトとしても、大蛇への恐怖が去って。少し落ち着くと、体が以外に冷えているのを感じた。極限の精神状態で、環境まで極限の状態にいつまでも皆を晒しておけないと判断し。

「だな、悠貴の提案に賛成だ。皆、寒くて殺気立ってる。このままでは、内部分裂が起きる」

悠貴も、アツサリと同意だ。

「だな。放送を送ってきたあのリスクーとか言うヤツ。この状況の俺達を見て喜んでる感じがした。俺達がいがみ合ってバラける様子は、ヤツにすれば面白い状況だろう。野郎にこれ以上お楽しみを献上するのは、正直言つて癪だ」

エルザは、医者立場から。

「アナタって、本当に冷静に分析してるわね。ホントに中学を中退してるの?」

悠貴は、高学歴なエルザに言われてスネる様に横を向き。

「ちゅーたいしてて悪かったな。人を考えたり察するのに、学力なんか要らねー」

すると、ルバルトは悠貴に薄く笑って。

「お前の場合、探偵家業でイヤと云う程に人の生き様や欲を見てるからだろうな」

と、云ってから。皆」。

「さ、行くう。此处は、黙って居るには寒すぎる」

寒さで喋れない者も居る一同。誰もが殆ど他人だらけで、信頼をしると云っても無駄に近い状態だった。だが、悠貴の言う事を皆が部分部分に理解出来た。だから、アレコレと喋る者は出なかった。

16・ルール

悠貴が、ジェイルから紙を受け取り、レクレーションフロアのステージの段差に腰を下ろして見ている。脇には、ルバルト。皆は、周りで囲みながらコーヒーや紅茶を飲んで温まっていた。

悠貴は、その内容を読んで。

「ジェイルのネーサンよ」

悠貴の脇にひっそりと座るジェイルは、青ざめた顔を悠貴に向けた。

「？」

「あのだ。このルール？3にある“破壊行為”って、どのレベルで？」

「施設の壁に穴を開けて移動したり、建物を吹き飛ばすこと・・・

みたい。 そんな行為出来っこないと思うけど・・・」

「いやあ、そうでも無い。 幾つか方法は在るが・・・まあくしない方がイイな」

皆、信じられないと云った表情をする。

ルールは、ゲームを壊さない事を条件としていると明記してあった。 各病棟の各階には、それぞれモンスターが配置されているらしい。 それは、“用意した駒”であり。 動き回る客を殺し狙うハンターでもある。 だが、そのリスクと云うプロデューサーの脚本したゲームのシナリオから著しく逸脱すると判断された場合。 全ての扉及び仕切りのゲートが開き。 モンスターが一斉に襲い始めると云うのだ。 しかも、ペナルティーにもランクが在り。 最悪のランクは、配置していないモンスターも放つと云う物。 ルバルトは、ジェイルに今一解らないので。

「ジェイル、解る範囲で教えて貰いたい。 この開放される最悪の場合のモンスターの数は、どれくらいなんだ？」

膝を抱え、蹲る様なジェイルは、泣きそうな声で。

「数百・・・」

二モンドが、思わず。

「すっ、数百だつてえっ?!?!」

ジェイルは、顔だけ動かし悠貴を見ると。

「第一病棟の地下には、緊急時に患者を外に搬送する大型地下通路が在るの。そこは、今はもう工場のようにモニターが沢山飼われる施設化してるわ。飼育してるのは、捕まった一部の人たちよ」

悠貴も資料から目を外し、ジェルを見返して。

「その捕まって利用されてる人つてのは、地下に居る訳か。助け出せるなら、生き証人になるな」

だが、涙目のジェルは、

「ホンキ？　今まで・・・何人が殺されたと思ってるの？　私達で、脱出出来るなんて・・・」

悠貴は、ルールの書かれた紙に顔を戻して。

「で？　俺等は常にモニタリングされてる訳？」

「そうよ。聞いた話では、第一病棟の最上階と、此処の全体を監視してる場所が在るって・・・」

「ふん」

「でも、今までゲームを切り抜けた人は誰も居ないわ。アナタのお父さんと、ルバルトの友人が最長で10日近く生きただけよ」

エルザは、腕組みを解いて。

「悠貴のお父さんが・・・そんなに生きただけ？」

ぎこちなく頷くジェイル。

「凄く強かった……。でも、まだ貴方達の会っていないモンスターで……。キラや老夫妻を殺したモンスターは別格。人の血を吸って、姿を変えられる……。もし、この中の誰かが襲われて姿を変えられたら……。全員死ぬわ。一度でも皆の輪から離れた人は……。もう変異してる可能性が在る」

この話に一同は、搜索に向かっていた悠貴とルバルトを見る。

見られた悠貴は、詰まらなそうな顔でルバルトに。

「ガー」

と、噛み付く真似をする。

ルバルトは、悪い冗談だと思い。

「止める、縁起がでもない」

「へい」

悠貴は、ルバルトから顔を紙に戻す。

急にワナワナしだす皆の中で、焦るアルチェンが。

「みつみみみみつ・見破る方法はあるのかああっ?!?!?!」

と、ジェイルに歩み寄る。

その形相に怯えたジェイルは、泣き声を上ずらせて。

「かつ・感情の・・・抑揚が無くなるわつ。　せ・せい・性格や・・・
習性とか、こつこ・個性は・・・真似出来ないみたい」

エルザは、離れた悠貴やルバルトなど4人を見て。

「悠貴君やルバルトは感情豊かだし、ジェイルさんは泣いてる。
カーエルも、表情に変化の無い様子は無いし。　まだ、大丈夫みたいね」

しかし、悠貴は現実だからと。　敢えて、気に為る事をジェイルにぶつけて見る事にした。

「確かに、昨夜の晚餐に現れた親父やルバルトさんのダチの姿した支配人とかは感情の変化無かった。　バスの運転手も、13時間ブツ続けで車を運転しても顔色変わらねえからその類だろう。　だがよ、放送をしてるリスキーってヤツには、明らかに感情は有るなま、サデステックな一部分の感情だけでも知れないが・・・。
この俺達の状況を楽しむ感性がある・・・。　野郎は、その仲間じゃないのか？」

「か・彼は特別みたい・・・。　顔の無いモンスターは、彼を丸で王様の様に敬い絶対服従してるわ。　それから・・・」

ジェイルは、横を向いて言葉を止める。

悠貴やルバルト・・・。　そしてラヴィは、ジェイルに夜の女の様な影の刺すのを見つけた。

悠貴は、何故か立ち上がり。

「とにかく、ソイツは向こうに戻る途中で聞く。それより、ルーも確認したし早く捜索に出よう。こんな所でモジモジしてるのは性に合わない。広いなら、それこそ行きたがってる人の武器も探したいしな」

すると、ソウエルが。

「でも、此処にみんな残るのは危険じゃない。何か、向こうで居れる事を考えないと・・・」

その話に、悠貴は気に入らないと云う素振りを見せてソツポを向いた。

「頭使え。　厨房に有るガスボンベ式のコンロと、水を持ってけばいいだろう?」

コールが、そんなぞんざいな言い方をする悠貴に怒り。

「コンロに水で温まる訳無いじゃないか?!?!?!　何処が頭使ってるんだよ?!?!?!」

しかし、悠貴は半目で自分を見る皆を見回し。

「全く・・・。　向こうに転がってる金属なんかを熱して、水を掛ければ蒸気が出るだろうが。　コンロを付けっ放しじゃ〜効果は薄い。　蒸気を部屋に充填させれば、換気のやりようで十分に温度上がるよ。　下手に物を燃やせば有毒ガス出るが、蒸気ならサウナ

と原理は一緒だからメガネが曇るぐらいだろう？ お湯を沸かせば、何か飲めるしな」

「・・・」

誰もが、沈黙して言葉が無い。

エルザは、水道がまだ出るのを考えて。

「向こうに持って行きましょう。厨房のオープンでも、何か出来るかも知れないし。此処は、皆で協力しましょう」

立ち上がる悠貴は、ジェイルを見下ろして。

「さ、先に行くぞ。アンタが疑わしいのは、まだ終わっちゃいないんだからな。俺等と一番危ない橋を渡って貰う」

ジェイルは、ルバルトから借りているコートを着直しながら立ち上がる。

カーエルは、女性のジェイルを連れて行く事に不安を思い。

「悠貴、彼女を前線に連れて行くのか？ バケモノで無いなら、危険だろう？」

だが、ジェイルは、

「いいわ。どうせ疑わしいのは当然だし・・・怖い人に責められるよりこっちの方がいいわ。死ぬなら、真っ先がいいもの・・・」

と、悠貴の脇に歩み出すジェイル。

動きを止めた客達は、ジェイルの悲しげな姿を見送る。

カーエルは、悠貴に。

「なら、僕と一緒に。一応、子供の頃から狩りで銃器の扱いは出来る」

悠貴は、そんなカーエルを見て。

「……。危険だぞ」

カーエルは、真剣だ。

「どこも危険は変わり無い。君やルバルトが死んだら、それこそ自分達で命を張る事に成る。少しでも慣れたいんだ……。嫌だけど、助かりたいから……。この異常に……。少しでも慣れたい」

悠貴とルバルトは、カーエルの事を見ていた。そして先に悠貴が、ルバルトに。

「どーする？ 指揮官はルバルトさんだ。任せる」

すると、ルバルトは皆を見回してからカーエルを見て。

「……、よし。解った。この中で、理性を持って動けるのは至難だ。すこしでも慣れて貰おう。それに、モンスターを悠貴と俺が倒す間、ジェイルを守る誰が必要だ。いざと云う時に、ジェイルを皆の下に戻す護衛も出来るしな」

カーエルは、ルバルトと悠貴に。

「ありがとう」

と。

そんなカーエルを見て、悪戯っぽく笑う悠貴は。

「礼が必要かよ。地獄に近い場所に行く志願してんのにさ」

と、言い。 厨房などの在る廊下に出るドアに向かった。

皆、悠貴と云う人物が理解出来ない。 口が悪い上に一匹狼気質で、他人を知らぬ存ぜぬの様な態度で扱う。 だが、何処か人情と云うか、仁義と云うか。 人としては、真っ直ぐな一面を見せる。

ドアを開けた悠貴の後ろにジェイルが続き、カーエルが廊下に出る。最後のルバルトは、エルザを見て。

「何か在ったら、大声で知らせるんだ。悠貴から受け取った通信機は持つてるな？」

エルザは、方耳に装着するマイク付きのイヤークンクターを着けるフリを見せて。

「大丈夫よ。悠貴くんが持つてないのは気に為るケドね」

ドアを閉める前にルバルトは。

「アイツのは、骨伝道タイプのだよ。歯に付けてある」

「え？」

驚くエルザは、ドアを閉めたルバルトの方を見た。その瞬間に、突然。

「聴こえてる。悪口もヒソヒソ話も筒抜けだぜ」

と、エルザの持つコンタクターから悠貴の声。

「まあ」

悪い悪戯としか思えないエルザは、驚きしか無かった。

さて、先に廊下に出た悠貴は、ジェイルから受け取った紙をヒラヒラさせて。

「全く、人の陰口叩いちゃいけないって教わらなかったのかね？」

あのセンサーはよ」

追いついたルバルトが、鼻で笑い。

「フーン。お前さんは教わったのか？」

「たりまえダゼ」

「ふうん」

中途半端に頷くルバルトを他所に、悠貴は、ジェイルから受け取っ

た紙を見て。

「要は、あのムカツク放送ヤローの用意したアドベンチャーコースを壊したり逸脱する破壊行為は禁止って事らしいね。壁や床に穴を開けたり、建物を大きく壊したりしちゃイケないって、我儘だぜ」

ルバルトは、厨房を覗きながら廊下を曲がり。

「かもな」

カーエルは、その話に驚き。

「まつ、まさか……。施設を壊す事が出来るのか？」

ルバルトは、誰が聞いているか解らない中で、あの爆弾の事を喋りたく無かった。だから、悠貴と二人きりの秘密にしてある。

だから、悠貴は先に。

「何らかの手段が有ったと仮定してだ。いや、壁の一部ぐらいなら、調理場に有るガスボンベと銃の火薬でも爆弾は出来る。手っ取り早い手段を封じられている事には、変わり無いって事さ」

ルバルトも話を合わせて。

「だな。だが、施設を爆破した所で逃げ道に繋がる訳では無い。悠貴が言ったが、先ずは脱出経路と手段の確保を探した方がいいな」

カーエルは、ジェイルと肩を並べながら。

「どつやつて？ 何処に在る？」

悠貴は、いい加減に。

「俺達が乗って来たバスとか、何らかの移動手段は何処かに在るさ。ただこのルールを見ると、外に出るルートは指定されていて、そのルートを外れるとペナルティに為るみたいだ。戦える皆に武器を回す前にペナルティを食らつたら・・・」

ルバルトは、後を受けて。

「死者が出るのは必至だな」

最悪の事態を想像するカーエルは、身体から血の気が失せる音を聞いた気がする。だから、悠貴に。

「じゃ、このまま奴等の用意した罠かもしれないルートに行くのか？」

「し〜か無いね。まだ行方の解らない人居るし、このゲームを歩く内は罠でも計画されたシナリオの“道”を通れる。ゲームを壊せば、夥しいモンスターを一斉に相手しなきゃ成らない。俺はいいが、皆さんは困るでしょ？」

「あつ当たり前だろうっ？！..」

「だから、先ずは生ぬるい今の内に動ける所を把握して行こうって事よ。シナリオを引けば、こつちも規制されるが、向こうにも規制が出る。現に、この建物に配置されるモンスターが此処まで来

ないのは、そのシナリオの規制の御蔭だと思うぜ？」

カーエルは、冷静に分析されて戸惑いながらも。

「た・確かに」

ルバルトは、病棟に向かう関係者通路の前に来て、その扉を開くと。

「向こうがモンスターを枠に入れて潰し易くしてくれたんだ。先ずは、その気遣いに肖って一つ一つ行こう。俺達が生き抜いて先に進めば、黒幕に近づける。黒幕の近くには、今知ることの出来ない情報も在るはずだ」

「なるほど・・・」

考えるカーエルに、ドアを越えた悠貴が。

「ま、それはまだまだ先だ」

「え？」

顔を向けたカーエルに、悠貴は真剣な顔をして。

「俺の親父は、過去に曰くを持っててな。あの親父がルバルトさんのダチと二人で10日生き抜いたって事は。俺やルバルトさんが必死こいてもそれだけの日数が必要だって事だ。それに、この建物は広い。戦えないアン人達の元にも定期的に戻る必要も在るから、この先の病棟を調べ回るだけでもかなりの時間を費やす。

閉鎖空間は精神を圧迫し、その内引っ込んで誰もが直情的に成るだろう。何れ、内部からパニックを起こす可能性も在る。今の

この分業は、持って3日……。それ以上は、何時みんなの纏まりが崩壊してバラけてしまってもおかしく無いね」

ルバルトは、人の精神の事を良く読んだ見解だと思う。

（コイツ、精神学や心理学も知ってるのか……）

悠貴は、コンクリートの階段を下り出しながら。

「前にも似た経験があつてさ。もし銃を扱えるみんなに銃を渡すなら、本人が嫌に成るまで俺達と一緒に歩かせた方がイイかもな。まだ、向こうの誰もがこの恐怖を知らない。知れば、寧ろ協力的になるかも」

ルバルトは、悠貴の後ろから歩いて黙る。

（果たして守り切れるか……）

正直、自信が無かった。

だが、あの大きなムカデのモンスターなどが現れた地下通路を歩く時。黙っていたジェルが、悠貴に向かって。

「ありがとうね。連れ出してくれて」

「え？」

カーエルは、自分の横のジェルがいきなり言つのに驚いた。彼女の言つた意味が解らない。

だが、悠貴は。

「随分と嫌な目に遭ってみたいだな。 顔の感情が壊れ掛ける。 . . .、で？ 地下の事を聞きたい」

ジェイルは、拒否の滲む顔色で鈍く頷いた。

「第一病棟地下には、二つの施設が有るわ。 救急地下鉄道を引き込んでいた地下トンネル線路と、大きな地下駅。 そこは、今はもう山の麓で崩落事故が有ったみたいで塞がって出れないみたいなんだけど。 モンスターの飼育庫として、使われてる。 もう一つは、その地下駅の上で、地下1階から3階にまで広がる元の緊急手術室と倉庫よ」

ルバルトは、百足が腐ってドロドロに成った先に抜けてからジェイルに振り向き。

「“崩落で塞がった”？ 確かなのか？」

カーエルも逃げ道に為るかも知れないと思ってか、ジェイルに近づく。

「確かなのかい？」

ジェイルは、難しい顔を横にして。

「見てないから何とも言えないわ。 でも、私の前に捕まった人二人が、私が捕まった直後にモンスターの飼育をするフリをしてトンネルの先に逃げた事が有ったの。 リスキーに直ぐ連絡が行ったわ。 だけど. . .、リスキーは逃げられないから、数日してからモン

スターを放てばいいって……。実際、その逃げた二人の半裂きにされた遺体を“顔なし”（ノーフェイス）が持って来たみたい」「なる」

と、悠貴は納得する。

ルバルトは、現実に見ていない段階だと思い。

「悠貴、確かめてない事だ。納得は出来ないぞ」

しかし悠貴は、身を返して病棟に歩き出し。

「いや。原因は何にせよ、その穴は塞がれてるハズさ。俺、その穴の旧地下鉄トンネルに警察と入った事あるし。確かに、トンネルの途中で行き止まりに為ってるって聞いたぜ」

ルバルトは、悠貴と肩を並べて廊下を歩き出し。

「ホントか？」

「ああ。何年前か前、強盗団がマンホールから旧地下鉄トンネルに逃げ込んだって警察からバウンティー達に応援要請送って来た事有ってさ。親父も含めて、10人ぐらい参加したかな。地下鉄トンネルの奥は行き止まりで塞がってるから、無理に追わずに逃げ道塞ぎながら包囲網を組んでフン捕まえた」

ルバルトは、FBIの捜査官としてその事件を思い出す。

「ああ、あの3年前ぐらいに有った不法入国者とマフィアの吊るん

だ銀行強盗事件だったな。地下室の株券と電子マネーに、銀行に有った有り金を全て盗もうとした大事件だ」

悠貴は、ルバルトに目を細め、

「なんだ、知ってるじゃん。指揮してて、穴に入らなかった訳？
ドブ鼠さんが出迎えてくれたのに」

ルバルトは、その悠貴の向ける小さな非難を無視し。

「俺は参加してなかった。代わりに同僚が数人な」

「ふん」

「だが、お前の情報は有り難くも絶望的な情報だな。これで、出口がまた塞がった気分だ」

「そろ〜ごめんなさいよ」

「いや、見て絶望するより遥かに気楽さ」

黙って着いて来るジェルに、悠貴は。

「で？ その救急手術とかする所は？ 何に為ってるの？」

一瞬言葉を詰まらせたジェルは、伏せ目がちに重そうな口を開いて。

「私達捕まった人たちが押し込められる所で、ツアーに使う色々な備品なんかも其処に。後、病棟全体を監視しているチェックル」

ムも有るはずだわ。建物には、何百ってカメラが壁や天井に埋め込まれてるって……。だから、ゲームの進行を管理出来るみたい」

「なる。所で、今働かされている人って何人ぐらい居る訳？」

「・・・4・50人は居るわ。でも、中の数人は奴等の手先みたいなものよ」

カーエルが、脇から。

「捕まったのにか？」

「ええ。。。人の管理を任されている男3人と、その手下みたいな男5人が私達を支配してる。私は・・・まだ怪我もしてないから、バスガイドとして人前に出るから受ける回数は微々たるものだけど。怪我したり、体に障害を持った女性はその男共の・・・エサみたいな扱いだわ。夜になると小さい監獄みたいな準備室に連れて行かれて・・・一晩中何人も男達から・・・。その泣き声が、毎夜聴こえるの」

すると、急に悠貴の顔がガラリと変った。丸で人殺しの様に鋭い目を前に向け。

「恐怖と権力を傘に着た訳か。そんな奴等をツアー客と一緒に助けたら後々面倒だな。見捨てるか、ウザいし」

ルバルトは、困った顔に変わり。

「おいおい、捕まえて連行する」

すると、悠貴はルバルトに向き。

「ウルセエっ！！！！ そんな堕ちた奴等抱えた上にあんなトーシロウ（素人）の客を抱えられっかつ！！！！ どれだけ危うい橋だよっ！！！！ 俺はダウンタウンの外れに生まれたっ！！ 昔っから体を売ったり奪われたりして涙を呑んでる女を五万と見てるっ！！！！！！ この期に及んで、そんなゴミを助ける理由なんか知らねえぞっ！！！！！！ モンスターのエサにでもしまえばイイんだっ！！！！！！」

悠貴の怒声に、ルバルトも含めた3人は言葉を失った。 NEO
ARCのダウンタウンは、所に困っては暗黒街に程近い。 人生に傷を負った者達が住み暮らす場所……。 悠貴は、そこで様々な人を見て来たのだろう。 それでも、この言い草。

ルバルトは、驚いた。

（コイツ・・・俺より生臭い）

青臭く、そして生身の心が通っている若者を呼ぶ言葉を選んだルバルトは、悠貴に。

「悠貴・・・」

「何だっ？」

「・・・お前の心情は、解る。 俺だって助けか無いさ、そんな奴等なんか。 だが、向こうの側に飼われているなら、ジェイル達よりレベルの高い情報を得ている可能性も強い。 出来るなら、身柄

を確保したいんだが・・・」

「吐かせて映像にでも撮ってしまえよ。とにかく、俺は嫌だ。警官が一緒ならまだしも、こんな潜入捜査の中で危険なヤツを助けるなんて気違いだっ」

悠貴の言葉を聞いたジェルは、どうして皆の前でこの事を話すのに躊躇った自分を、この若者が察知して連れ出したのかが解った。

(このコ・・・、もしかして・・・)

その思った言葉は、人前では言えなかった。

「欲望の産物 FILE 8」(後書き)

どうも、騎龍です^^

G・Wのは入りから、凶悪な風邪を感染されて作成遅れてます^^;

(風呂に10日とか入らねえ)オツサン達にとり付く風邪は悪性
だす:;>:)

さて、更新と成りますが、まだまだ内容が長いので、定期的に更新
致しますが。何分、他に抱える作品の執筆の合間で作成してます
ので、のんびりとした歩調に致します事をご容赦下さい^^人^^

ご愛読、ありがとうございます^^人^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817g/>

[Intelligence crisis ファースト]

2010年10月8日13時54分発行